

Title	散木奇歌集伝本考(一)
Sub Title	
Author	平澤, 五郎(Hirasawa, Goro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1988
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.23 (1988.) ,p.1- 169
Abstract	
Notes	松本隆信教授退職記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000023-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

散木奇歌集伝本考(一)

平澤五郎

序言

偶々、「散木棄詞集標註」を便りに、難渋な解読の起点を探しあぐねる序に、同書の本文との関わりを無視しえなくなる機縁となり、先学の委曲にわたる御勞作^註を前に、いまさらとは思いつながらに、結果的には諸本蒐集と本文校勘とに徒勞な作業を繰返すことに終ったといふべきかもしれない。又、頃年、冷泉家伝来本、安貞二年八月の奥書をもつ定家書写本の発見と、その一部内容をわずか仄聞し、殊更に徒勞の感を拭いえないものがある。同書繙閱の機は望むべくもないとすれば、現時点に於ける私なりの伝本整理もと旧稿整理を思立ったものである。私事にはじめるの非は御諒願ひ、本集伝本の調査の発端が略其儘に本解題の方法論のごときものとなったからである。それは、同標註に看る本文の混態的な校訂本文の再検討である。同註は第一次稿本・第二次稿本とに岐れ、その第二次稿本が略嘉永

三年序刊本にと具現化するのであるが、その第一次稿本の基底本文をなすものは天保十二年篤齋葉山信果書写本である。且つ、その信果本も又八巻本系一本に別系一本を以って補綴した十巻本として構成され、「一本」、「塙」本による朱校を施したものである。振返って同標註本文を看るに、前者に加えるに野口道直本、諸集載録歌等の校合―第一次稿本―を経過し、村上忠順の取捨撰択を俟って安定化された本文にすぎないのである。それは、忠順校訂本文としてそれは又それなりに対処しうるのであるが、祖形たる信果本も又尠くとも兩種の伝本構成を無視しての系統論はありえないのである。いわば本文の混成化する経由を遡及すること、或は、現伝本を構成する混態的要因の分析と解体のごとき基礎経過を試みることなしに措捨しえないという素朴な必要感にせまられたからにすぎない。

更に、円珠庵契沖自筆本に言及すれば、本書も信果本同様に八巻本に古本一本を補配して成るところの一種の取合せ本である。且つ同本には、以下に詳記するごとく、そのきわだたしい欠如本文―十巻本系伝本に対する、以下私に云第四類本系―に対する別本の朱校補記とを併せ配して契沖自筆本は成立っているのである。しかるに、所謂契沖本と称せられるは―三手文庫本以下三本―は上記朱補本文を本文本行化し、いわば契沖校訂本のごときを以て代替しているのが実情かと思われるのである。既に契沖書写本の示す伝存本本来の姿は其処にはない。詳細は当該本解題にゆずるが、本解題の主旨は奈辺に捜査の視座を定めようとしたものにすぎない。

結果として、以下のごとく第一類より第四類系に類別することになった。殊更に異をたて系類の錯雑化を意図するものではなくして、本集の繙閲伝本のかぎりに於ては、その基本的形態としては八巻本系統と十巻本系統に二分するのであり、又十巻本と称せられる伝本に於ても元来は、八巻本を補綴し補足することにより構成された写本である処から派生している場合が多々散見されるからにはかならない。それは又、江戸中・後期に於ける補訂写本という意図

的な本文整定を背後に遡しての十巻本体裁でもあるところに起因するからでもある。そして、それらの伝本系類を成す主なる基底として、その依拠する八巻本の各系統によることとそれを補綴する十巻本との関聯から分岐したいわば意図的構成的系類が、それぞれにある類同性を提示していることによるものと推測されるからである。

翻って本集の伝存本全般を観るに、冷泉家伝来本はともかくとして、両卷未足の八巻本系に比較的古き、といっても近世初期を遡るものではないが蝸集し一系類をなし、且つ十巻本系―私云第四類本系―とは、本文上に於ても稍々特異にして独立な系類をなしていることは否まれない。その上に八巻本系は相互本文比較上、以下類別したごとく、現伝本からは二乃至三系統が想定されるのである。一方、十巻本系は書陵部A本にみるごとく伝来の正統性を示唆する奥書をもつ伝本であり、且つ同類系諸本との間には八巻本系に所見するとき明著なる異同はなくして、同一基盤上に於ける異同本文として対処しうる諸本である。というのは、恐らく同一祖本より派生した伝本として認容しうる―転写経過の異同本文として―事柄であろうかと思われるのである。

この八巻本系と十巻本系との補綴・補配の按排が、本集伝本の図式的な系類の大枠を構成しているのではないかと仮定の許に、四系の類別をひとまず設定したのである。

しかしながら、この八巻本系に看る系類の中で留意されるのは、第一類本の源たる契沖自筆本―墨筆本文―と第二類系(一)諸本との異同の逕庭である。両者を安易に誤脱本文の多寡として処理することは簡易である。同時に又前者に看取される欠如本文―十巻本に対する―をすべて、該本の誤脱本文と認容し去ることも安直な伝本処理としての難をまぬがれぬことであろう。当該解題で縷述した該書独自の語法上の表現を併せ思うと単に現本文上の異同のみならず、その源の遠きが、わだかまりとして猶残るのである。敢て第一類として設定した所以でもある。

第一類本系と第二類本系(一)との相関関係は、確実に、その近邇する諸点は否定しがたいものがある。そのひとつを例示すれば、第一類契沖書写本に於ける朱補本文を本行本文文化すると―その転写三本のごとく―第二類(一)系本の本文に近接することである。云うまでもなく、書写年代を相違する兩類に於て起りうべからざることである。が、一方、契沖朱補伝本―古本―にあっては第二類本系に近き本文を具備することを示唆し、伝存本上に於ては、この期―元禄年間―にも一別系本として対処されていたのであろう。第二類本系を設けた主旨は脆弱ながらも其辺を考慮した結果である。併せて贅言すれば、この第一・二類本系のなかに、本集の成立経過に関するかぎのごときが思われてならないのである。

第三類系諸本は、各本相互に異同を散見する伝本の集りであるが、基本としては、上記八卷本系とは稍々異質な、書承上の変化を含めた八卷本伝本と、十卷本系―細部にわたれば異同あり―の一本との混態を基底としてのごとくである。第二類本系とは隣接しながらに、基幹たる八卷本系と十卷本系に拠る補綴との関聯に於て相互に些少な相違を提示し、混態本的な傾向を然るべく示すと共に―稍々異質な神宮文庫B本をのぞけば―加えて江戸末的な書写者の見解をも相交えているかとの印象が残るのである。

第四類本系については、冷泉家伝来定家書写本が、その鍵鑰を握るものであろうが、現時点的に観れば、本集の完結は第四類本系、就中、書陵部A本・阿波国文庫旧蔵本の行衛にと完結を期していったものと想定され、先学の御推論が然るべく妥当の帰結かと思われるのである。

以上、本集伝本の系類概略を簡述し、併せて本解題の主意を粗陳したのであるが、以下同様に、用語として、欠落本文など、本集の誤脱本文としてすべて使用しているがごとき表現の稚拙はまぬがれぬながら、適切な用語を私に欠くため已むなく多用し

たが、それは、第四類本系、就中書陵部A本・阿波国文庫旧蔵本等に対するものであることをお断りしておきたい。猶、以下に使用する本集歌序番号はすべて新編国歌大観番号に拠るものであることを併せ付記しておきます。

第一類

円珠庵蔵 契沖写―自卷一至卷八・別写―卷九・十

二冊 略称「契」

三手文庫蔵 「今井似閑」写―自卷一至卷十

一冊 同「三」

石川県立図書館李花亭文庫蔵 「江戸中期」写―自卷一至卷十

二冊 同「李」

国立公文書館内閣文庫蔵 大野広城写―自卷一至卷十

三冊 同「大」

第二類

(一)

イ 神宮文庫蔵 「近世初」写―存自卷一至卷八

二冊 同「神A」

志香須賀文庫蔵 「江戸後期」写 存自卷一至卷八

一冊 同「志A」

ロ 1 国立国会図書館蔵 「江戸前期」写 存自卷一至卷八 松平忠房旧蔵本

二冊 同「忠」

ロ 2 国立公文書館内閣文庫蔵 「江戸前期」写 存自卷一至卷八 林羅山旧蔵本

二冊 同「江」

ハ 刈谷市立図書館蔵 天保十二年葉山信果写 存自卷一至卷十 村上忠順「散木棄詞集標註」

第一次書入本

四冊 同「信」

(二)

イ 村上家蔵 〔江戸中期〕写―自卷一至卷四・〔江戸後期〕写―自卷五至卷十・

〔江戸後期（末）〕写―顯昭註 野口道直旧蔵本

五冊 同 〔野〕

ロ 築瀬一雄氏蔵 明治四十五年長岡興家写 存卷一〜三・卷八〜十

二冊 同 〔築〕

第三類

イ 神宮文庫蔵 〔近世初〕写 存各卷零本

八冊 同 〔神B〕

ロ 国立国会図書館蔵 〔江戸後期〕写 存自卷一至卷十 岸本由豆流旧蔵本

五冊 同 〔岸〕

ハ 国文学研究資料館初雁文庫蔵 〔天保〕写寄合書 存自卷一至卷十・付顯昭註

三冊 同 〔初〕

ニ 国学院大学図書館蔵 安永八年小沢蘆庵令写校合本 存自卷一至卷十・付顯昭註

三冊 同 〔国蘆〕

慶應義塾大学附屬研究所斯道文庫蔵 右同奥書本

右同

三冊 同 〔斯蘆〕

東京大学附属図書館蔵 右同 存自卷一至卷五

一冊 同 〔東蘆〕

京都大学附属図書館蔵 右同 存自卷一至卷十・付顯昭註

九冊 同 〔京蘆〕

穂久邇文庫蔵 右同 右同

三冊 同 〔穂蘆〕

第四類

イ 群書類從第二百五十四所収―存自卷一至卷十

三冊 同 〔類〕

書陵部蔵 函架番号155―145 〔江戸末〕写 存卷一至卷十

三冊 同 〔書B〕

京都大学国語学国文学研究室蔵 〔江戸末〕写 存卷一至卷十

三冊 同 〔京文〕

穂久邇文庫蔵 〔江戸末〕写 存自卷一至卷十

三冊 同 〔穂類〕

国立国会図書館蔵 文政十二年内藤広前写・岡田希雄書入本―存自卷一至卷十 三冊 同 「岡」

志香須賀文庫蔵 「江戸末」写 存自卷一至卷十 三冊 同 「志B」

口 静嘉堂文庫蔵 文政十年源轉写間宮永好校合本 存自卷一至卷十 三冊 同 「永」

ハ 静嘉堂文庫蔵 天保十年烏丸光政令写本 存卷九・十 一冊 同 「烏」

ニ 慶應義塾図書館蔵 「萩原宗固」写 存自卷一至卷十 二冊 同 「宗」

ホ 関根慶子氏蔵 「江戸」写 阿波国文庫旧蔵本 存自卷一至卷十 二冊 同 「阿」

ヘ 書陵部蔵 ―函架番号501―723 「近世初」写 題簽・奥書後西天皇宸筆 存卷一至卷十 二冊 同 「書A」

付

刈谷市立図書館蔵 村上忠順自筆 存自卷一至卷十 散木棄詞集標註第二次書入本 三冊 同 「標二」

散木棄詞集標註 十卷 嘉永三年序刊 四冊 同 「標」

註 関根慶子氏「散木奇歌集の研究と校本」明治書院 昭和二十七年、関根慶子・大井洋子氏共編「阿波本散木奇歌集

本文
校異篇」昭和五十四年 風間書房

第一類本系

円珠庵蔵 契沖筆自卷一至八・他筆卷九・十

袋綴、二冊。香色艶出表紙、堅二十七・七糎、横二十・三糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十四・一糎。每半葉十二

行に和歌一行書き、詞書は略一字下げに書写している。

題簽、淡茶色斐紙短冊を表紙左肩に貼付し、「散木奇詞集^{自一}上」、「散木奇歌集^{自五}下」と墨書する。外題筆者も契沖であろう。下冊に「自五／至八」と誌すが、巻九・十両巻も併綴されている。此両巻が別筆であることから推測して、本来、契沖書写本は八巻本であり、後に欠巻二巻を令写補綴したことを示すものであろう。

内題は「散木奇詞集第一（〜十） 春部（〜雑部下）」と記し、その許に又、「源俊頼家集」と誌している。但し、巻二・三・七は「詞」を「歌」に作る。又、巻一には「奇」の左傍に「弃歟後准之」と本集書名に関する契沖私按を朱註している。巻十「雑部」には右傍に「哥イ」の別筆墨校が施されている。

部立は四季各月を小項目とすると共に、巻五を、「祝部」、「別離」、「旅宿」の三項目に、巻六を、「悲歎部」、「神祇」、「釈教」の三項目、巻七・八、「恋部上（下）」、巻九・十を「雑部上（下）」とし、更に巻十は、「長歌」、「旋頭歌」、「混本調」、「折句哥」、「杳冠折句調」、「隠題」、「連調」の七部門に細別する。部立小項目の基本は伝存諸本全て同じくするが、巻五・六両巻の小項目の表記に於て諸本若干の相違がある。後述する契沖本系統諸本に先立ち此処に一括した。

本書には、奥書は存しないが、国立公文書館蔵大野広城校本に、

右散木弃歌集／元禄六年八月下旬得古写本於円珠庵対校了／密乗沙門契沖

の識語が見出され、該書がこの契沖書写本と転写関係にあれば、本書の書写・校勘のおおよその時期は右識語により推測されるのである。

両冊本文墨付は上冊六十四丁、添補紙一葉、下冊一〇五丁。各冊表遊紙にも又「六拾五枚」、「百六枚」と右隅に細

意されるのである。外題に見る「自一至四」、「自五至八」の記述には、自ら当初の契沖本本来の姿態をとどめているのであろう。猶この秋部の補写一紙は巻九・十両巻の補綴前か後かは審らかにし得ないが、略同時期の令補写と推測されるのである。

次に、本書には、上記の墨筆本文に併せ、一書写終了後であろうか一契沖の手跡になる詳細な朱筆の校合・勘物を主とする書入れが全巻にわたり施されている。但し、下冊（巻五〜十）には一部別筆一殊にイ本校合部分一かと印象を受ける手跡も交るのであるが、それも又恐らく契沖の意を介しての書入れであろう。

その(一)は、(イ)本集別本に拠る本文校合・補訂、(ロ)勅撰・私撰集及歌合等に拠る本文校訂、(ハ)契沖自らの本文訂正の傍記、等の本文校勘である。

その(二)は、歌解・語釈・類例歌等、訓詁上の私按を附註したものである。

その(一)(イ)は一覽後述するが、上記墨筆書写本に於ける単なる書写誤脱の補訂という問題にとどまらずに、その依拠本は他の諸伝本には類例をみぬ本集所載歌の欠員・欠落、詞書の疎略・遺脱の著しい伝存本であるところから、別本による補配を試みたとも云得る朱訂である。墨筆本文はもとより、その朱訂対校伝本も識語を欠くがままに猶未詳であるが、転写一本である大野広城校本に誌す、前記の「元禄六年八月下旬得古写本於円珠庵対校了」とある古写本が、その対校本を指すのであろうか。巻九・十両巻の令写・補綴と略期を同じくして一方は自ら同一古写本に拠って校勘の作業をすすめたのもあろうか。しかし猶断定を控えたいのは下冊に見出す別筆朱校^{註一}である。両筆の朱訂は同一本による再度の校合か、或は別時、別本に拠るものかの問題がなお残されるからである。且つ別筆朱訂は巻九・十両巻の手跡と極めて近似し、主にそれは「イ」本の註記が存するからである。あるいは契沖の依拠した底本には既に墨

筆本文・朱訂までを併せ持った伝存本であり、契沖は、該本をその儘に転写し、その後、古写本即ちイ本を得て人をして巻九・十両巻を書写せしめ、併せて下冊の対校を指示したのかもしれない、かとの臆測も生れるのである。しかし、既に孰れその間の事情は迎るべくもない。が、又、共に契沖の校閲を経過したものであることには変りないのはいうまでもないことであろう。とまれ、現存契沖本は尠くとも二〜三種の系統本による混態校本として措置すべきものであろう。

その(一)(四)・(八)、その(二)に就いても前者同様主要なる部分は後述一括するので此処には省刪するが、本書以後の書写諸本に参酌され継承されるところが尠くない点を付言しておきたい。

円珠庵蔵契沖筆写本に於ける書写・校勘・書入れの経過は概ね上述の過程を辿り、所謂契沖校本は成立しているのである。

右記の経過の許に成った本書は、当然の帰趨として相応に複雑な混態的状况を呈している。稍々煩雜にわたるが、以下に順次、各項目に分け、その混淆状况を解体し弁別して、本書本来の原態を考察することにする。

先ず、本書に見出される明瞭なる歌序の誤りにつき誌すと、卷二夏部―上冊三十丁裏―に於て、

堀河院御時二まにてかなまりをうちならさせ給ひてそのひゞきのうちに雨中のなてしことはませ

おはし。^{まし(朱)}けるにつかうまつれる

いにしへは塵をたにこそいとひつれ雨にしほれぬ^{る(朱)}なてしこのはな

泉辺納涼といへることをよめる

楸おふるかた山かけの石井つゝふみならしてもすゝむころかな

と続き、以下三十一丁表終行まで歌順を追い―但し333詞書・歌不載―338番歌をもって終る。同裏第一行は前に返り323番詞書にと移っている。即ち、

皇后宮権大夫師時の八条家にて哥合に野風をよめりける

千載上 夏草をよめる千(朱)
塩みてはのしまか崎のさゆり葉は(朱)に波こす風のふかぬ日そなき」(31才) 338
コ、ニウタナン(墨)

なてしこをよめりける

なてしこの花みるほとた(朱)の心にてみねのみくにを願はましかは 323

と書写する。以下又三十二丁表四行まで歌順を辿り、329番歌までを書写する。次の第五行は再び338番歌(重複)に

戻り、339・340……番と歌序を追っている。即ち、

左京太夫つねたゝ八条家にて泉夏友といへることを

辰の市うるまの清水涼しさにけふはかひある心ちこそすれ 329

上巳出(朱)
汐みては野嶋かさきのさゆり葉に波こす風のふかぬ日そなき 338

樹陰風来

日さかりはあそひてゆかんかけもよしまのゝ萩原風立にけり 339

と書繼がれている。

本書と右記歌序を同じくする伝本は、本書を含む契沖本系統四本と八巻本第二類本系統である神宮文庫本(A)の五本―殆んど同一錯簡と想定される第二類本系に更に一本志香須賀本(A)が存する、同項を参照されたい―が数えられるのであるが、右掲出部分にても明らかであるように、322番と323番の「瞿麦」題の歌群の間に、330番以下の「納涼」、「泉」、「氷

室」題の歌群が挿入している。伝写の偶然にすぎない錯誤ではあるが、既に先行する書写年代の神宮文庫本（A）に於て同様の過失が見出されることから推測しても、契沖依拠本は未詳ながらも、第一・二類の伝本系統には、かかる錯列歌序を持つ転写経過が存したことが想定されるのである。たゞ訝しいことには契沖の校勘註記が何等付されていないことである。

次に、本書の書写に於ては、以下の二ヶ処が特徴的書写形態を示しているので参考までに付言しておく。因みに前者同様に契沖本系統四本共にそれを継承している。即ち、

(イ) 万葉に引歌

石見のうみこつたう(朱)の山の木のまよりわかふる袖を妹みつらむか

風をいたみうつたの山に散花やふりけむ袖のなこりなるらん 春部 11

(ロ) 経年恋

万万云たれのこのすす(朱)鶏吉にいりかよひきね／たらちねのはゝかはれは万(朱)にイ(朱)とてやとかせとまうさん 此二行異本在経年恋本ノマ、(墨)下下云

(朱別筆歟)

年れとイ(朱)ふともこすす夫木三十六のきけきの絶まよりみえししなひは倂にたつ 恋部下 1175

である。(イ)(ロ)共に万葉引歌であるが、何故か本行として書写している。契沖も又、依拠本の形態に従い、其儘に継承書写したのであろう。(ロ)引歌下の朱註「此二行異本在経年恋下云」の異本は本書下冊―主に巻七以下―に散見する「イ」本校記と同じくするのであろうが、その対校本―広城校本記「古本」歟―には万葉引歌が詞書下に細記されているのを、かく朱註したものであろう。本集伝本中には松平忠房旧蔵本以下数本にまますみ散見されるが、いずれも細註の形式

をとり、その点、本書併びにその転写本系と以下二本のみにみる特色である。本書と全く同じくする書写形態をとるものは、上記神宮文庫本(A)・志香須賀本(A)の両本にすぎないが、前述した錯列歌序と同様に伝写過程上に於ける両者の交渉の一端を暗示するものが窺われるのである。

契沖書写本―乃至その依拠本は先に縷述した如く、二・三種の系統より成る混態本であるが、朱補・訂等を交えながらも其基底をなすものは墨筆本行部分であり、種々の錯落を含みながらも一伝本系統として継承されてきたことは否めない。それは、巻九・十の補綴両巻は除くとして、八巻本系統上の伝本としても本集伝本上、類例をみぬほどの特異な位相を占めるものであるかと想定されるのである。しかも本書の転写本系をなす三手文庫本以下数本が、此朱補・訂の校勘本文を交える混態本文を一意契沖本文としてあたかも一系統本の如くに書写し、又その過誤を是認されて来った現在、伝本系統上あらため整理・検討するの必要がある。従って、まず以下に、両者を弁別し、便宜上、(一)契沖書写本の墨筆本文に見る欠員歌・欠文、(二)同本朱筆―まゝ墨筆を含む―補訂校異歌・詞書本文、の両項を一覧することにしたい。(一)は新編国歌大観の底本である書陵部本(A)の本文により、(二)共に、掲出本文の許に、「三」、「李」、「大」の略称を用いて異同を示す。それは、それぞれ契沖本系統である三手文庫本・李花亭文庫旧蔵本・大野広城校本である。「契」は記すまでもなく契沖書写墨筆本文である。

(一)

1 東北院の花さかりなりとる(契・三・李・大本)聞て……梅花もさかりにておもしろかりけるに『鶯をとつれてすきかたかりければた
ちとまりて侍けるに』人くは過(契・三・李・大本)すきにければよめる 春部引詞書『簡所、契・三・李・大本ナシ、但シ大本は群書

類従本を以て補校傍記。

2

堀川院御時賀陽院殿におはしましける比ナシ(契・三・李・大本)ころ(契・三・大本)・舟にのせ(契・三・李・大本)と(契本、但ミセチ)・ふねにのせさせ給○てあそはせ給○けるに『まいりて
池のみきはにさふらふを御らんして』俊頼いたる(契・三・大本、又上記三本さふらふト傍記)舟(契・三・李・大本)さふらふめりふねよりさりぬへからんこといひかけよ……同101詞
書 契・三・李・大本ナシ、大本同校傍記。

3

はるのこまをよめる
春駒はあさかのぬまにあさりしてかつみのうらはふみしたく也 同157詞書・歌 契・三・李・大本ナシ、大本同校傍記。

4

はしかきにさとをはかすれすとかけり 同187左注 契・三・李・大本ナシ、大本同校傍記。
をくにあまのおふねもとかけり 同198左注 契・三・李・大本ナシ、大本同校傍記。

6

浦卯花
卯の花のころをいなれやいそのうらにたつしき波のをるかと思へは 夏部203歌 契・三・李・大本ナシ、大本同校傍記。

7

数ならぬわれとはなしに郭公よ(ママ)のそのはなのかきねにそなく 同217歌 契・三・李・大本ナシ、大本同校傍記。
但し、契沖本書入れあり、以下三本共に移写す、即ち、216・217番詞書を併記し、「コ、ニウタナシイカ、哥合ノウタ此題歟イカ、本ノマ、」と墨注、又、「下にかきねにはもすのはやにへといふ哥ありこゝに有へき歟」と朱注。

8

郭公をよめる(ママ)
ときつくりなかね雲井にとゝろきてほしのはやしはうつもれぬらん 同244詞書・歌 契・三・李・大本ナシ、大

本同校傍記。

9 泉をよめる

いし井つゝ隙もる水にたはふれてつてにも夏をきゝわたる哉 同333歌 契・三・李・大本ナシ、大本同校傍記。

10 秋きては忍ひなあへそと思へはや風をとつれてくれかゝるらん 秋部372歌 契・三・李・大本ナシ、大本同校ナシ。

372番詞書の許に、契沖書入れあり、三本共に移写す、即ち、「コ、ニ哥ナシ」と墨注し、又次行余白に、

次郎百首に秋風

秋きてはしのひなあへそと思へはや風おとつれてくれかゝるらん 此哥歟

と朱補す。

11 家道朝臣 冬部658作者名 契・三・李・大本ナシ、大本同校ナシ。

12 みつきといふはつくしのふのかとてなり 恋部上1039左注 契・三・李・大本ナシ、大本同校傍記。

※ 13 夜恋

夜とゝもにたまちる床のすかまくら見せはや人に夜半のけしきを 同1059詞書・歌

経年恋

君こふとなるみのうらのはまひさきしほれてのみもとしをふるかな 同1060詞書・歌

右両首、契・三本朱補朱注稍々錯雑するを以て次に掲出例示する。

夜恋

金恋上(朱補) 国信卿の家の哥合に夜恋の心をよめる(朱補)よる(朱補)
よとゝもに玉ちる床のすか枕みせはや人によはのけしきを

新古今恋二年をへたる恋といへる心をよみ侍ける(朱書入)
君こふる(見消チ、とト訂ス)なるみのうらの浜楸しほれてのみもとしをふるかな
(経年恋歎(朱補))

三・大本、契本同。但し、大本1060「君こふる」歌を朱細書する。
李本は契本朱書入れを誤り、1060番詞書とする。即ち、

年をへたる恋といへる心をよみ侍ける

新古今恋二 経年恋歎
君こふとなるみのうらの浜楸しほれてのみもとしをふるかな

14 四条宮甲斐 同1100 契・三・李・大本ナシ、大本同校ナシ。

15 あさましやこはなにことのさまそとよこひせよとてもむまれさりけり 恋部下1136歌 契・三・李・大本ナシ、大本同校傍記。

16 海路恋 同1160詞書 契・三・李・大本ナシ、大本同校傍記。

17 阿闍梨 雑部上1304作者名 契・三・李・大本ナシ、大本同傍記ナシ。

18 ちぎりしことゝもをわすれにけるにやことさまに思也(なり(契・三・李・大本))『にけりときこゆる人のかりつかはしける』 同1379歌

『』箇所、契・三・李・大本ナシ、大本同校傍記。

※13は本例文として稍々不相応ではあるが、李本との関係上、当該部に加えた。

(二)

1 雪はふれとつもらさりけるをみてよめる(朱細補)
春部40詞書 三本朱補同、李・大本朱補本行。

2 夏衣たちきるけふのしらかさね(しらしな人にうらもなしとは(墨補))
夏部194歌 三・李・大本墨補本行。

3 うの花も神のひもろぎときてけりとふさもたわにゆふかけてみゆ(墨補)
同198歌 三・李・大本墨補本行

- 4 さみたれは軒の雫もつれくとふりつむものは日かすなりけり
同 300 歌 三・李・大本墨補本行
- 5 朝戸明て立出る鹿の声きけは跡つかひにもきたりける哉(朱補)
同 472 詞書 三・李・大本墨補本行。 秋部 442 歌 三・李・大本朱補本行。
- 6 掃衣驚夢(墨補)
同 472 詞書 三・李・大本墨補本行。
- 7 ……あさ夕の御いとなみなんみえしこの事はにたつさはれる人をはそのむしろにもてはやさせ(朱補)
同 504 詞書
- 三・李・大本朱補本行。
- 8 九月十三夜殿下にてよめる(朱訂)イ无(朱)法性寺関白 同 536 詞書 三・大本「九月十三夜殿下にてよめる 法性寺関白 イニ无」、李本
「九月十三夜殿下にてよめる」とイ本注記を欠くが、三本共に朱訂本行、又「このこと書云々」移写す。
- 9 秋の山の月をみるといへる事を(朱補)
同 538 詞書 三・李・大本朱補本行。
- 10 千鳥をよめる(朱補)
冬部 620 詞書 三・李・大本朱補本行。
同し心を
- 11 をし鴨のかつく岩間のうす氷けさや上毛にとちかさぬらん(朱補)
同 644 詞書・歌 三本朱補同、李・大本朱補本行。
氷閉水
- 12 せきりせしさのな川つらゝみていくるに波の声たえにけり(朱補)
同 646 詞書・歌 三本朱補同、李・大本朱補本行、
- 大本「いくる」を「いく野」に作る。
- 13 池の氷といへる事を(朱補)
同 649 詞書 三・李・大本朱補本行。
- 14 氷をよめる(朱補)
同 650 詞書 三・李・大本朱補本行。

- 15 同し心を(朱補) 同653詞書 三・李・大本朱補本行。
- 16 山雪をよめる(朱補) 同655詞書 三・李・大本朱補本行。
- 17 山の雪をよめる(朱補) 同663詞書 三・李・大本朱補本行。
- 18 衣手のさえ行まゝに神なみのみむろの山に雪はふりつゝ(朱補) 同667歌 三・李・大本朱補本行。
- 19 山路雪(朱補) 同675詞書 三・李・大本朱補本行。
- 20 数そふと歎も しらぬ年のうちにいそきたちぬるはるかすみかな(朱補) 同679歌 三・李・大本朱補本行。
- 21 百首哥中に除夜を(朱補) 同681詞書 三・李・大本朱補本行。
- 22 返し 加賀守(朱補) 別離741詞書・作者 李・大本朱補同、三本詞書朱補同・作者名欠。
- 23 経兼(朱補別筆歎) 同746作者 三・李・大本朱補本行。
- 24 肥後君 旅宿754作者 三・李・大本朱補本行。
- 25 ふちとゝいふ所にとまらんとしけるに 追風吹なんとすまた日も高くとてよらて過ければよめる 旅宿769詞書
- 三・李・大本朱補本行、李本「高く」を「高し」に作る。
- 26 例ならぬ人のふねにあるかくるしかると聞て そひ舟にのせうつすを聞て(朱補) 悲歎部810詞書 三・李・大本朱補本行。
- 27 おまへといふ所にて風ふきなんとする……いひさはしをきゝてそのかみに侍てければみてくらたてまつると 同817詞書 三・李本朱訂に拠る、大本「いひさはく」と本行にするが、次の「侍てければ」は契本同様に本行見消ち「イニナン(朱訂)」と傍記。

ニナン」と傍記。

28 君こふる涙の滝におほゝれてふりさけさけふ我声はきこゆや 同844歌 三・大本朱訂同、李本朱訂欠。

29 田上に侍ける比かみのさとといふ所に……鳥るの有けるまへに道しるへのものゝおそろしければいかなる神の
おはしますそと尋ねければ(朱補別筆敷)もちゐの宮と申神のおはしますといふをきゝて 神祇867詞書 三・李・大本朱補本行。

結縁経かきける人のほうし(法師品 朱訂)の心をよめる(ませけるに 朱訂)

30 君かためかけるみのりの水くきにわかみをさへもすゝきつる哉(朱補) 同871詞書・歌 詞書大本朱訂「法師品」本行

「よませけるに」朱訂同、三・李本朱訂本行、歌三本朱補同、李・大本朱補本行。

31 神力品の心をよめる(朱補) 同872詞書 三本朱補同、李・大本朱補本行。

難思光仏

32 人はいさひかりのすちをしるかす(す朱訂そ)ともおなし仏やしらはしるらん(朱補) 同892詞書・歌 三・李・大本朱補本行。

33 勢至は弥陀のむかへさせ給ふ人をきよくすゝき給ふちかひましくてかならずくし給ふ(朱補別筆敷)といふことを 同913詞書

三・李・大本朱補本行。

雙観経文四十八願中その国にはきよくさかなり(朱訂)かはりていかにあしきおもむきのことなしといへることをよめる

34 あしさまのことのゆかりは大かたのみゝのつてにも聞えさりけり(朱補) 同918詞書・歌 詞書三本「さかりて」・大本「な

りかはりて」・李本朱訂本行、歌三・李・大本朱補本行。

その国に生れぬる人は昔のことをしるさととりをえてそのかみの事をしるといへることをよめる

35 あさましやちよの法にもあはすして六の道にもまとひぬる哉 同919詞書・歌 三・李・大本朱補本行。

たぐひなき光といへることをよめる(朱補)

36 さりととも猶かことにも頼む哉つもれるつみもたくひなければ(補朱) 同930詞書・歌 三・李・大本朱補本行。

おもひかたき光といへることをよめりける

37 そのほとゝおもひかたきはよもの海にそこひもしらぬ心なりけり(朱補) 同936詞書・歌 三・李・大本朱補本行。

38 諸の衆生をみちひかせおはしますちからによりてなん此世にはいましけるといへる事をよみ侍ける 同949詞書

三・李・大本朱訂本行。

もろくの花くさく咲みたるといへることをよめる(朱補)

39 そこはくの花のひもとく庭の面にをしのけたるは蓮なりけり(朱補) 同958詞書・歌 三・李・大本朱補本行。

40 天飛やかるの社『に身をなしていはし根のさかへ(見消テ、え)てそみる』(朱訂) 同971歌 大本朱訂同、三・李本朱訂本行。

41 をんな(朱補別筆歟) 恋部上1008作者 李・大本朱補本行、三本欠。

返し 女

42 いはまもるたえまをまつ(もるイ)はくるしとも思ひしれかしやまかはのみつ(朱補) 同1050詞書・作者・歌 三・李・大本

朱補本行、李本イ校欠。

43 誰をかも定めぬ山の山ひこもうはの空にもよふことり哉 同1079歌 三・李・大本朱訂本行。

返し 我としきはこたへさりけり(朱訂)

44 をしなへてこたへぬ山の山ひこをうはのそらにもよふことりかな(朱補) 同1080詞書・作者 三・李・大本朱補本行。

45 ならの哥合に人にかはりてよみ侍ける(墨補)よみ侍ける「イニナン」と朱校 恋部下1204詞書 三・李・大本墨補本行、イ本朱校同。

恋の心をよめる

46 こひすとも身のけしきたにかはらすはいはぬに人のあやめましやは(朱補・別筆歟) 同 1221 詞書・歌 三・李・大本朱補本行。

47 皇后宮のこきてんにおはしましける比細殿にて人にも申けるに女房のうへのほるとてみち見くるしたはし(朱校・別筆歟) 同 1230 詞書 三・大本朱校同、但し大本朱校「此たマテ：」、「此かたマテ：

くらしとしてしはしたたと女房の申ければ……同 1230 詞書 三・大本朱校同、但し大本朱校「此たマテ：」、「此かたマテ：

……」に作る。李本は朱訂を欠き、「みちはくらしとしてしはしたたと女房の申ければ……」とす。

以上、(一)・(二)が契沖書写本に於いて、十卷本系統の代表的伝本—書陵部本(A)等—に対比して見出される本文異同—但し歌序排列は後述—の大略である。

前記した如く、本書は十卷本系統はもとより、八卷本系統本に比しても未載録歌は尠ならず、詞書に見る記述も書写・転写経過に於ける累積的な誤脱本文として、すべて対処すべきかとも一見感得せられる。事実、又、誤写・誤脱本文と認めざるを得ない箇所もその一半を占めることであろう。しかし、一方仔細に検すれば、記述の疎略・未定の本文として読み得ることも可能である一面を併せ持っているのである。この課題は、いま暫く措くが、ともかく本書は契沖本本文として継承され、本集の一伝本系統をなしているのである。

しかし、従来、この契沖書写本は、管見するところ細部に亘る検討を経ることなく、その転写本たる大野広城本を以て代表し、契沖本本文として誤認されて来たのである。煩雑を避けずに、その書写の状況を繁辱掲出したのは這般の実情の一端なりとも明らかにする所以でもあった。契沖自筆本が尠くとも上述の経過の如くであるとすれば、更に云うまでもなく、本書は単一伝本上の本文として処遇することは出来得ずして、複数本に拠る混淆的要因を併せ持つところの構成本文であることが判明するのである。

この契沖書写本を転写したのが、三手文庫本・李花亭文庫本・大野広城本の三本である。その転写経過は必ずしも明らかではないが、いずれも転写に際しては、上掲一覽(二)に見るごとく、本書の朱筆補・訂(一部墨筆を含む、以下同)に従い、いわばその混成本文を契沖本本文として継承し本行化している。わずか、各三本は書写に於て、朱補・訂の本行化に於て任意な選択が働いたものとみえ、(二) 8・11・12・22・27・28・30・31・34・40・41・47等の例にみる如く、兩三本間には些少の小異が散見され、或は一・二の錯誤・誤脱が見出されるのであるが、転写本文としては当然予期されるところであるといえよう。寧ろ、ここに論ずべきは、この転写三本が混成本文であることであろう。その他伝存本中にも契沖本に拠る校合を施すことまゝ偶目するところがあれば猶更に留意されるのである。

この点に視点をおけば、契沖書写本は(イ)八巻本文、(ロ)卷九・十補綴本、の兩本から成ると共に、(イ)八巻本も又、(A)本来の墨筆本行と(B)朱筆補・訂の傍記本文に解体されねばならない。(ロ)卷九・十は別筆でもあり、ひとまず措くとして、(イ)(A)の墨筆本文は或る一本の伝存本を意味し、朱筆補・訂本文とは別する必要がある。而して、この墨書本文は、上表(一)の欠員歌・欠文と(二)の朱筆補・訂の部分に欠如する一伝本の存在を想定せざるを得ないのである。本書には奥書・識語等を見ぬので如何なる伝存本かは知るべくもないが、いずれにせよ現存諸本に比し、収録歌員の尠い伝本―たとえ欠落本文著しき伝本としても―であることは認めざるを得ないのである。現存伝本の中には当該伝本を全く見出すことは出来ないもので上表(一)・(二)に従い、各項本文と伝存諸本との関聯を以下に概括することにする。

就中(二)は契沖本の特徴的本文現象を構成するものであるので、伝存本に於て、この特徴を共有する伝本を類別すると、

a 18・30・31・34・35・40・46、の七項―第二類本神A・志A本同欠

b 2・7、の二項―同神A・志A・野本同欠、又8の一項―同神A・志A・野本同

c 9・25・26・41、の四項―同神A・志A・忠・江・信同欠―以上第二類、八卷本系、但シ校合追補本文ヲ除ク、
以下諸本同―、又、9・26・41、の三項は野本同欠、神B・岸・初・蘆本同欠―以上第三類、十卷本系―

d 23・37・39、の三項―第二・三類系諸本同欠

e 32、の一項―野本同欠、第三類本系同欠、又第二類本系神A・志A・忠・江・信本は歌のみ欠
以上、aとeが契沖本本文の特異現象を共通する伝存諸本である。

が、一方、上記の如き類本を共有せざる契沖書写本本文としては、

1・3・4・5・6・10・11・12・13・14・15・16・17・19・20・21・24・27・28・29・33・36・38・42・43・
44・45・47

の二十八項を数え、纔か四十七例の掲出文中の過半を占めるのである。しかし、この著しい本文異同はすべて書写
経過上に於ける誤脱と断定するには余りにも甚だしき現象であり、書写上の過誤としてのみ一蹴しえない一面を持つ
のである。やはり転写上の錯脱は一方に併せ持ちながらに一系統本の嘗つて存したことをも暗に示唆するものではな
かろうか。とまれ、八卷本系の中でも特異な位相をとどめているのである。

さて、叙述は前後するが、前記の類本本文にかえてみると、一見して明瞭であるのは、第二類本系八卷本と本文
を同じくするところも又相当の箇処に及ぶことである。就中八卷本系中、神宮文庫本(A)・志香須賀本(A)とは、
e項の一箇処を除き、すべて共通するのである。両本との関聯は(二)のみにかぎらず、当然の事ながら(一)に於ても顯著
であり、両本とは本文系統上に於て伝存本中では最も隣接する位置におかれるのである。

次に、(一)に立返ると、前述の契沖書写本に見る朱補訂・校勘本文に拠り転写された三手文庫本以下三本、所謂契沖本系は(一)の特徴をのみ持つ伝本として変成し、元来の契沖本とは異なる、いずれともつかざる混態本文として一系統をなすこととなり、一般には其を以って契沖本本文として使用されているのが事実である。更に厳密に推論すれば、契沖が朱筆補・訂に当り依拠した伝本的特質をも併持する校訂本にと再構成を経た一系統本が生じたのである。その伝本的特質を併持したと記したのは所謂契沖本と本文を同じくする伝本はこの期以前に存しないからである。ともかくも(一)は契沖本転写本文に見出される顕著な特徴となっている。

前例に従い(一)各項に於ける共通伝本の関聯を誌すと―但し以下付記の伝本中には、4・5の左注のごとき補入本文又校合追補本文を所見するものも散見するが、原本文と区別し、これを除く―

- a 10、の一項―神A・志A本同欠
 - b 4・5・11・12・15・16、の六項―第二・三類本系諸本同欠、但し築本11・12は欠巻部にて不明
 - c 17の一項―巻九・十両巻に入り、第二類系では信・野・築本同欠、十巻本では、第三類本系諸本同欠、但し神B本欠巻部不明、第四類本系諸本同欠、但し書A・阿本存
 - d 18、の一項―第二類本系野・築本同欠、第三類本系蘆本同欠
 - e 14、の一項―第三類本系斯類本同欠、第四類本系類本系同欠
- である。一方、本書並びにその伝写本に所見するのは、

(異) 1・2・3・6・7・8・9・13

の八項と同様にその半ばにおよぶのである。

概ね以上の類別にて所謂転写契沖本の実体の概略は判明するのである。意図的校訂になる混態本文は当然の事ながら現存伝本中に共有類形を見出すこと尠く本集伝本としての意義は慎重な対処によるのをまつのほかはないのである。

かく混態本文ではあるが、その成立は(イ)契沖書写墨筆本行本文、(ロ)同朱補訂本文、(ハ)「イ」本等校訂本文、のおおよそ三種の依拠本による混成であり、概括すれば(イ)の基底の欠陥―十巻本より見る―の補正を試みたことであり、結果的には補訂により対校本の持つ系統的要因に惹かれて、元来の伝来的意味を稀薄なものとし、対校本的傾向を増幅することとなったとでも云うほかはない。上記の類別によっても共通本文十箇所の中、b項は六箇所、過半を占め、従つて第二・三類系諸本とは、その点近似関係が見出されるのである。なかでも、a項は神A本・志A本―共に第二類系本―は纔か一箇所にすぎないが特異に共有し、此処に於ても又、八巻本第二類系本の中では神A・志A本が隣接する関係にあるのである。勿論、相違本文は(異)1……13の八項と略過半するが、それは契沖書写の墨筆の独自基底本文と見れば、朱筆補訂の対校本は自ら系統上に於ては八巻本第二類系本に属する伝存一本であつたらうと想定することも可能である。他c・d・eの両三項は共に第二類系本に欠く―補写を除く―巻九・十の巻第に当り、該契沖書写本も又補綴部分であることから、この両巻は当然ながら別して対処すべきものである。が、いずれ縷述することとならうが、十巻本系、主に第四類系諸本中の異同に帰することであらうかと推量されるのである。

次に、本書の歌序排列に就き、その異同を掲出する―但し、前掲の錯綴部分と朱補・訂部分を除く―。

(一) 夏部

ならの哥合に人にかはりて郭公をよめりける

下にかきねにはもすのはやにへといふ哥ありこゝに有へき歎(朱)

時鳥初音は空にとまらねとわかぬ名残になかめつるかな 216 但し、216歌ハ216・217詞書ノ間ニ移スベキ朱訂符号アリ

三・大本同、李本朱訂ニ拠ル

(二) 同部

殿下にてほととぎすの哥人くよませける夫木(朱)たまひける

初なき夫木(朱)より身の初より時鳥あかても世々を過しつるかな 223

郭公こゑ待つけて聞ほ(墨)とや人にわか身のうらやまるらむ 225

なかくとも鳴つといはんほととぎす人わらは(朱)われにならしと思へは 224

ほととぎすなかなけきの森にきていとともこゑを(マ)ほしめつる哉 228

しとみ山風はおろせとほととぎす声はこもらぬ物にそ有ける 229

郭公まちしわたらは八橋のくもてのかすにこゑをきかはや 226

ほのめかすうきたの森の時鳥しのひねに夫木(朱)おもひしつみて明しつるかな 227

かきねにはもすのはやにへたてとけりしてのたをさに忍かねつゝ 230 三・李・大本同

(三) 同部

大式長実白河の家歎(朱)にて郭公をよめりける

続古雜上 郭公を(朱)音せぬは待人からかほととぎす誰をしへけん数ならぬ身を 263

ならの哥合に人にかはりて

ほととぎすなくうれしきをつゆめとも袖には声もとまらさりけり 265

左京の大夫つねたゝの八条にてよめる

郭公声待かねて夕占とふ道のうらにもことよきものを 264

霍公不^{いふ}乏といへる事を^朱

今こそは二むら山の郭公こゑおりはへてあやになくなり^{れ(朱)} 266 三・李・大本同、但大本ハ類本ニテ校記アリ

(四) 同部

おなしこゝろを 300

さみたれは軒の翠もつれく³⁰⁰とふりつむものは日かすなりけり^(墨補)

さみたれは河そひ柳みかくれて底の玉もとなり³⁰¹にけるかな

さみたれを 301

ふり初し日をかそふれはみつかきの久しく成ぬ五月雨の宮^{空(朱)} 302 但シ、300歌墨補ノ後カ、301歌ヲ301詞書302歌ノ間ニ移ス

ベキ朱訂校記アリ。李・大本、朱訂ニ従イ300詞書・同歌・301詞書・同歌・302歌ニ訂ス、二本ハ誤リテ、300詞書・同歌・301歌・301

詞書・302歌トス

(五) 釈教

智慧光仏

千人^{千(朱)}釈教^(朱)の心^{を(朱)}のうちそよそなからしるやさとりの光なるらん 891

不断光仏

ちかひをきて道ひく人の隙なさに光もたえぬものにそ有ける 890 三・李・大本同

(六) 恋部上

人のもとにまかりたりけるにこよひはかへりねと申侍^{イニナシ(朱)}ければよめる

佗人は風の下なる葛なれやよなくくれとかへりのみする 1066

あるましきことそとい^{なとイ(朱)}へる人のかりつかはしける 1068

おもへたゝ袂は露にそほぬれて立やすらし^{ひ(墨)}よはの気色を 1067

人を尋けるにうへにといはせてあひ侍らさりければよもすから立明してかへり^{にイ(朱)}○^{あイ(朱)}ければかれより

いと^{を(朱)}おしういかゝおほえしといひ遣^{たりイ(朱)}し侍ければつかはしける 1067

はるかなる雲^まゐをわたる鴈かねも終にはひま^{ひま}におるとこそきけ 1068 但シ、右詞書上欄ニ、1068 詞書ニハ「イに此前書

次に有」、1067 詞書ニハ「イに此前書前に有」ト朱校註記アリ。三・李・大本同

以上の六ヶ処が見出される。前例に倣って同一排列の伝存本を挙げると

(一)は第二類本系諸本同―但シ野本不同―、第三類本系諸本同―但シ神B本欠巻部不明―

(二)は第二類本系諸本同、第三類系諸本同―但シ神B本欠巻部不明―

(三)は又第二類本系諸本同―但シ築本欠巻部不明―、第三類本系諸本同、第四類本系諸本同―但し書A・阿・宗・永本不同―

である。

従って、本書独自の排列は(一)・(四)・(六)の三例となる。そして三例共に誤脱歌乃至は錯誤により惹起された恐らく伝

写上の誤謬であろうかと推定される。即ち(一)は217歌「数ならぬわれとはなしに^云」の誤脱と想定され、(四)は細書墨補の300歌「さみたれは軒の雫も^云」の脱落による301詞書の錯叙と推測される。但し、(四)に関しては猶一抹の懸念も残り、祖本―草稿本の如き―の原型としてかかる本文形態も溯り措定することは不可能ではない。(六)の例は更に付言するまでもなく、1067・1068の両首は詞書と歌は呼応せず本書の錯乱せる本文の一端を呈示しているのである。

本書の歌順異同は右の錯・脱・叙の三例を除けば、いずれも(一)・(二)・(三)・(四)―伝存本中では第二・三類本系諸本に属し、第四類本系にては纒か(五)の排列を見出すにとどまり、本書併びに八巻本第二類本系を軸に第三類本系十巻本にと展じた如き印象を受けると共に、本集は歌序排列に於けるかぎりでは基本的変遷は尠いものである。第四類本系十巻本への展開は何れ当該系統にて触れることとなるが、本書、又第二・三類本系統の排列の是正という形で移行していったのではないかと推測されるのである。いずれにせよ、本集に於ける歌序の異同は原形的な点では然したる変遷を見ずして本書の如き錯・脱・叙による伝写上の問題に帰せらるべき処が多いのはいなまれないのである。又、あらため付言するまでもなく本書の転写本たる三本は僅か又転写の錯誤を一部見出すが、本書の排列をそのままに継承するものである。

以上、本書併びにその転写三本に見出される本文・排列に於ける顕著な異同の大略である。前記の排列にみる異同の半ばは略誤脱と錯叙によるものと判断され、この点でも契沖書写の依拠本は甚だ誤謬多き伝存本であつたらうことは想像するにたたくないが、翻つて本文の異同を再び顧みる時、あの夥多に及ぶ異同はすべて此をその依拠本の誤脱と認定して措捨すべきか否やは、この排列の事柄同様に対処しえないかにも思われるのである。契沖の書写本文過程

として、仮に第一次墨筆本文、第二次朱補訂・第三次朱校、と三次の補訂・校の経過を想定するとすれば、尠くとも三本の別伝本を披閲し補訂・校合を繰返したこととなろう。第一次書写本文が、前掲異同一覽(一)に見るとき欠落本文を持つ伝存本であるとすれば、第二次補訂本文を具備する依拠本に何故そのまま書写を改めることなく朱補訂の徒勞を敢て試みたかという疑問が呈せられるのが自然であろう。この疑点に逢着する時、ひとつの臆測として、第一次墨筆本文の持つ伝存本文としての意義、認識に立脚した上での事ではなからうかということである。あるいはさらに臆測を重ねれば、契沖書写の依拠本には既に前記第二次朱補訂本文が校記されており、契沖は寧ろ兩筆本文の伝存的意義を認知の上に意図的に弁別書写し、その伝本の持つ本来の系統を重視するところに文献的方法論の一端を斟酌したのではなからうか。架上架を重ねるの難をまぬがれぬも、かかる本文処理の方法が、第三次の校合―大野本識語古本の如き―に於ても、依拠本本文の持つ特質を消失することのない、いわば校訂的な校勘にとどめたのではなからうか、と。又、他集による比較も同様な所謂本文校訂を期するところに存した、と臆測は馳せるのである。

かかる仮定が伝本系統の処理上に於て全く論理の許容を逸脱するものであるか否かは猶細部の検証を必要とするところであるのは云うまでもなからう。そこで、ひとつの試みとしては、伝存本系統論として、本書本文異同表(一)・(二)にわたり、それらが、すべて転写上に於ける偶発的な誤脱本文であるか否かの詳密な検討の上に、その確実な誤脱本文、錯誤書写本文、誤脱存疑本文、のごとき条項の許に、そのひとつひとつを検証することから着手すべきかとの素朴な発想から煩雑にわたる論証を試みたが、結果としては、本書が諸伝本の中にあつて類形を見ぬ孤立的位相から、その祖系を溯源することはもとより至難のわざであり、仮説の累積的推論たるをまぬがれなく、当解題の本旨を逸脱することを思い削除することとした。が、一言付言すれば、現存伝本の系統から概観すれば、不完備ながらも八巻本

系統が、本集の古本伝本の一群を構成し、本書も又その系類一異本として原撰的な素因を其処に溯及する枢要なる対象たることは言を俟たないものと思われるのである。

付記

本書とその転写三本の詞書の中に頻出する本書特有の表現として留意されるのは、その結尾の、「よみ侍りける」、「よめりける」の用例である。そのことは、夙に関根慶子氏「前掲書」により、

この本（大野本）の本文の特色である所の詞書に連発する「よめりける」「よみ侍りける」の口調は、九巻以下に到るとばつたり絶えて他本に現れる以上には決して用ひてゐない。

と、注意を喚起された。もとより、この両用例は本書―契沖自筆本にその源を発するのであるが、伝存諸本との関聯よりすれば、契沖本系諸本とはその頻度数を共有するものは全く存せず、就中、「よめりける」の結びにいたっては、第二類本系神宮文庫A本と志香須賀文庫A本に纔かに一例を所見するにすぎない。ただ初雁文庫本朱校又静嘉堂文庫蔵間宮永好書写校合本の中に、△符を付す一本校合本文の傍記中に散見し、多々共通するにとどまる。

この結びの辞句は、その観点よりすれば、契沖本系独自の用語例として他本とを類別する一視点ともなるのである。この特異用例を示す契沖本系本文の経由は記したがごとく未詳ではあるが、両用例を本書の中に拾掇し、本集伝本系統を搜る一助にと、煩述をさけて備考欄に補述することとした。

備考一

付記した契沖本系に看る「よみ侍りける」、「よめりける」の両用例に就き以下粗述することにする。

まず、本書に所見する文末の「侍りける」の用例より検討することにするが、もとより語法上の本質的意義の分析とはかかわりなく、本書の示す諸例を攷集して、その特異性を具に提示すれば事足りるのである。

従つて、それは極く素朴に、敬語としての動詞又助動詞として用いられる、(1)謙讓語、(2)丁寧語とに大枠を設け分類し別載付註^{註一}することにした。その類別方法は別註に前書きしたが、その揭示に當つては、本書独自の用例を一つ、本書を含む諸本共通のそれを二として参考までに補記し、それぞれ、一―(1)・(2)、(二)―(1)・(2)、と別掲することにした。

偕、本書のみに所見する一―(1)「侍りける」の用例は百八例におよぶ。そのなかの過半八十二例は、「よみ侍りける」と結ぶ表記を示すものである。即ち、別註表に看る、

4	・	10	・	17	・	28	・	34	・	37	・	41	・	47	・	56	・	65	・	66	・	88	・	105	・	140	・	152	・	160	・	171	・	177	・	185	・	192	・	193	・	248	・	293	・	304	・	343	・
1189	・	1204	・	1207	・	1208	・	1215	・	1227	・	1228	・	796	・	798	・	801	・	819	・	848	・	899	・	902	・	935	・	949	・	950	・	951	・	956	・	1124	・	1125	・	1154	・	1159	・	1194	・	1196	・

等である。これら諸例は巻一より巻八迄の所謂契沖自筆本文部分に所見され、以下巻九・十の別筆書写部分には一例も見出されないのである。まず、その点にも契沖書写の依拠本とは本来系統を異にする伝本であったことが確認されるのである。と同時に、この当該表記が、諸本に於ては過半が本集一般の表記、「よめる」に統一されていることは注目に価するところである。何故に本書のみに於てかくも多数箇処にわたり不統一の叙述をとるにいたったかは個々の用例の検討を必要とすることは当然の事ながら、その不統一な表現には転写の経過に於ける筆写者の意図的改竄又

は偶発的な錯誤によつて惹起したものとしてみ処理し得るものとは思われないのである。

俊頼の撰になる「金葉和歌集」を例にとり一瞥するに――もとより自撰歌集と勅撰歌集とは自ら相違し弁別されるべき性格の

ものではあるが――此「よみ侍りけり」の表記は初奏本には三例を見出すにすぎず、又所謂統群書類従初度本系橋本公夏

本では僅かに二例、^{註四}二度本の中では流布本―正保版―に六例を所見するが精撰本系に於ては略「よめる」に統一されて

ゆく傾向にある。因みに伝為明本に於ては巻首修理大夫顕季歌と374長実卿母歌の詞書に二例を看るのみである。三奏

本に於ても六例を所見するにすぎず、この表記に関するかぎり、いわば統一の方針は明確である。^{註七}しかるに、その後

を追うての本集に、本書の如き不統一な表記が繰返し散在するのは如何なる理由かと素朴な疑問が呈せられるのであ

る。しかも、それが転写者による改竄とばかりとも想定されないとすれば猶更である。安易な仮定にすぎぬかもしれ

ぬが、寧ろ自撰歌集たるが故にかかる不統一なる表記を惹起したとも逆説的に臆測することは出来えないだろうか。

そして、それは漸次修正され統一化されてゆく前過程として、八巻本たる本書のなかに、その名残をあるいは暗示するものではないかと臆測するのである。

又、一方、二―(1)に就いて補述すると、その主体をなすものは、動詞「あり」の意を陳述する敬語としての「侍り」、即ち、

伊勢（又ハ田上・みぶ・はかたナド）に侍りける比（又ハ時ナド）……

に代表される叙述であり、諸本共通する掲出用例三十一乃至三例中―但し巻一―八迄―に、

7・18・19・34・221・381・530・543・580・602・624・695・705・718・764・779・867

と、過半の十七例を占めているのである。他例に於ても、かかる主体的事実の表現に於ては略統一がはかられてい

るのであるが、これは寧ろ慣用化され、雅語化された当代一般の表現として想定されるべきものであり、前者とは別して対処すべき叙述として受けとられるものであろう。卷九・十雑部に於ても、

1248 ・ 1294 ・ 1327 ・ 1328 ・ 1343 ・ 1346 ・ 1358 ・ 1395 ・ 1398 ・ 1403 ・ 1408 ・ 1411 ・ 1553 ・ 1593

等のごとく雑部に至れば更に頻出し、慣用的叙述となつていのである。雑部兩卷に於ては、他例にあつても、この「侍りける」の使用例に於ては諸本との異同は皆無に近く、この点にかぎって観れば自撰の当初より一貫し統一的叙述がなされていたのであり、以後も又改訂のごとき経過がなかつたことを示している。本書のごとき八卷本と十卷本系とは其処にも自ら系類を異にする根元的な素因のごときを覬視するのである。

次に、一―(2)、本書のみに所見する「侍り」と、二―(2)、本書を含む諸本共通し所見する「侍り」についてみると、前者は凡そ三十二例―卷一より卷八迄の契沖書写部―、後者は―同じく卷八迄―二十三例が見出される。しかし、一―(1)・二―(1)にみられるごとく其処には顯著な特色なり統一的意図はなくして、その増減は稍々恣意的な印象がある。勿論、分析検討の結果を俟つべきであるが、いささか煩雑となるので、その推測をのみ記すと、この丁寧語としての表現は、本書を起点として想定すれば、それは次第に刪省してゆこうとする意図が窺われ、本書から諸本にいたれば過半を消去していることになる。そして、それは後の転写者の敢て改竄すべきことがらとも一方に想起されぬとすると、これも又、自撰の、その途次に於ける経過ではなかつたかという仮定の可能性も生じてくるのである。しかし、記した如く、その増減に於ける統一的意図は稍々稀薄であるがために明確に把握しえないが、尠くとも敬語的表現を簡素化し、簡潔な文体への流れのごときが、そこに感触されてならないのである。

もうひとつ本書併びにその転写本特有な表現として「よめりけり」と結ぶ叙述がある。一・二例を挙げると、

2 「立春の日よめりける」・5「……十首の哥よみ侍けるに霞の心をよめりける」・917「そのはすには戒をたもちたる人なん生するといへることをよめりける」等である。他の諸本には神宮文庫A本・志香須賀文庫A本に853「過事(ママ)をくやしふといへることをよめりける」(神A・志A本)と見え本書と一致する纒か一例が存するにすぎない。本書に於ては甚だしく多用され、別註の歌番号箇註六凡そ一七三例にも及ぶのである。そして、その所見巻数は巻一―巻八の契沖書写本文部分にかぎられて、別筆書写の巻九・十両巻には一例も所見されないのである。此処にも両者の別系統本たるを証する。又、付言すると、前例の朱補部分にも皆無である。ともかくも本用例は本書独自の本文であり、諸本すべてが主に「よめる」と表記している点に注目されるのである。その意味上からは、おおよそは詠嘆を伴った完了又は回想と解され情感を込めた思い入れの表現であろう。私家集ならではの言回しでもあらうかと思ひ、手許の「私家集大成中古二」を一瞥したにすぎないが―大納言公任集以下本集に近き当代家集待賢門院堀河集までの六十六点ほど―意外に、その用例は次の両集を除き皆無に近いのである。その一集は「為忠集」で本用例は二十三例に及び、その頻出度は本書に次ぐものである。結びの叙述は本例と「よみ侍りける」とに二分された感がつよく寧ろ一般の「よめる」の表記が極めて少いのが特徴となっている。しかしながら、この「為忠集」には言われる如く諸々の問題をかかげ、その内容上のみならず、更には為忠仮託説等註九も存して、同時代の作品として対処しがたくもあるので付言するにとどめたい。他の一集といつても「能因集Ⅱ」(書陵部蔵154―563)にわずか一例、99「為善朝臣……しなのよみさかをみやりてよめりける」を散見するのみであり、従つて此期の私家集には―猶各諸本の精査を俟つのはかはないが―本書を除くと此事例の使用は極めて稀な事であったかと大凡は想像してよいのではなからうか。

又、勅撰集に於ては、当の「金葉集」には初奏本以下三奏本に到るまで本用例は諸本すべて皆無である。前後の集

にも「拾遺抄」・「後拾遺集」・「詞花集」等―共に校本なく諸本の如何は未詳であるが―にも刊行諸本に於ては所見するところではない。

しかし、この用例は既にわずかではあるが「古今集」中にも見出されるのである。これも机辺の「古今集校本」―西下経一・滝沢貞夫編―の諸本を目安として一覽するにすぎないが、該書の底本梅沢彦太郎所蔵本には、秋歌下310興風歌に「……そのおなし心をよめりける」、恋歌下705業平歌に「……かの女にかはりてよめりける」の二例が所見され、「よめる」と表記するのは、前者は筋切・元永本・雅経筆本・六条家本・前田家本（保元二年清輔本）・穂久邇文庫本（保元二年清輔本）・建久二年俊成本・静嘉堂文庫蔵為相本・高野切・私稿本・雅俗山荘本、後者は六条家本・前田家本（同清輔本）・寂恵使用俊成本・建久二年本・志香須賀本・毘沙門堂註本、と記されているので他比較諸本は「よめりける」の表記であったのであろう。他例では雅俗山荘本869近院右大臣歌・930三条町歌の二例、高野切に117貫之歌・938小野小町歌の二例、前田家本（同清輔本）に136紀利貞歌の一例と1014藤原兼輔歌に「よめりける」の見消を一例、等を見出すほかに、前記の136歌には穂久邇文庫本（保元二年清輔本）・毘沙門堂註本・家長本（永治二年清輔本）・伝寂蓮本に、930歌には元永本・今城切・伝後鳥羽天皇宸筆本に、938歌には書陵部蔵永曆二年俊成本・建久二年俊成本・道家本（刊本）・本阿弥切・真田本に同じく「よめりける」とある由であれば尠い用例ながらも古鈔伝本中に散点し、勅撰集に於ても単に伝本上の偶発的な特異現象としてのみ存続したものではないと一応は想定されるのである。

狭少な視点から推測するのは如何かと思われるが、勅撰集・私家集から概見すると、本集の時代近き頃に於ては、詞書の結びに、この「よめりける」の表現は極めて稀な表現であった、しかも、かならずしも皆無ではなくしてその源を辿れば既に所見され存続する用法でもあった、ともいいえようかと思われるのである。そして、その用法が本集

の一伝本の中に顯著に所見されるといふ事実をどのように解すべきか、ということである。それを一伝本の転写経過に於ける本文の改変として処理するのは容易である。しかし、前掲「よみ侍りける」と同様に書写側からすれば一定の方則のもとにかく夥多におよぶ改竄は又極めて容易ならざることでもあるのに想到せざるをえないのである。

以上、兩事例は本集の本文上からは確かに些細な事柄かもしれぬが、詞書の結びに、ある種の抑揚を加味することをよくするは作者その人と思うのが自然であろう。且つ本集は詞書の記述に於ても他集に見ぬほどの細微な按排と結構を印象づけている。その結びの表現にも当然のことながら単調を嫌う気分が働いたことでもあらうかと想像されるのである。奈辺を想う時、これら些細な用法にも、そのはじめにかかる変化をも呼んだのではなからうかと、こだわりにすぎぬ臆測が走るのである。そして、当初の未定稿八巻本のごときものの片影を本書のなかに幻想するのを払拭しがたいのである。

備考二

本書には前記の朱筆補入本文のほか、契沖の朱筆書入れが以下に掲出するごとく多箇処にわたり散見される。該書入れは契沖本転写諸本はもとより以後の書写本の中にも移写又は転用されると同時に此書入れの持つ意義も尠なからずと考えられるので、その中の顯著なるを拾掇し、一 他集による本書の未収録歌と関聯書入れ、二 語解、三 類歌例、四 歌解、にわけて、参考までに誌すことにする。

一 他集による本書未収録歌と関聯書入れ

1 夫木に 歌集 俊頼朝臣

うの花のころほいなれやいそのうらにたつしきなみのをると思へは(朱) 夏部200ノ次 三・李・大本同移写、本歌は本書欠員の203歌・夫木集夏部一2391所収歌。

2 コ、ニウタナシイカ、哥合ノウタ此題歟イカ、本ノマ、(墨)

下にかきねにはもすのはやにへといふ哥ありこゝに有へき歟(朱) 同217ノ次 三・李・大本同移写

3 ひきかくるみつのみまきのあやめ草ねにねをそへて玉とつらぬく 夫木に家集とて上の哥につらねて載たり(朱) 同289ノ次 三本同移写、李・大本欠。本歌は本集卷六悲歎部830歌、夫木集夏部一2624所収歌。

4 コ、ニウタナシ(朱)

千雑上 夏草をよめる(朱)
塩みてはのしまか崎のさゆり葉こに波こす風のふかぬ日そなき(墨) 夏部338ノ詞書ノ次 但し本書は当該部分に於て書写上に錯乱あり(上述参照一二頁) 同歌重複追補記するによる、同338歌である、三・李・大本同移写。

5 コ、ニ哥ナシ(墨)

次郎百首に秋風

秋きてはしのひもあへそと思へはや風おとつれてくれかゝるらん 此哥歟(朱) 秋部371ノ次 三・李・大本同移写、

本書欠員歌、本集372歌、

6 金秋 七夕後朝のこゝろをよめる

かへるさはあさせもしらし天河あかぬ涙に水しまさらは(朱)

千秋上 七夕の心をよめる

たなはたのあまのかはらのいは枕かはしもはてす明ぬこの夜は(朱) 同391ノ次 三・大本同移写、李本欠

前者は金葉集二度本所収歌秋部167、伝為明本に内大臣家越後詠とするも流布本系には作者源俊頼朝臣とする。俊頼詠ならば本集未収載歌である。後者は千載集秋部上239歌、本書既出385同歌。

7 ら字の哥落たる歟（朱） 釈教989ノ次 三・李・大本同移写

諸本989・990を併記し「ラ」字の歌なし、但し、当該箇処は「阿弥陀小咒」の字を歌頭に据えた歌詠である。「ラ」字項を本集が欠くのを指摘したものである。しかし本集の伝本中には、書陵部A本・阿波国文庫本等には、本書を含め諸本が990初句「をとめ子か」を「らつめすら」とするものがある。

8 金葉雑下 こくらくをおもふといへることを

よものうみのなみにたよふみくつをまなへのあみに引なもらしそ（朱）

金恋下 恋哥人くよみけるによめる

あさましやはなに事のさまそとよ恋せよともうまれさりけり（朱） 同994（巻末歌）ノ次 三・大本移写、李

本欠

前者は二度本金葉集雑部下所収、旧「国歌大観」686歌、新編底本には被除歌である。村上忠順「散木弃詞集脱漏歌」中の一首、但し、金葉集諸本中の精撰本は多く被除歌とするが「源師俊」歌ともし存疑。後者は金葉集恋部下所収515歌であり、本集恋部下1136歌として収載す。

9 哥と次の題落る歟（朱） 恋部上1029詞書ノ許 三・李・大本同移写

当該部は「恋催遠意といへることをよめる／初瀬河岩もとさらす行水のわきかへりてもぬるよそてかな」同1029、と書写され、続後拾遺集に同歌の詞書に「寄水恋」とあるにより、その詞書にひかれて本文脱落を予想した書入れ

であろう。しかし諸本当該本文の脱落はない。

10 新拾遺 さつきやみといふことを 俊頼朝臣

さゝのはの露はしはしも消のこるやよやはかなき身をいかにせん 雑部下「折句哥」項ノ許 三・大本移写・李本
欠、新拾遺集雑歌下所収1893歌であり、村上忠順の同「脱漏歌」中にも引かれる。

以上十例がその主たるものである。本書の転写本には移写に於て稍々相互に異同が見られるのは寸記したごとくである。就中、書入れ中の本集未収録歌四首については猶すべてを脱漏歌と断定するには問題があるが留意されるところである。

二 語解書入れ

(イ) 春部179歌「紫のいくしほそめて」、第四句「夕日さかきの」に、

拾ムサカキ俗ひさヒキサカキとキといふ卑ヒキサカキ神ムサカキの略なるへし(朱)

(ロ) 秋部533歌「にこりなきえ(朱)みのムに月の」、第四句「いかてあさちの」に、

鰻阿散知(墨別筆)

(ハ) 旅宿768歌「たのもしやむさけのせとを」に、

虫明也志阿反左也(朱)

(ニ) 同770詞書「かはねしまを見てよめりける」に、能因哥枕備前

(ホ) 同771詞書「哥のしまといふ所にて云々」に、

備後御調郡歌島宇多乃之方和名八(朱)

(ハ) 旅宿775歌「夕かけてみてくらしまを」に、嶋下郡幣久良神社歌 (朱)

(ト) 悲歎部795歌「立浪のひくしまにすむ」に、

仲哀紀云筑紫伊覩縣主祖五十迹手聞ウ天皇之行參迎于穴門引嶋 (朱)

(チ) 同797詞書「くちなしといふ所にて」に、

備中能因哥枕 くちなしの嶋備中 (朱)

(リ) 同820詞書「かじまを過けるに云々」に、

加嶋西生郡上旅部御幣嶋あり同郡 (朱)

(ヌ) 神祇部855詞書「たるみの明神の御社云々」に、

明石郡垂見多留美 / 延喜式撰津国豊嶋郡垂水神社名神大月次新嘗 (朱)

以上、語解は主に地名についての簡略な註記にとどまるものである。墨別筆は註者未詳である。本書転写の諸本では三本がすべて移写し、大本が(ロ)・(ニ)・(チ)・(リ)・(ヌ)を書落す、李本は(ハ)を移写するのみである。

三 類歌例書入れ

(イ) けさみれはきそちのさくら咲にけり風のはふりにこ夫木(朱)すぎまあらずな 春部76に、

夫木洞院撰政治家百首

しなのちや風のはふりこ心せよしらゆふ花のにはふ神垣 家長朝臣 (朱)

(ロ) 暮千春上(朱)はてぬかへさはお(朱)をくれ山さくらたかためにきてまか(朱)とふとそか(朱)しる 同85に

風雅夏 題しらす 後鳥羽院御哥

尋ねいるかへさにおくれほととぎすたれゆゑくらす山ちとかしる

(ハ) さけはちる花をときはの物とみて心しつかに世を過さはや 同117に

後撰春下

千代ふへきかめにさせれと桜花とまらぬことはつねにやはあらぬ 中務(朱)

(ニ) まの池の氷しぬれは芦まなる岩またつねて鳴つたひしつ 冬部647に、

夫木廿三 弘安元年百首 後九条内大臣

まの池の嶋つたひゆく鳥かねや春は蘆間の橋とみゆらん

(ホ) とへかしの沖のしらいししらす共物思ふ音のなきこかるゝを 悲歎部799に、

永久百首

浪立てかくとはかりはきこゆれとかへるもみえすおきのしらいし 神祇伯頭仲(朱)

(ハ) あひそめよゝもたゝにてはとほかりのこんとたのめしほとは過さし 恋部下1208に、

同卷云 時々くる人を恨る心ある女にかはりて 源仲正

あふ事はしけめゆひかと思ひしをとほかりにこん人はたのまし(朱)

(ト) なこかれよみすりもすまにやきつみてあかふま袖のなたとおもひそ 雑部上1287(以下本行別筆・朱傍記自筆)に、

夫木十八 正治二年百首 三条入道左大臣

雪そゝく花のみすりのかり衣うちはらへともむらかへりつゝ(朱自筆)

(チ) 心には思ひすてゝしよなれとも身になけれぬ物にそ有ける 同1477に、

賀茂保憲女家集

1 とほからぬたもとにふちは有なから身はすてかたき物にそ有ける（朱自筆）

千載雜中

2 年ことになみたの川にうかへとも身はなけられぬ物にそ有ける 大江公資（朱自筆）、

本書の転写本では、三本はすべて移写し、大本は(ト)及び(チ) 1を書落す、李本はすべて移写せず転写は必ずしも同じくしない。

四 歌解等書入れ

(イ) むさしのゝあしのをきふを分行は葉末葉よりこそ空は見えけれ 夏部368に就いて、

更級日記云いまはむさしの国になりぬことにおかしき所もみえずはまもすなこしろくなくこひちのやうにてむらさきおふときく野もあしをきのみはたかくおひてうまにのりてゆみもたるすゑみえぬ迄たかくおひしけて中をわけ行にたけしはといふ寺あり云々、此物語を見て此哥はよまれたるなるへし（朱）、と誌す。

(ロ) 行末にあふくま川のなかりせはけふの別をいきてせましや 別離737歌に就いては、

新古今離別 高階経重朝臣哥に似たり（朱）

いかにかせましけふのわかれを 新古今（朱）、と経重歌の下句を傍記する。

(ハ) 草枕さゝかきうすき芦の屋は所せき迄袖そ露けき 旅宿752歌には

玉旅○旅哥の中に○肥後俊頼か哥也玉葉誤れり／万代集十七にも誤て俊頼の哥とせり、と両集を訂正している。

(ニ) 天飛やかるの社の齋に身をなしていはひし槻のさかへに（見消す、えニ訂ス）てそみるあるへき（朱）あたしまつりに 釈教971歌には、上下欄余白に、

万葉の哥を引には皆本哥を初に引此家集の例也／初に万葉の本哥をかき次に如此みつからの哥有へし(朱)、と朱註する。例えば後出の恋部下1175歌には、

万云(朱) たまたれのこのすす(朱)鶏吉にいりかよひきね

たらちねのははれは万(朱)かとてやとかせとまうさんにイ(朱) 本ノマ、(墨) 此二行異本在経年恋下(朱)

年ふともれとイ(朱)こすのきけきの絶まよりみえししなひは倂にたつ

と書写している。如此例をいうか。

(ホ) 秋の田のかりる(朱)ほともなくかへされて忍ひもあへぬねにそよほつる 恋部下1154歌には、

涅槃経名字功德品曰善男子譬如耕田秋耕為勝此経如是諸経中勝(朱)

夫木云此哥判者俊頼朝臣云田は秋かへするなと人々申まよ尤しかるへし証哥を申へけれども覚え侍らす但涅槃経の名字功德品に譬如耕田秋耕西勝此経如是諸経に勝といへる文をおもへはなとか秋かへすとよまさらんと云々

(朱)

涅槃経第二哀歎品曰世尊譬如農天於秋月時深耕其地能除穢草是無常想亦復如是能除一切欲界貪愛色無色愛無明憍

慢及無常想世尊譬如耕田秋耕為上如諸跡中象跡為勝於諸想中無常為最(朱)、と典拠を詳記する。

(ハ) 次郎(朱) なよ次郎一本(朱) こう次郎こそ次郎一本(朱) いのることならのをやしろう／とことなはせよくちはしるなり(本文別筆、傍記自筆) 雑部上1284には、

夫木三十四社の次に長尾社次にならのをやしるとして此哥を出す哥にはなよのをやしるとあれとならの誤なり但七社の中に六帖類題 衣笠内大臣 やをとめのふるてふすよのころ／になよのやしろは宮るせりとそこれは俊頼哥をもてよみ給ふ歎ころ／は俗にたよころ／といふ言なれば七社かなへりいのる事なるとつよけたる歎とて

ならのをやしるとはたかへたるなるへし（朱自筆）、と見ゆ。

(D) 伊勢に侍りけるころ祭主親定かいはてといふ家お(朱)をもしろしと聞てまかりて見けるにまことに

おもしろかりける中にもかはむかひの山つらいう(墨)ふ也けるか思出られてよめる

をちこちのとやまのすそを恋しともいはて思へはしる人もあらしゆうなり(朱)（朱傍記以外別筆）雑部上1358歌には、

新拾遺集 伊勢に祭主輔親か立たるいはて寺より三昧堂のほら貝のうせたるをこひ侍りけるを

つかはすとて

伊勢大輔

かすかなる谷のほらをとおもひやる秋風のみやふきてとふらん（朱自筆）

と書入れている。本書の転写本には三本がすべて移写、大本は(イ)・(ロ)・(ニ)を移写、(ハ)・(ホ)を部分的に抄出移写する

にとよめ、李本は更に(ハ)・(ニ)の一部を任意略省して転写するにすぎず、全般的に見て三本が忠実な転写を書入れに於

ても試みていることが知られるのである。

註一 本書に所見する「イ」本朱墨校異は次のごときである。

春部55第二句色をはやみにのイ(墨)、97初句こもり山、夏部 210第五句あふひかけたりけイ(墨)、秋部 468第二句駒の毛つきをけイ(朱)、518第五句手向つれはイ(朱)
しつれは536詞書九月十三夜殿下にて法性寺関白よめる(朱)、冬部 611第五句とやかかへりけりつげ夫木(朱)、624第三句あくかれ初るそむるイ(朱)、651第三句つらゝイ(朱)
てけりてけり金 ハイ(朱)

祝部 690詞書治部卿通俊の一条の家にて……、732詞書……あふ坂の関よりもかへるととて……、745詞書……つかはしけるかおひにイニ(朱)

哥をよみて……、旅宿 755詞書……驛中暁恋といへる……、757詞書……日のくれければ、774詞書一のすにことなくいたりて……
思イ(朱)

……、悲歎部 783第四句むねをかくとも、789第三句ひわのねを、814詞書……袖の掣なとひまなきま……、神祇 851上句住わイ(朱) は(朱)音イ(朱)

のえの神さひにける松なればイ(朱)
 よしのちぎのかたそきゆきもあはて、恋部上 1010 第二句あれ田のくろに、1011 第三句はむくまも、1012 第三四句ませの秋萩な
 まイ(朱)たくイ(朱) 1016 詞書……くせくしきなんたくひなきと申侍ければまきのやたて……遣し侍ける、第二句矢立の竹も、
 たくり立るにつけて、
 (朱) 1017 詞書……よめりける、同第二句とかはにうへの、1020 第三句こちたきを、1021 初句恋く、て、同第四句こやから人の、1022 第五句
 なかめかねつる、1023 第四句つもればいかに、1024 第三句めをわたる、1026 初句ふみぬと、1027 第五句こひわたるらん、1029 詞書恋催
 舊イ(朱) 遠意……、1030 第三四句あたらしをイ(朱) あい(朱)く(朱) 1031 詞書……とかせにつかはし○けるにことさまになんときたりととき侍ける
 を……、1032 第二句忍ひもあらず、1033 初句あふことは、1035 詞書人のまつといへることを、同第三句人まつと、1037 第一・二句すくせ
 やない(朱)そイ(朱) 山なといなむやの、1038 第五句なかししてそふる、1040 第五句すましとすらん、1043 第四句とはてなくさむ、1045 詞書……よめりける、
 無(朱) 1046 第三三句滝といかにやなかれまし、1047 第三句氷れとも、1048 詞書……恨侍ければ○昔より思ひ初たれば……、1049 第二句たまは
 (朱) りて落る、1050 第二句たえまをまつは(該歌補入歌)、1052 詞書……歎き侍ける人に……、同初句こよひこし、1053 第三句もりなれ
 つもる夫木廿 1055 詞書はう／＼なき名たちて……、1056 詞書……歌合し侍けるに初恋、同第五句忍ぬころを、1061 詞書……よめりける、同
 は、1055 詞書はう／＼なき名たちて……、1056 詞書……歌合し侍けるに初恋、同第五句忍ぬころを、1061 詞書……よめりける、同
 第三句いきもあへず、1064 第四句あまのうけひく、1065 詞書……きぬへたてふしてかへるとて申つかはしける、同第四句うらみ
 (そイ(朱)) 1066 詞書……かへりねと申侍ければよめる、1068 詞書ノ上ニ「イニ此前書ノ次に有」、1067 詞書ノ上ニ「イニ此前ノ書前に
 有」ト朱訂ス、1067 詞書……よもすから立明してかへり○ければかれより……いひ遣し侍ければ……、1068 詞書あるまじきことそ
 (朱) といへる……、1069 詞書……恋の心をよめりける、1070 第五句やまふ比かな、1076 詞書……人／＼の扇にて、1079 詞書……返しをなん
 (朱) せさりければ……、1081 第二句ほそ谷川の、1082 第五句わきかへる哉、1083 第三句あはよやな、同第五句さやはさへへき、1084 第二句

立イ(朱) 恋もかへらて、1090 第三句七夕の、同第五句あひぬる物を、1091 第二三句たのめしことをわすれねは、1092 詞書…といはれたる人の
もとへ…、1093 詞書物申○人の…よみて遣ける、1095 第三四句たのみにて我さへ人むねを、1098 堀川院御時艶書合と…、同第
二句世に住吉の、1099 第三句住吉の、1102 詞書たかひにあはんと…、1107 詞書…よめりける、同第三句かなしきに、1109 初句わす
らるゝ、1110 詞書大殿の哥絵の中に…みたるまへにこひおもひあり…たてりけりからの女…、1111 詞書…女のかみをかし
こしてなつる所をよめる、1119 初二句雨ふりに日にあやにくに、1123 第五句人のなみたを、恋哥下 1124 詞書…よみけるによみ侍
ける、同第三句かさゝきの、1125 詞書…といふ心をよみ侍ける、同第二句かせなかれよる、1126 詞書頼不逢恋、同初句たのめ
る、1128 第四句ひまなきをりに、1132 詞書…の哥をよみ侍けるに恋の心をよめりける、1133 第四五句あみけるぬまにやつれてそふ
る、1135 詞書…哥をよみ侍けるによめりける、1140 第五句つまちつらん、1141 第五句つるはへてすな、1143 二句おろにあたく、1145
第二句鶉の住石に、1146 初句ちへのほき、同第五句心なりけり、1148 第二句隔つる月を、1150 初句あさをきの、1154 詞書…いふ事を
よみ侍ける、同第二句かりほともなく、1157 詞書…など申侍しかはよめる、1158 詞書稀友恋、1162 詞書…おほしきやのつくりさ
まに…よめりける、1163 第二句入江の芦の、同第四五句いつかはしみのうちもとくへき、1168 第五句人とねぬらん、1170 第三句も
えすも物を、1172 第二句鳴やたゝくと、1174 第二句とひとふとも、同第四・五句みきとてしひてしはしもらまし、1176 詞書…を
よめりける、同第五句ひこしろへとや、1177 第三句以下もよしかへたまにあはねはつくるともなし、1178 句あく第四けもなく
○、1179 詞書…をよめる、同第二句あさかのうらの、1180 詞書…をよめりける、1184 第二句ねしろ高かや、同第五句せなかつた
とそ、1187 初句はるけくは、同第五句おりさらめやは、1188 詞書…恋の心をよめる、1189 初句はなくも、同第四句たつなきせな

そ、1190 第五句あされよそすて、（そするイ）（朱） 1191 障本夫恋、同第二句くけてしくれば、1193 第二句あはさの原に、1194 詞書……をよみ侍ける、同
 第三句さゝれ石、（みつイ）（朱） 1196 詞書……をよみ侍ける、（めるイ）（朱） 1197 詞書……恋の心をよめる、（イニ無）（朱） 1199 詞書……心をよみ侍ける、1200 ……をよめる、同第
 二句かきやらむとそ、（シイ）（朱） 1201 詞書……頭季の樋口にて……をよみける、（爪イ）（朱） 同第三句しらとりも、（をイ） 1202 詞書……雨中恋といへることを…
 ……をよめる、（イニ無）（朱） 1203 詞書大式仲実の……、同第二句ことをも君か、（はイ）（朱） 1204 詞書……かはりてよみ侍ける（自筆墨細補）、1207 詞書……を
（イニ無）（朱） よみ侍ける、同第二句人のみてくら、1209 詞書……八条の家にて公有障恋と……、同第四句人のてまをも、（はイ）（朱） 1212 詞書……物いひわ
 たるといふことを聞て……同第三句かへりにも、（シイ）（朱） 1215 詞書……をよみ侍りける、同初二三句さともたになけの情いへしかな、（下上イ）（朱） 1217
 第五句なき心かな、（くてくらしつイ）（朱） 1218 第五句ゆかしかりけり、1219 詞書……をよめりける、同第五句みゆなるものを、1220 詞書……をよめりけ
（朱） る、同第四句しけきおもひは、（うらみイ）（朱） 1223 詞書いはての関のこころ、（こひイ）（朱） 1224 詞書大式仲実……、（長イ） 1225 詞書寄馬○恋と……、（毛イ）（朱） 1229 詞書……かはり
 てよめりける、（イニ無）（朱） 1230 詞書……みちはくらしとしてしはしたてと女房の申ければ……、同第五句かたをしらねは、（もイ）（朱） 1231 第二句みかきか
（イ）（朱） 原の、同第五句宿もさためす、（跡イ）（朱） 1333 第二句空迄なひく、（にたイ）（朱） 1237 第二句もとあら小はき、（の小イ）（朱） 1238 第二・三句千草にかゝる白露の、（波イ）（朱） 1239 初句よ
（浦イ）（朱） さの海に、（雑部上） 1244 詞書……さもさふらひぬへきさまに……つかまつりける（以下雑部上下、本文又校異共ニ別筆）1244 左注そ
（夫木廿三同）（朱） のたひなりけるとそ、（空イ）（墨） 1249 第四句春にしられぬ、1261 第三句うき雲を、（のイ）（墨） 1265 第二句なゝひこのかゆ、（いねイ）（墨） 1271 第四句忍ひしふしは、（よれイ）（墨） 1297 初句
（墨） うちわたる、（すイ）（墨） 1303 第三句あさにする、（ちイ）（墨） 1321 第二句なみちへさそふ、（はくイ）（墨） 1325 詞書……家道君のもとより、（通イ）（墨） 1337 詞書……ほとすきてすてたれ
（夫木三十六同）（朱） は、（タリイ）（墨） 1369 詞書しりたる人のもとより……、（かしあたへイ）（墨） 1383 第五句蘇よけむ、（らふか）（朱） 1387 第二句ともなき松の、（きイ）（墨） 1388 第四句にし宮人、（にとイ）（墨） 1390 初句すまの浦に、（イニ無）（朱）
 1398 詞書……そのこころの哥、（心イ）（墨） 1432 第五句たぎるなる哉、（もイ）（墨） 1435 第四句きこのはしても、（レイ）（墨） 1484 第二句さかゆく身かは、（道イ）（墨） 雑部下 1520 あす

のイ(墨) 1520 たらちねぞ、^{のイ(墨)} 1541 第五句心せはさに、^{ほそイ(墨)} 1550 第五句くさかもゆらん、^{花イ(墨)} 1553 詞書田上に侍けるころこもりかいねといふもの…
 …、^{ぬイ(墨)} 1563 第四五句ひとつもみえすをちにけるかや、^{かなイ(墨)} 1566 第五句よはりゆくまで、^{哉イ(墨)} 連詞 1598 和句しはしもやとに、^{とイ(墨)} 1599 唱句ゐたるかな、^{見ゆるイ(墨)}
 …、^{こなはるイ(墨)} 1601 唱句をしはかり、^{網イ(墨)} 1603 和句すたるかほと、^{にイ(墨)} 1605 唱句詞書…はたげにかよふをみて、^{永イ(墨)} 1606 唱句詞書…ふねのおほくつきてひし
 …、^{ひし(墨)} 1608 唱句作者家総、^{権イ(墨)} 1611 唱句やりみつの、^{にイ(墨)} 1612 唱句作者承源法師、^{とイ(墨)} 1614 唱句詞書…女房達に物かたりして…、^{ひし(墨)} 同和句作者
 …、^{君イ(墨)} 甲斐公、^{権イ(墨)} 1615 唱句作者源中納言国信、^{のイ(墨)} 1617 唱句詞書…御時内侍所へ供御…、^{或イ(墨)} 1618 唱句作者有僧、^{ひし(墨)} 1620 和句詞書…あるしのをこし
 …、^{か(墨)} たりけるを…、

以上、本書に傍記する朱墨のイ本校異である。その校註筆者は複数であり、上冊巻一〜四迄は契沖自筆と認められるが、下冊
 巻五〜十は別筆―猶判断に迷う書跡も多少を交うが―と認定され、且つ巻九・十兩巻の書写者の筆跡と想定されるのである。
 この朱筆校異は上掲の如く巻七・八の兩巻に集中し、上冊部分と巻九・十には極めて僅少にしか所見されない。しかも前者は
 朱筆を主とし、後者は墨筆のみである。下冊にかぎってみると、後補別筆の巻九・十は屢々記してきたごとくに契沖本系統で
 はなくして十卷本系統の第三・四類本系本文の相交る系統本―もつとも此兩巻は本文上の異同が甚だ尠い―である。ところが
 朱筆校異が顕著に散見する巻七・八兩巻の対校本文を検するにやはり第三・四類本系の本文を持つ伝本による校勘と推定され
 るのである。従つて巻七・八併びに巻五・六を含む下冊の校記は、補写別巻たる巻九・十兩巻と同一本文を持つ一伝本に拠つ
 て同一筆写者の手になるものと想定するのが自然である。何故に上冊巻一〜四に及ばなかったかは推測すべくもない。あるい
 は上冊を欠くが如き伝本でもあったろうか。ともかく下冊に於ては該本に拠る校勘が施され、巻九・十の依拠本は当該本自体
 であるが故に当該本が元來傍記する墨筆校異をそのままにとどめることになったと推測するのが自然のようである。しかし猶
 不審を残すのは契沖書写本―朱筆補入本文を含む―中に所見される欠落本文に対し、此イ本校補が施されていない点である。

当該本にも同様の欠落本文が散見されるのもあろうか。その不審も推定すべくもない。以上下冊の校異についての推測であるが、その校勘本文は夥多に及び契沖書写本と他伝本との異同の一面を具に示すものとして留意されるのである。又、上冊巻一〜四については墨記イ本は契沖依拠本元来の傍記、朱記イ本の過半は対校諸集の本文に見るイ本校記かと臆測されるのである。

註二 その類別方針としては、極く一般的な見解に従い、
(1)原則として自己又は自己側の存在・行為・事柄・事実などに関する謙讓の言語表現としての「侍り」、又意味上これに準ずるもの、

(2)同様に特定の他者又はこれに準ずる他者側に対して、発言者側の丁寧な言語表現としての「侍り」、
の大枠によることにした。しかし、ただ単に雅語的表現として慣用化した用例も散見するが上記の区分に従うこととした。その際、動詞・補助動詞・助動詞等の弁別をとらず敬語法として振分けたものである。

前記一―(1)使用例 各例下の追記は諸本に於ける当該部分の叙述である、書陵部A本を以って代表した。

4 朔日の朝に霞を見てよみ侍ける―よめる、10 百首の哥の中に霞をよみ侍ける―よめる、17 殿下にて関霞といふことをよみ侍ける―よめる、28 屏風の絵に……若なつみたるかたちをかける所をよみ侍りける―よめる、34 伊勢に侍ける年……卯杖(他本同)と奉れるを見てよみ侍りける―よめる、36 おなし心をよみて人のかりつかはし侍りける―つかはしける、37 伊勢に斎宮にて青馬(引朱)をよみ侍ける―よめる、41 百首哥の中に残雪をよみ侍りける―よめる、47 百首の歌の中に鶯をよみ侍りける―よめる、56 ……梅花落水といへることをはよみ侍りける―よめる、65 いまたさかさる花といへることをはよみ侍ける―よめる、66 賀陽院殿の歌合に御(朱)くしをよみ侍ける―よめる、86 北山のほとりにまかりて……かはらけをとり侍りてよめりける―かはしとりて、88 中宮の御堂の八重さくら盛りなりと聞て……めてたさに人々哥よみければよみ侍ける―よめる、105 風のおこりて心ちれいならすおほえ侍ける比花の散侍けるをみてよみ侍ける―覚ける比・ちるをよめる、134 白川の花見にまかりたりけるに……隆源あさりに云かけ侍りける―(諸本)かけよる、140 堀川院御時后宮の御かたにて……哥をよませ給けるによみ侍ける―よめる、152 百首歌の中に帰雁の心をよ

み侍りける―よめる、160殿上にて雨中のすみれをよみ侍りける―よめる、171修理大夫頭季の六条の家にて款冬蔵の橋といふことをよみ侍りける―よめる、172堀川院御時に……めされたりければやかてまいらせ侍とて……―まいらすとて、177堀川院の御時御前にて雨中の藤といへることをよみ侍りける―よめる、185三月尽に敷花春色朱春深といへることをよみ侍りける―よめる、192百首歌の中三月晦日の心をよみ侍りける―よめる、193殿下にて三月晦日の心をよみ侍りける……ナシ諸本、248堀川院御時殿上のをのことも哥まつかうつりけるによみ侍りける―よめる、258……人のもとにまかりてよもすから物語し侍りけるに……―しけるに、293五月五日男女のもとに……女にかはりてよみ侍りける―よめる、304大弐仲実の白河にて五月尽時鳥かへる山といへる事をよみ侍りける―よめる、343二条関白殿にて雨後野金草花朱といへることをよみ侍りける―よめる、395大殿絵の中に秋の野に……といふものをふたつおきたる所をよみ侍りける―よめる、406四条宮の扇合に人にかはりてよみ侍りける……ナシ諸本、409基俊の君の堀川の家にて……草花露滋といへることをなんよみ侍りける―よめる、410殿下にて野風といへることをよみ侍りける―よめる、432殿下にて旅鷹といへることをはよみ侍りける―よめる、435殿下にて庭の露といへることをよみ侍りける―よめる、439やとりたる家に……風の吹ならし侍りければよみ侍りける―よめる、440風のはけしさに屋のいたくなるを聞侍てよめる―聞て、450殿下にておなし心をよみ侍りける―よめる、453殿下にて鹿を所の名によせ給ひけるによみ侍りける―よめる、464四条宮の扇合にきりをよみ侍りける―よめる、478舟にのりてあそひけるに……夕月夜をみてよみ侍りける―よめる、479しら川にの水墨上月といふことをよみ侍りける―よめる、486殿下にて八月十五夜のころをよみ侍りける―よめる、493殿下にて月毎千秋友といへることをよみ侍りける―よめる、500重服に侍けるとし月朱のねたる所にもりきたりけるをみ侍りて―見て、508殿下にて五首の歌……谷のそこの庭月といへることをよみ侍りける―よめる、511頭仲の公の八条の家にて……月をよみ侍りける―よめる、517殿下上おりたりける比月をみてよみ侍りける―よめる、521殿下にて野径月といへることをよみ侍りける……ナシ諸本、540九月廿月余の月の……幽にみえければよみ侍りける―よめる、545修理大夫頭季の六条の家にて残菊留秋といへることをよみ侍りける―よめる、552柿の木の枝のほそきに実のなりたりけるに……ゆるきけるを見てよみ侍りける―よめる、571田上のむかひの山……おもしろかりける夕暮によみ侍りける―よめる、584殿下にて散紅葉をよませ給ひけるによみ

侍ける―よめる、596生田の森のまへをす(朱)わくるとてよみ侍ける―よめる、603いしらの滝せ(朱)にあしろうつと聞てよみ侍ける―
 ナン諸本
 661頼仲か長岡の家故師殿おはしまして……山家冬夜といへることをよませたまひけるによみ侍ける―よめる、662田上の山里
 ナン諸本
 にてふし侍る所にゆきのもりきたるをみてよみ侍ける―ふしたるよめる、670ならの哥合に人にかはりてよみ侍ける―
 753とよみてをくりたりけるをみて……たゝのかたらひにてはあらさりければ見り(墨)え侍ければ……みえければ、756修理
お(朱)
 太夫顯季のなきさの院にて旅宿郭公といへることをよみ侍ける―よめる、764つくしよりのほり侍けるにはかたといふ所にて……
 ……ともかくもいはんにしたかはんと申けるをきよてよみ侍ける―のほりけるによめる、768むさけのをとよいふ所にてよみ
 侍ける―よめる、776百首哥の中に旅の心をよみ侍ける―よめる、788あらつ(朱)をいて……やうくつくしをはなれ侍事なと心
(誤字)
 ほそさに―はなれぬること、796むへといふとまりにて……所からにや身にしてみてよみ侍ける―よめる、798むろすみといふ所
 にて……を過てまかるとてよみ侍ける―よめる、801にはかにこちふくとてこしまといふ所にとまりて……それさへこと
 たかひたる心ちしてよみ侍ける―よめる、807舟よりおりてたゝすみ侍けるに……たゝすみけるに、812又の日高砂にまかりて
(朱)諸本
 ……名きこゆる松はいつれそと尋侍ければ……尋ければ、819なるおを過侍けるに松の見えければよみ侍ける―よめる、820
 かじまを過けるにあそひとものあまたまうてきて……かゝるおもひをかふりてのほり侍ければ……のほれば、826山さきちか
(左)朱
 くなりて……おもひいてられ侍りてよめる―思ひいてられて、827山崎の山里にて右大弁まいりあひて……筆笛(朱)のはこなる笛の
お(朱)
 こひてをき侍けるつめてによめる―おきける、828みつをちといふ所をはすき侍とてよめる―すくとて、830五月五日にあたりけれ
お(朱)
 はみつののしやうふをとりにやりてたもとにかけなとし侍ける……しける、848都芳門院の根合に人にかはりてよみ侍ける―
ま(朱)
 よめる、860前齋宮の閑院におはし〇ける比……南おもてのもりの下にかくれるてみ侍りければ……みれば(書陵部A本欠落
 部分、阿波国本ニ抛ル)、899たへなる花をもりてつねに仏に奉るといふことをよみ侍ける―よめる、902心みたらすしたのみを
 よくかくれば……といふことをよみ侍ける―よめる、935たらぬえ(朱)ひかりといへる事をよみ侍ける―よめる、949諸の衆生をみち
む(朱)
 ひかせおはしますち(朱)からに……といへる事をよみ侍ける―
ナシ諸本
 ……(但し第二・三類本系一部ニよめるアリ)、950諸の仏の御国より

まいりあつまり給ひたる仏ほさつたちの御光……さし侍といふこと1をよみ侍ける2—さしあへり1よめる、951空をかけるさとりを
 あらはしてかの国にきたるといへることをよみ侍ける—ナシ諸本、956かの国はひろきことなん……といへることをよみ侍ける—
 よめる、1016物申ける人のつねにあやしき事の有ければ……くせくしきなんたくひなきと申侍ければ……やたてのひらな
1るに結つけて遣し侍ける—申ければ(丁寧語)・つかはしける、1031ある人のもとにてなそく物かたりをあまたつくりて……
 ことさまになんときたりときイニ無(朱)侍けるを……異文該当本文ナシ、1063物もうしける人のほくに申へきことありてまかりてたつね
 侍けるに……—たつねけるに、1124修理太夫願季の八条の家にて人く恋の哥よみけるによみ侍ける—よめる、1125よへともかへ
 らすといふ心いへる事をよめるイ(朱)をよみ侍ける—ナシ諸本、1154殿下にてかへさるゝ恋といふ事をよみ侍ける—書A本ナシ・類従本系ニよめるアリ、1159
 殿下にて推量の恋といふことをよみ侍ける—当該本文ナシ、第三類本等ニよめるアリ、1194ある所にて夕の恋といへること
イニ無(朱)をよみ侍ける—ナシ諸本、1196同殿にて人をうらむるといへる事をよみ侍ける—よめる、1199中納言国信の坊城の堂にて……恋の心
イニ無シ(朱)をよみ侍ける—書A本ナシ、第二類本一部ニよめるアリ、1204ならの哥合に人にかはりてよみ侍ける(但し墨細補)—ナシ諸本、
 1207大式仲実の八条家にて晩恋といへることをよみ侍ける—イニ無(朱)、1208左京大夫つねたゝ八条の家にて恋の心をよみ侍ける—
ナシ諸本、1215中納言まさたゝの六条家にて歌合し侍けるに恋の心をよみ侍ける—哥合しけるに……、1227左京大夫つねたゝ八
 条家にて恋不依といへることをよみ侍ける—よめる、1228修理太夫願季の六条にて恋不知程といへることをよみ侍ける—よめる
 一(2)使用例 各例下の追記は(一)―(1)と同様である。

5 願仲の君の一家八条のに人くあつまりて十首の哥よみ侍けるに……—よみけるに、19 田上なりける所に侍ける比……心ほそく
 哀なることもあらんと人のかたり侍りけるそのかへしに……—申たりける・第二・三類本系ニかたりけるアリ、122 大式仲実卿
 白川の花みにとてさそはれ侍りければ……—さそはれければ、174 故源中納言国信の坊城の堂に中宮亮仲実か侍ける比人ままか
(諸本同)
 りてあそひ侍けるに……—あそひける、190 三月晦日人ま哥よみ侍けるに—よみけるに、251 皇后宮太夫師時の八条の家にて歌合
 し侍けるに……—しけるに、252 雲居寺にて……—人くあまたまかりてよみ侍けるに—よめるに、253 八条入道のいつみの家に

まかり侍て十首の哥を人々よみ侍けるに——まかりて・よみけるに、255故大殿政所より哥多をは給りて……鶴向ひてたり侍り
 空に郭公鳴たるを……—たり、501人のうた○せんあはせ歎(墨)とこひ侍ければ—こひければ、572都のかたより人まうてきて哥をよみ侍け
 るに……—よみけるに、695みふに侍○比人々まうてきて五十首○よみ侍けるに……—よみけるに、697堀川院御時所泉共の哥を
 よみ侍けるに……—よみけるに、698中宮○近衛の御堂にわたらせ給ひて松久緑なりといひ侍ることを……—いへる、786
 はかたに有ける唐人ともあまたまうてき侍りてとふらひけるによめりける—きて、789あしやといふ所にて琵琶法師のひわを
 引侍けるとほのかに聞て……—ひきけるを、809さよふけて郭公のこゑ侍ければ—聞えければ、817おまへといふ所にて……
 ……いひさはしをきゝてそのかみに侍てければみてくらたてまつるとて……—その神にみてみてくらナン(諸本)・当該本文諸本ナシ、824まで
 といふ所にてしはしとまりて……きしのいへともより／＼人／＼のあまたき侍てみればよめる—あまたきて、901極楽に生る
 ろ人は……心おもひのことくになん有といひ侍ることをよめる—いへる、950諸の仏の御国よりまいりあつまり給ひたる……
 ……あまたふつの御かたにさし侍といふ事をよみ侍ける—さしあへり・よめる(2)重出)、954極楽にはいかにもあしき事をは名に
 たにいひ侍らすといふことをよめる—いはず、1016……くせ／＼しきなんたくひなきと申侍ければまきのやたてのひらなるに結つ
 けて遣し侍ける—申ければ・つかはしける(1)重出)、1049人のもとにまかりけるに御まへにいとまふたかりてえおりすと申侍け
 れは……—申たりければ、1052おとこかれ／＼に成て歎き侍ける人にかはりて遣しける—なけきける、1056中納言国信の家にて恋
 の歌合し侍けるに初恋—歌合しけるに、1066人のもとにまかりたりけるにこよひはかへりねと申侍ければよめる—申ければ、1067人
 を尋けるにうへにといはせてあひ侍らざりければ……かれよりいとおしういかとおほえしといひ遣し侍ければつかはしける—
 いひたりければ、1076堀川院御時に女御殿の御かたに……人／＼の扇にてならひをせさせ侍りければかき付ける—せさせけれ
 は、1157かたらひける人の此ころ……いろもあをみおとろへたるはなと申侍しかはよめる—申ければ、1195殿下にて十首哥よみ
 おこなひ侍りけるにこひの心をつかうまつりける—よませ給けるに、
 以上、一(1)は百八例、一(2)は三十二例、が散見される。

二一(1)、引用本文は書陵部A本に拠る。他本との間に多少の相違を見出すが僅差なるにつき省略した。各例下の追記は契沖筆写本に於ける当該部分の異同本文である。

6はかための鏡のおしきのしきものに書つけ侍ける、7伊勢に侍ける比……、18伊勢に侍けるころ……、19田上なる所に侍ける比……、34伊勢に侍けるとし……、51東北院の花さかりなりと聞て……、鶯をとつれてすきかたかりければたちとまりて侍けるに……、契本「鶯」以下欠文、63法成寺の花さかりと聞て人／＼あまたくして見ありきけるに柳の木のもとにゐて侍ける人／＼は花のしたにあそはれければ柳の木にかきつけて侍ける、221伊勢に侍ける時……、381みふに侍けるころ……、444これを聞て和し侍ける、495下藤にこえられてなけき侍ける比……、500重服に侍けるとし……、530田上に侍けるころ……、543田上に侍ける比……、580田上にはへりけるほど俊重も侍けるかのほりてのちみやこよりおくりて侍ける――2・3ハ弟俊重ノ事柄ニテ自己側ヲ主トスレバ謙讓、純粹ニ第三者トスレバ丁寧語、602田上に侍ける比……、624田上に侍けるに……、627新院の御時臨時の祭の陪従したりけるに……、御物忌にあたりたりければ地下の人もこへらんとまちはへりけるに雪ふりて思ひいつることもありてかへりにかきつけ侍ける――1諸本異同アリ、契本「地下の人のまぢに侍けるに」トス・今取敢ズ当項ニ入ル、695みふに侍ける比……、侍○比^{ける(朱)}、705伊勢の齋宮に侍ける比……、718伊勢齋宮に侍ころいしなとりの石あはせといふ事……、十の石にひとつつかき侍ける、745……さうすくしてつかはしける帯にむすひつけて侍ける――おひに哥をよみて結びつけて侍ける、764つくしよりのほりけるにはかたといふ所に日ころ侍けるに……、のほり侍けるに(前掲一(1)に入ル)、779田上に侍けるころ……、侍比、819なるをすきてはへりけるに……、837服ぬき侍りける日よめる、867書陵部A本欠落、諸本、田上に侍りける比……、1048かたらひける人のこと人に物申ときうらみ侍ければ……、1076堀河院御時に女御の御方に……、人のあふき手ならひをせさせければかきつけ侍ける――せさせ侍ければ(前掲一(2)表ニ入ル)・かき付ける、1232なか月の晦日人のもとにまかりたりけるに……しらすとて申さりければ書あつめて家をかせ侍ける、

以下は卷九・十両卷の謙讓語「侍り」の用例であるが、参考までに掲出する。

1246 下臈にこえられてなけき侍けるころ……、1248 ことのゆかりありて伊勢国にまかりてひさしう侍りけるに……、1291 思こと侍けるころよめる、1294 田上に侍ける比……、1295 おもふ事侍りけるころよめる、1303 隆源阿闍梨七条房に申へきことありて……あはさりければかみさうしにかきつけ侍りける、1314 殿上おりて侍りける比……、1315 下臈にこえられて叙位のをくにかきつけ侍りける、1325 四位して殿上をもて侍りける(ママ)ころ家道君のもとよりつれくはいかゝなと訪て侍りけるに……、1327 田上にはへりける比……、1328 伊勢にはへりけるころ……、1330 みやこへのほると聞てをくり侍りける、1334 人のもとより巻物に手ならひしてとてをくられたりければかたのことくかきてをくにかきつけ侍りける、1336 といふを聞て和し侍ける、1339 とよめるを聞て和しはへりける、1343 つくしに侍けるころ……、1346 田上に侍りけるころ……、1358 伊勢に侍りけるころ……、1368 人のもとにまかりたりけるに扇をわすれて侍りけるを……、1395 田上に侍りし比……、1398 伊勢にはへりける比……、1403 伊勢に侍りけるころ……、1406 もの思侍りけるころ、1408 伊勢に侍りける比……、1411 伊勢に侍りけるころ……、1532 はるつれくケルに侍ければ……、1553 田上に侍けるころ……、1591 これを聞てすゑにかきつけ侍ける、1592 身になくこと侍るころケル侍るころ、1593 田上に侍りけるころ……、

二(2)使用例、引用本文、各例下追記は(一)―(1)と同様である。

14 大式長実卿の白河の宿所にて哥合し侍りけるに……29 人のもとよりわかかなをくくりて侍けるかへりことよめる、67 修理大夫頭季卿六条家にて桜哥十首人くによませ侍けるに、93……修理大夫頭季のもとよりをくられて侍ける、113 権僧正永縁か花林院にて哥合し侍けるに……、144 摂政殿下にて十首哥よませ侍けるに……―よませ給けるに、167 家綱かもとよりはまくりをよこすとしてやまふきを上にさして書付て侍ける、221……かひの君のもとよりいひ送て侍ける、502……春宮大夫公実のもとよりをくられて侍ける、672……修理大夫頭季の許よりをくられて侍りける哥、731 むかしはしたしかりし人のよのありかたさに人につきてはるかなるほとになん思ひたつといはせて侍けれとも……、733 高階経敏か相模守にてくたり侍けるに……、736 五節のころとかたらひて侍ける人の……、738……おみなへしにつけてをくられて侍ける、745 常陸守経兼かくたり侍りけるに……774 一のすにこ
1となく入て……酒なと心さして侍りけるを人くいそきのみけるにことの外にすかりければのみさして侍けるをみてよめる、
2

795 ひくしまと云所のあまとて……まうてきてものとも心さして侍けるか……たひいふ魚をとりいて侍けるをみてよめる
—とりて侍けるを、² いて、(朱) 836 ……人つてにいはせてはへりければつかはしける、838 ……人のもとよりをくりて侍ける—をくり侍
ける、1046 人のもとにまかりて後いかなる事かありけん送て侍ける—をくりてよめる、1067 人を尋けるにうへにといはせてあひ侍
さりければ……、1164 つれなくのみ侍ける人のかり……、1230 ……かれよりをくりて侍ける、

以下は巻九・十両巻の丁寧語等の「侍り」の用例である。同様に掲示する。

1309 皇后宮弘徽殿におはしましける時に……豊は石たみみしかれて侍めりといふを聞てよめる、1323 権僧正永縁かもとより牛を
心さして侍りければかへり事に……、1325 ……つれ／＼はいか／＼なと訪て侍りけるに……、1333 あそひ侍りける所にて隆源阿闍梨
いたくねふりければ……、1352 すいかんを人のよませ侍りければよめる、1354 人のもとにまかりたりけるにかみ／＼をひきてもの
にとりいて侍りければ……、1368 ……人をもかくやあたにわする／＼とかき侍りけるを見てよめる、1377 人のもとに……かれよ
りをくりて侍りける、1397 式部大夫の……ふみはつしといふ事をして鳥をとり侍けるを……、1398 ……別当実行公卿勅使にて大神
宮へまいられたりけるに齋宮のくたらせ給しをり行事弁にて侍りけるか……、1413 同人のもとより松たけにうへてをくりてはへ
りける、1526 前下総守仲正くよりのほりて送てはへりける、1553 ……こもりかいねといふものもちゐにしてとりいて侍ける¹
をまたのひみそうつにして侍けるをみてよめる、1554 ……むくさの物をくりて侍けるをとりをきたるをみて……、1573 中納言重
資藏人頭にてはへりける時……、

以上、二—(1)は六十二—五例(内巻九・十両巻三十一例)、二—(2)三十九例(内巻九・十両巻十六例)が散見される。

註三 初奏本 292 藤原重基歌・307 藤原家経歌・366 源雅光歌の詞書に、三例

註四 公夏筆本 19 ノ次源俊頼歌・683 権僧正永縁歌の詞書に、二例

註五 正保版 1 修理大夫頭季歌・30 撰政左大臣歌・51 内大臣歌・71 高階経成朝臣歌・72 右兵衛督伊通歌・683 権僧正永縁の詞書
に、六例 以上註四・五旧国歌大観番号

註六 三奏本64御匣殿歌・71下野歌・96源俊頼歌・99藤原盛房歌・323(大嘗会)藤原敦光歌・326大宰大貳長実歌の詞書に、六例

註七 勅撰集に所見する此「よみ侍りける」の用例は、又個々に於てそれぞれの結果が見出され、一概に一方を以て結論づけることの出来がたいのは当然である。従つて今此処で取敢えず金葉集前後の勅撰集につき一瞥すると、「拾遺抄」は、流布本系の群書類従本五九〇首中に二六例、二類の書陵部本(551-552)五七九首中に三七例が散見され、「拾遺集」同様に比較的多くが混在している。更に「後拾遺集」にいたると、その頻度数は著しく増加し、前者の略三倍を超えることが予想される。ただ前者同様に諸本の調査結果の不足により数字的結果は不充分ながら、前二本のみにも此撰者の意向の如きを暗示し、その意図をも窺知させるものがあるのではないかと想像されるのである。因みに「古今集」は用例極めて尠くして寧ろ消除の意図を明らかにするのである。その点では「金葉集」も又それに襲つたものであろうか。「金葉集」に続く「詞花集」に於ても、この傾向を同じくし流布本八代集抄四一首中、六例を散見するにすぎず、高松宮本四一五首中、八例と多少の増減をみるが、略同程度の使用例である。単純に一用例から云々するのもいかがとは思われるが、金葉・詞花両集から予測されるのは、前集である「後拾遺集」とは別する詞書構成意図の一端を窺視させているのではないかと思われるのである。

一方、又、私家集の精査を俟たねばならぬが、自撰・他撰の間に揺れる諸集に於ては判断基準も設けがたく、任意に「私家集大成中古」所収の大納言公任集以下待賢門院堀河集までの諸集を一瞥したにすぎないが、「よみ侍りける」の表現のみに限つてみると、「為忠集」に顕著に頻出するが該集には諸々の問題をかかえるので、これを除外すると所見例は意外に尠い。「能因法師歌集」(書陵部蔵54-563)に四例―35・38・76・113―と校合イ本一例―74、「大納言経信集」(三手文庫蔵 申―286)に三例―59・70・112、「基俊集」一類本(書陵部蔵501-743)に一例―85、又「よみ侍りし」の表記一例―17・115等が存し、又これに準ずる謙讓語の表記が散見するが、その点に關しては更に詳細な類別の検証を必要とするので言及をさけるが、私家集に於ても比較的には限られたものに集中するようである。

註八 以下、その歌番号を列記すると、

春部	2	5	11	23	42	43	55	59	82	83	86	98	99	113	116	117	120	121	122	130	131	139	143	145	146	150	151		
夏部	153	163	164	165	175	176	179	182	183	189																			
秋部	361	364	366	367	369	370		251	263	283	284	291	298	305	311	319	321	323	324	325	327	332	338	344	345	347	349	357	358
冬部	509	519	537	539	541	550	559																						
祝部・別離〔部〕					692	694	737	762	763	767	770	773	775																
悲歎部・神祇・积教〔部〕							785	786	832	853	854	855	906	907	912	916	917	924	925	932	933	936	941	982					
恋部上(下)	1017	1045	1061	1069	1089	1107	1114	1123	1132	1135	1162	1176	1180	1217	1219	1220	1229												

の一七三例を散見する。

註九 井上宗雄氏「丹後守為忠をめぐって」 文学語学 昭和34・9、「私家集大成中古Ⅱ」所収、森本元子氏同解題

三手文庫蔵 〔江戸中期〕今井似閑写カ 存自卷一至卷十

袋綴一冊。水辺草花文様打曇表紙、竪二十七糎、横二十・六糎。料紙、薄様。字面高サ約二十一・八糎、每半葉十

二行に和歌一行書き、詞書二字下げに書きする。本文墨付百七十丁。

外題、表紙中央に「散木集 俊頼家集」(本文同筆カ)と打付書きしている。

本書は、上掲契沖書写本(別筆二巻を含む)十巻の転写本である。但し、転写に際し、以下に誌すごとく本文には一

定の改訂を施し、契沖本に見る混成の諸相は既に消失している。しかしながら転写本としては後掲二本に比しては丹念にして忠実な書写態度を持っている。似閑自筆とすれば前掲本の校合終了—元禄六年—後に程経ずして師契沖より書写の時宜を与えられたのであろう。

印記、「賀茂二手文庫」(朱陰刻)「上鴨奉納」(瓢形朱印)「今井/似閑」(朱印)等を巻首に捺している。瓢形印は似閑奉納本である。

本書の転写はいわば契沖朱墨補訂本の繕写とも称すべきものであり、本集伝本に於ける契沖校訂本の編成である。それは複合的本文の再編成ともいふべく本集伝本の本来の面目はこの時点に於て契沖本として新たに派生したと位置付けるべきであらう。

それならば、その補訂本文の繕写に於ける具体的方針を見るに、当然の事ながら、それは本文に就いての事柄であり、契沖書入れに関する限りは寧ろ謹直な移写を心掛けたというべきである。

偕、その本文は、前掲契沖本の解題に於て縷述したごとく、(イ)巻一—八と巻九・十両巻はその依拠本を各々異にする系統本であること、(ロ)しかも契沖自筆部分(巻八迄)に於ては伝本上、類例をみぬ欠落本文が多見され—前掲解題一覽表(一)・(二)—その欠落本文には過半にわたり朱筆補入本文—一部墨筆—が傍記細註され—同一覽表(一)—且つ細部に於ける校異補訂の朱校または朱訂が随処に施されている。更に(ハ)別筆巻九・十両巻の依拠本文と想定されるイ本の校合が下冊—巻五以下—に校付されているのである。その上に又(ニ)諸集収載歌による本文異同を朱註するがごとき諸相を併せ包摂するのが契沖本本文の実態である。

この可成り錯雑する契沖本を、この転写者—似閑—は統一的一本としてその補訂に沿い再構成するのを原則として

書写しているのである。(イ)は当然の事ながら慮外され、(ロ)朱筆補入本文は契沖校訂本文として原則に従って本行本文に繰入れているが、猶40詞書・644詞書・歌・646詞書・歌・741詞書・746作者・871歌・872詞書―詳細同一覧表(ニ)参照―等は本文として本行化することは認めずに例外として契沖本通り細補している処なども散見される。本集本文として整訂するには猶ためらいがあったのであろうか。

又、本文化と朱補の両面の残映する一例を挙げれば、秋部 536

九月十三夜殿下にてよめる(朱)イ无(朱)法性寺関白―契本

九月十三夜殿下にてよめる(朱)イ无(朱)法性寺関白―本書

の如く、「よめる」を本行化し、見消ちの消去部分もそのままにとどめるといふ対処便法をも併せ用いているのである。

右例にみるがごとく主要補入本文―同一覧表(ニ)―とは別に随処に所見される朱校朱訂についても原則は保持されながらもすべて採入するのみでなく、それに伴い契沖本本行の本文が入代り傍記される例外部分も散見される。その二・三を例示すると、55第二句「色をはやみに」契本↓「色をはやへに」、72第二句「みねこそ浪に」同↓「みねこそ風浪(朱)に」、116初句「かさしきな」同↓「やさしやな」、118第二句「花の梢に」同↓「花の梢を」……、のごとくに並記して両本文を残留めている例などは散見される。その意図は判然としがたいが各本文の両意を残そうとする配慮でもあるうか。又101詞書「……あそはせ給ひけるに俊頼いたるめり……」契本↓「……あそはせ給けるに俊頼いたるめり……」と契沖本をその儘に書写する処も見出されて、時に一貫性を欠く点はあるが、勿論数量的には前例共々に僅少である。しがし其等は本文異同に於ける校訂本文となっている処に種々問題をはらむと同時に本書は既にこの時点に於て

原本文は厳密には溯及しがたい一混成転写本と化していることは否まれないのである。

そのことは(ハ)下冊―巻五・六・七・八、就中七・八両巻―に所見するイ本校記―契沖本解題註一に一覽した―についても同様である。即ち、原則として、契沖本に付す見消ち本文箇処に於けるイ校傍記はほゞすべてを本行とし、その他はイ校傍記をそのままに移写する方法であり、猶細部には任意的ではあるが略統一されている。

しかし、このイ校とは異なるが、(ニ)諸集収載歌による本文異同の朱校記については本文として採定しない原則をとりながらに、まゝこれを本文として本行化するところが散見されるのである。例えば夫木集の校異部分の一・二例を誌すと、秋部469詞書は、

田上にて舟にのりてやしまといふ所にまかりたりけるにきりたちこめていふせかりければよめりと云々夫木十三のいふせかりけるをみてよめりける 契本

田上にて舟にのりてやしまといふ所にまかりたりけるにきりたちこめていふせかりければよめりける 本書

と兩本文を複合し整訂している、大野広城本・石川県立図書館本は共に夫木集校記を除き契沖本本行を転写するにとどめている。又1208の次は

中納言雅定の八条の家にて公有障恋共イといへることを

あふ事はしけめゆひかと思ひしをほとをかりにこん人はたのまし

浅ましや君のみことにことつけて人のさまをはいもしらぬなりけり 1209

と書写している。「あふ事は」の歌は夫木雜部十八所収の源伸正歌であり、1208歌の類歌としての朱書入れを施したものである。当該例などは偶々の錯誤であろうが夫木所載歌が本集に混入する顕著な一例でもある。この甚しい例はともかくも、68第四句「花こそ風を夫木(朱)に」契本↓「花をそ風に」、又次郎百首の例では、59第三・四・五句「鶯の次郎(朱)は声の色さ

へことにそ^も有^もける^{かな}」同↓「鶯の色の色さへことにも有かな」の如く細部の助辞にわたる任意的改訂を施す処などが散見されるのである。又それは上記の両集にかぎらず他集との場合に於ても同様に所見され、共に尠いながらも、結句は転写者による任意撰択の本文構成となり、契沖校合の内包する諸要因は統合され不明のまゝに其意義を失うのである。当代一般の校訂本文ではあるが、伝本系統論上の課題対象としては排除されるべき書写一本となっている。そのほか、二・三の誤脱本文が所見されるが転写本に於ける当然事であろう。

以上の本文校勘の付註以外に所見する契沖本の書入れ―諸集入集歌詞書・類歌・語解・歌解等その他―は他の転写本と併せ同解題にも付記したごとく他本に比し極めて篤実に移写されている。

又、契沖書写本に所見される別筆補写挿入一紙、即ち、459詞書より462歌迄の四首十二行は当該箇処に「落丁」と誌し、463から466の間の行間余白に細書移写している。総じて本書は書写行数はもとより各巻丁数も略前者に準じ―その朱補による丁数の変更以外は―まさに契沖校訂本の良き繕写本たる面目をとどめている。

石川県立図書館李花亭文庫蔵 「江戸中期」写 存自卷一至卷十

袋綴、二冊。浅缥色表紙、竪二十七・二纏、横十九・七纏。料紙、楮紙。字面高サ約二十一・二纏。每半葉十一行に和歌一行書き、詞書一字下げに書写する。本文墨付上冊七十一丁、下冊百十四丁。

題簽（左肩）短冊、「散木奇詞集^{自一}」^{至四}、「散木奇詞集^{自五}」^{至十}（同筆カ）と墨書している。

本書は前掲書同様に契沖書写本の転写本である。前掲本とは次に誌すごとくに相互に多少の異同を見出すが、契沖本の朱補訂加筆を斟酌し、本文化した繕写本である。従って、前者と同じく既に契沖校合本としての面影は消亡して

いる。転写の時期は未詳であるが、契沖本上冊に追補された押紙、即ち秋部459詞書より462歌迄四首十二行が転写されず、且つ459詞書初行の朱訂部分―追補本文による重複本文―も所見されぬので、この押紙追補の以前ではないかと想定される。

印記、「布地遠香」(円朱印)、「李花亭文庫」(重郭長方形朱印)等が両冊巻首に捺されている。

本書の転写方法も前掲三手文庫本と基本的には異るところなく、契沖本の朱補校訂に沿い、その殆んどを校訂本文として採定し本行化している。それについては、契沖本解題に一覧表(二)に付記したので、前掲本との異同箇処のみを略記することにする。

秋部536詞書は前掲本に於て朱補入本文を相交え稍々混成的であるに比し、本書では、

九月十三夜殿下にてよめる

と補訂に従い、且つ「法性寺関白」^{イニ无}の本文も同様にイ本校記により消去している。又、別離741の詞書・作者は「返し／加賀守」も前掲本と相違し本文本行と同様に、釈教871歌・872詞書は追補本文をそのままに本文として編入して、相互にその本文の採定は各個の任意がやはり働き独自本文を構成する要因となっている。

そのほかにも、諸集載録本文との朱校異をも誤認によるのであろうか、本集本文とする処もある。例えば、冬部569歌は、

千冬 ^{か(朱)}
いかは〇り秋のなこりを詠まし今朝は梢木の葉にあらしふかすは ^(朱) 契本

千冬
いかはかり秋のなこりを詠まし今朝は木の葉にあらしふかすは 本書

と、千載集秋部所収の第四・五句を以って整定している。本集の諸本文には当該本文を所見しない。因みに前掲三

手文庫本も同じくする。同様な例は恋部上にも所見され、その1060詞書にも―前掲一覽表(一)既出―

新古恋二年をへてこふ(見消ち、たる恋ト訂ス)といへる心をよみ侍ける(朱)
君恋ふとなるみのうらの浜楸しほれてのみもとしをふるかな 契本

経年恋歎
年をへたる恋といへる心をよみ侍ける

新古恋二 経年恋歎
君こふとなるみのうらの浜楸しほれてのみもとしをふるかな 本書

と、新古今集恋部二の詞書を採り本集本文としてしているのである。前者同様に本集独自本文として改訂される結果となつてゐる。

又、恋部下1232歌「をしめとも立もとまらぬ秋露は云々」は細書補入されており、契沖本所載歌たる前提のなきかぎりは単なる追補歌とも誤解を招くのも避けがたい。

更に細部の語句上の異同におよべば、その本文採否に於ては、前掲三手文庫本との間には相違は増幅し、両本の徑庭は契沖本を俟つのほかはないのである。

その細部の語句上の改訂につき参考までに二三例示すると、契沖本下冊に多見する―契沖本解題註一―イ本朱校は三手文庫本同様に移写傍記するのが基本であるが、以下のごとく任意の撰択がなされているのである。817詞書「……その

かみに侍て^{イニナシ(朱)}ければみてくらたてまつるとて……」契・大本↓「……そのかみにみてくらたてまつるとて……」本書・三

本、901詞書「……といひ侍^{へる(朱)}ことをよめる」契・大本↓「……といへることをよめる」本書・三本、1053第三句「もりな

れは^{ヤイ}契・大・三本↓「もりなれや」本書、1095第四句「我^{わりさくイ(更ニリヲカト訂)}さへ人むね」契本↓「わり^かさくむねを」本書・三本↓「わ

かさくむねを」大本、の如く各転写者の意識が働いている。僅か数例を挙げるにすぎぬが、かかる異同は相当箇処におよぶのである。又、書写に伴う錯誤、誤脱は当然の事ながら所見され、つまるところ、異同多き朱補校勘本文から

一校訂本を整理することによる一本の派生であり、前者と共に正しくは既に一系統本としての意義は失なわれているというべきであろう。

本書に移写する右本文以外の書入れに就いては契沖書写本備考にも併せ付記したが、前掲三手文庫本又次述大野広城本に比し刪省する所が随所に所見される。書写者の意図的なものか否かは判断しがたい。が、三手文庫本書写以前の転写とも推測されるので、あるいは契沖の書入れ終了以前の補訂校本に依拠した可能性も皆無ではないが、現在未詳というほかはない。しかし、契沖書写本↓繕写本↓本書と、その経由を想定するよりも、契沖書写本からの直接の浄書校訂本とするのが妥当かと推量されるのである。それを許容される者は自ら限られるのであるが又審らかにしがたい。藤岡作太郎氏手沢の後かと思われる書入れ一・二が散点する。167・1057「名寄」の校異などである。

国立公文書館内閣文庫蔵 天保二年写 大野広城手校本 存自卷一至卷十

袋綴、三冊。淡茶色刷毛引表紙、竪二十七・二糎、横十八・七糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十・二糎。每半葉十行に和歌一行書き、詞書二字下げに書写する。本文墨付、上冊八十六丁、中冊六十二丁、下冊七十八丁。―現在下冊に綴違いあり、連歌の項1585唱句より1588和句までの一丁を、1570唱句作者名(60丁ウ)の次に挿入す―

外題、表紙左肩に「散木奇調集 上(中下)」と本文同筆にて打付書している。

内題、「散木奇調集第一(く十) 春部(く雜部下)」と記し、その許に「源俊頼家集」と誌す。但し卷七は「詞」を「歌」に作り、契沖書写本と一部書体を異にする。
弁敷後准之(朱)

本書は奥書が存し、第三冊第十卷の末に、

右散木奇譚集以織部正乘尹本校合了(但し次記奥書云茶墨、現在暗緑墨) (イ) 七十八丁表

從四位下左京太夫行本頭源朝臣俊頼(マ)從四位帥／大納言経信男 (ロ)

右散木奔歌集

元禄六年八月下旬得古写本於円珠庵対校了

密乗沙門契沖 (ハ)

朱書入契沖茶色類聚本墨書浜臣其外後人／書入 元本寛永之古写本

(ニ)

天保二卯年十一月令書写追々校合書入畢

忍野 大野広城 (ホ)

と誌している。

右奥書は、(イ)は群書類従本に記す校合本奥書を付記したものにすぎないので、(ロ)〜(ホ)が大野広城本の奥書である。稍々明瞭さを欠くが、本書の書写校合次第を記述したものである。

その中、(ハ)識語は元来契沖書写本に存したものであろうが、前掲円珠庵襲蔵契沖自筆本には所載せず、又上掲転写二本にも見えない。その一本が今井似閑書写本であるところから、本書に至り唐突に此識語が記録されるのは不審である。しかし、その記述内容は、前述したごとく、契沖本巻一〜八の書写後、巻九・十両巻の令補写と下冊のイ本校合として使用された対校本と推定され、極めてよく符合するのである。にもかかわらず、その経由は辿りえない、未詳ではあるが、本書の本文主体が契沖本本文の転写本であれば、元来記載されていたと想定せざるをえない。現契沖本はいずれかの過程で漏脱したのもあろうか。あるいは、又、浜臣書入本―現伝存未詳―に何等かの経由にて移写されていたのもあろうか。それは(ニ)の識語に於ても、「元本寛永之古写本」とあるを、関根慶子氏註十一は「元本は『寛永之古写本』と称してゐるがこれ即ち契沖本であるらしい」と述べられているが、この「元本寛永之古写本」の記載も又

円珠庵襲蔵本には記述するところがない。本書が共に記録するところは現契沖本から見ればその信憑性はありながらに猶両記載事項の経路は審らかにしがたいのである。

次に、(二)の識語は対校本書入れ—本文校異併びに付註にわたる—に關しての記述である。本書は以下に述べるように、契沖書写朱校本をその補訂に沿い繕写した本文併びに校異を基礎にして本体を構成し、更に群書類従本を以って補校・対校している。本識語による茶色—現在暗緑の墨跡であるが未詳—の校合である。その上に、墨筆の浜臣其外の書入れ—殆ど付註書入れの移写である—を補配していることを述べたのであろう。「元本寛永之古写本」とあるのは上記の事実から勘案して契沖本の依拠本として、関根氏は推論なされたのであろう。確かに現円珠庵本を具に所見するところ、(ハ)の識語と併せて妥当な結論である。しかし、繰返すが猶不審は残り、現在所在未詳な清水浜臣手校本の出現を俟つほかはないと思うのである。

ともかく、本書は、上掲契沖本十卷二冊—直接か否かは前述の如く未詳部分を残すが—を主体として群書類従本本文校合に併せて浜臣等付註書入れを輯して本書が構成されているのである。

印記、下冊首尾に、「大野藥園／文庫」の方形朱印を捺している。

扱、本書本文の基幹を構成するのは既述のごとく契沖書写本であり、前掲二本と同じくその朱校・補入傍記を略同様な校訂方法により編成された派生伝本の一つである。従って当然の事ながら兩三本は転写・校訂時に惹起された意図的或は偶然の要因による差異が相互の異同の主たるものとなるのである。しかし猶次のごとき顕著なる各本間の異同も所見されるのである。その大概は既に契沖本解題に一覧したが重ねてその目安にその異同の一部を再記すると、

祝部721番歌は本書では欠落し、当該箇所群書類従本にて本書識語云茶色墨にて、

君かすむくした河川(契)乱(契)にやみたれたる神の心こころ(契)打(契)もうちとけぬらん—こゝに入

と行間細記し「こゝに入」とまで註記している。契沖書写本に直接に依拠すれば、この補入はありえぬこととも思われるのである。前掲二本には当然のことながら、右の誤脱はない。

秋部469番詞書は三手文庫本は契沖書写本文と朱校本文とによる一種の混成本文—三手文庫解題に掲出—を構成するのに対し、本書及び李花亭文庫本では、

田上にて舟にのりてやしまという所に〇霧のいふせかりけるをみてよめりける

とのみ書写し、朱傍記(〇印箇処)「まかりたりけるにきりたちこめていふせかりければよめりと云々夫木十三」を原則に従い—諸集校異を除外する—本行化を避けているが、此処にも三手文庫本との異同を生ずる結果を導いている。

又、三手文庫本が契沖本の朱校をそのままに細書傍記するところの、40詞書・644詞書・歌・646詞書・歌・741詞書・作者・746作者・871歌・872詞書・1582唱和句作者等は本書はいずれも本行としていて依拠本も又相違するときの感を与えるのである。因みに李花亭文庫本も1582唱和句作者細書傍記するのほかは本書と共通している。

前例とは逆に、三手・李花亭両文庫本が契沖書写本の朱補を本行と本文化するに對し、本書は次の如くに契沖書写本をそのまま移写するところもある。即ち、恋部上の

身相神通樂

天飛に身をなしていはひしやかなるの社の齋榎のさかえてそみる槻い(朱)にくよあるへきかくしつまでも欺(朱)あたしまつりに 971

と書写している。転者写の任意の意向と見るべきであらう。

更に次の一例などは、契沖書写本の原型を既に不明なものとしている。同じく同巻の

夜恋

金恋上 国信卿の家の哥合に夜恋の心をよめる(朱)
よとよもに玉ちる床のすか枕みせはや人によはのけしきを
経年恋歎

1059

新古恋二ノ君こふとなるみのうらの浜楸しほれてのみも年をふる哉(朱)

1060

と、1060歌を朱筆細書し、その歌頭に「塙本同」と付記して、あたかも契沖書写本の朱書補入歌のごとくに書写しているのである。もとより、契沖本は該歌を本行とし墨書し、歌頭に朱の集付をしているのである。前掲二本の処にても繰返し言及するところであるが、各筆写者による本文採否の任意性が一略共通する校訂原則を示しながらに一避けえざる結果を導いているのであろう。

そのことは、細部本文に於ける朱補・訂箇処にても同様であり一具体的用例は多例にわたり省略する一前掲二書とは相互に相応の異同が多く所見されるのであるが、なかでも李花亭文庫本が朱補・訂に準拠するのに対し、本書は比較的ではあるが、例のイ本校記をも含め契沖書写本の傍記痕跡をとどめているところが散見されるのである。しかし結局は両三本、書写者の校訂意識が各々の校訂本文たらしめているのである。

如上、この三本の校訂本文は上述の異同を去れば、現存諸本の中では、本文語句そのものとしては一勿論排列・欠員歌の異同は除く一第二類八巻本系に比較的近似し、なかでも神宮文庫A本・志香須賀文庫A本、次いで源忠房本に近似関係が所見され、契沖書写墨筆本文、朱補書入本本文とを含めて、相互の間には、本集撰述の経過か、或は伝流上の経由かはさて措き、両系を結ぶ紐帯のごときものが感得されるのである。契沖本転写三本の奥に併せ付言しておく。

本書は奥書識語に誌すごとく、契沖書写本の本文以外に、その欠落と異同を群書類従本を以って対校している。識

語に茶色とあるが、現在は鶯色というか暗緑色である。その理由は不明である、が、ともかく可成り詳細な校勘傍記であり、一秋部³⁷²詞書・歌「秋きては云々」等に於ける対校見落しなども見出されるが——一目両系は判然とする。しかし、留意されねばならぬのは、さきの契沖校勘の朱傍記——本文中に繰込まれずに残る朱校傍記——も識語には朱筆としながらに時ならず墨書移写され、識語云浜臣等書入れと稍々混入しているために、全体として本書は稍々紛紜とした処が生じやすい状況となっていることである。墨校記にかぎれば浜臣等のものは皆無に近く、契沖本のそれである。本書披閱の場合には用心されるのである。

同様なことは、右の本文校異書入れのみならず、本集の語解・歌解・類歌・諸集関聯事項等、付註書入れに關しても、原則として契沖書入れは朱書するが猶半ば近くを墨移写し、又浜臣以下同書入れも墨書されていて、既に契沖書写本と対照する以外には弁別しがたい現状である。因みに契沖付註の書入れも三手文庫本に次いで篤実に移写されているのであるが、本書が契沖書写本より直接に転写したものであれば、前者本文校記と共に、かかる混用は想定しがたいのである。前掲二本とも異同するところから、更に第三者の転写経過なども予想され、とすれば、浜臣書入れを極めて多く移写するのを併せ思へば、奈辺にその經由が臆測されなくてもないのである。ともかくも、既述の契沖奥書の由来といい、本書の書写状況といい、その依拠本は契沖書写本そのものとは想定しがたいのである。又付言すれば清水浜臣校合書入本も現在所在を明らかにしないが、その書入れは多項に亘り且つ詳細にして留意されるものである。本書の書写者、大野広城の書入れは、わずかに、夏部末に「大野広城云竹芝寺は今芝三田台町濟海寺なり」とす記を偶目するのみである。

第二類本系

神宮文庫蔵 〔近世初〕写 存自卷一至卷八

袋綴、二冊。浅葱色花卉卍ツナギ空押表紙、竪二十八・九糎、横十九・五糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十一糎。每半葉九行に和歌一行書き、詞書一字下げに書写する。本文墨付、上冊百三丁、下冊九十三丁。

題簽、斐紙短冊を表紙左肩に貼付し、「散木集 上(下)」と墨書する。

内題、「散木奇歌集第一(〜八) 春部(〜恋部下)」と記す。部立表記は前記契沖書写本と同じくし、上冊四卷、四季部、下冊四卷、第五「祝部・別離・旅宿」、第六「悲歎部・神祇・釈教」、第七・八「恋部上(下)」と誌している。本書には奥書は見えぬ。八巻本であるとの理由のみではなからう。

印記、各冊巻首に、「林崎文庫」重郭方形印、各尾に「明治四年甲辰吉旦奉納／皇太神宮林崎文庫以期不朽／京都勤思堂村井古巖敬義拜」と奉納印を捺している。

偕、以下に本書に於ける本文異同・歌序次第、又、本書個有な特色を一括し一覽することにする。

(一) 先ず例に倣い本書に於ける欠員歌並びに顕著なる欠落本文―第四類書陵部A本に対する―を次に掲示することにする。所掲の欠落本文は同A本である。又、当該箇処に於ける類系諸本の有無を付記することにした。但し葉山信果本

には村上忠順の標註第一次稿として群書類従本・野口本の校記が散見するが、これは除外し、信果筆本文と同朱補のみを対象とするものである。

1 返 春部112詞書 神A・志A・忠・江・野・築本ナシ、信本「原本ナシ／一本塙アリ」ト朱註。他類本については後述する、以下同。

2 はしかきにさとをはかす^れとかけり 同187左注 神A・志A・野本ナシ、忠・江・信・築本同筆細補

3 をくにあまのおふねもとかけり 同188左注 神A・志A・野本ナシ、忠・江・信・築本同筆細補
百首歌中衣かへの
心よめる

4 夏ころもたちきるけふのしら重 下句無本 神A・志A・野本傍記
しらしな人にうらもなしとは
夏部194詞書・歌

簡処ナシ以下「傍ナシ」ト略記ス

5 もろ共に今そ鳴なるほととぎす 無本 八声の鳥はをのかつまかは 同236歌 神A・志A・忠・野本傍ナシ、江本同筆朱

補、信本「原本ナシ一本塙本存」ト朱註

6 皇后宮権大夫師時の八条にて水風晚 涼といへる事をよめる 同312詞書 神A・志A本傍ナシ

7 秋きては忍ひなあへそと思へはや風をとつれてくれかゝるらん 秋部372歌 神A・志A本ナシ

8 同所にてとふ人もなきたひの すみかに霧ふりふたかりて いふせかりけるにみやこの人うらめしかりければ 同

463詞書 神A・志A・忠・江・信・野・築本傍ナシ

9 ……朝夕の御いとなみとなん見えかしこの 事につさはれる人をはそのむしろにめしてもて はやさせ給ひ……

同504詞書 神A・志A・野本傍ナシ

10 秋の山の月をみるといへる事をよめる 同538詞書 神A・志A・忠・信・野本ナシ、江本同筆朱補

11 家道朝臣 冬部658作者 神A・志A・忠・江・野本ナシ、信本同筆朱補

12 衣手のさへゆくまゝに神なみのみむろの山に雪はふりつゝ 同667歌 神A・志A本ナシ

13 加賀守 別離741作者 神A・志A・野本ナシ

14 経盛兼 同746作者 神A・志A・忠・江・野本ナシ、信本同筆朱補

15 ふちとゝいふところにとまらむとしけるに
おひ風ふきなとすまた日をたかしとてよらてすきければよめる

769詞書 神A・志A・忠本傍ナシ、江・信本同筆朱補

16 例ならぬ人の舟にあるかくるしかるときゝて
そひ船にのせうつすをきゝて 悲歎部810詞書 神A・志A・忠・野

本傍ナシ、江・信本同筆朱補

17 君こふる涙の滝におほゝれてふりさけ・さけふ声はきこゆや 同844歌 神A・志A・野本傍ナシ

18 君かためかけるみのりのみつつきにわか身をさへもすゝきつる哉

神力品の心をよめる 釈教871歌・872詞書 神A・志A本ナシ

19 人はいさひかりのすちをしかそともおなしほとけやしらはしるらん 同892歌 神A・志A・忠・野本ナシ、江・信

本同筆朱補

20 あしさまのこのゆかりはおほかたのみゝのつてにもきこえさりけり

その国に生ぬる人はむかしのことをしるさとりをえてそのかみの事をする

いへることをよめる 同918歌・919詞書 神A・志A本ナシ

21 そのほとゝ思ひかたきはよものうみにそこみしらぬ心也けり 同936歌 神A・志A・忠本ナシ、江・信本同筆朱補
22 諸の花くさくさにさきみたるといへる事をよめる

そこはくの花のひもとく庭のおもにをしのけたるははちす也けり 同958詞書・歌 神A・志A・忠・信本ナシ、江本
同筆朱細補

23 をんな 恋部上1008作者 神A・志A・忠・江・野本ナシ、信本同筆朱補

24 みつきといふはつくしのふのかとてなり 同1039左注 神A・志A・忠・野本ナシ、江・信本同筆朱補

25 経年恋 同1060詞書 神A・志A本ナシ

26 あさましやこはなにことのさまそとよこひせよとてもむまれさりけり 恋部下1136歌 神A・志A・忠・信・野・
築本ナシ、江本同筆朱補

27 海路恋 同1160詞書 神A・志A・忠・江・野・築本ナシ、信本同筆朱補

28 恋の心をよめる

こひすとも身のけしきたにかはらすはいはぬに人のあやめましやは 同1221詞書・歌 神A・志A本ナシ
以上、二十八項ほどが、その大略である。葉山信果本は雑部上下両巻に補綴があるが、当該本解題に於て述べるこ
とにする。

(二)、続いて次に本書に所見する異文―前者同様に書陵部A本に対する―の主たるを掲示し、併せて二類諸本との関聯
を付記することにする。傍記校は書陵部A本である。

1 ならの哥合に人にかはりてほとゝきすをよめる

石見のうみうつたの山の木のまより／わかふるそてをいもみつらんか

風をいたみうつたの山に散花やふりけん袖の名残成らん―以上四行本行ニ書写ス―春部71歌 神A・志A本同(契本

同)、忠・江・信・野本ハ片仮名交リ細書傍記、^{註一}築本当該部ノミ平仮名交リ細書

2 山里にて夕良をみてよめる

方に云 あら玉のすとの(ママ)さかきめに(ママ)／よりそのいもし(ママ)えすはわかこひめやも

山里のすとか竹かきえたもをす夕良なれりすかひく／―以上四行―夏部354詞書・歌 神A・志A本同(契本引歌ナ

シ)、忠・江・信・野・築本ハ片仮名交リ細書傍記^{註二}

3 経年恋万云

玉たれのこすのす鶏舌にいりかよひきね／たらちこのはくかとてやとかせと申さん

としふともこすのきけきの絶間よりみえししなひは佛に立―以上四行―恋部下1175詞書・歌 神A・志A本同(契本

同)、忠・江・信・野・築本ハ片仮名交リ細書傍記^{註三}

と、三例いずれも万葉集引歌書入れを本文同様本行として書写しているのである。忠房旧蔵本以下五本にも付註したごとく同書入れを見る―又他類系統本にもまま移写の跡を所見する―がいずれも傍記細書の形式をとり、この書写様式は契沖書写本との関聯を想起する上に於ては単なる偶発的な結果とは推測しがたいものが存するかとも考え、此処に付記した。

次に(四)、本書の歌序次第につき一覽することにするが、次掲の一箇処は前掲契沖書写本系統―一類本系―に所見され、同様に二類本系では本書―但し、後述するごとく極めて類似形態を示す二類本志香須賀A本の一本が存する―にのみ見出さ^{註四}

れる歌序の誤りである。恐らく伝流經由に於ける錯綴により惹起された現象であろう。契沖書写本系類と本系類にわたるのをみると、その錯綴は相当に溯ることであろう。重ねて掲出すると、上冊四十八丁裏終行は夏部322歌を以って終り、次葉四十九丁初行は同部330詞書にはじまる。即ち

堀川院の御とき二間にてかなまりを云々、以下略

古は塵をたにこそいはひ(アマ)けれ雨にしほれぬ撫子の花」 322

泉辺納涼と云ることをよめる

楸おふるかた山かけの石井筒ふみならしてもむすふ比哉 330

と続き、以下四十九丁表裏には歌序を追い331〜338詞書までが書写されている。つづく五十丁表裏は、四十八丁裏終行をうけ、323詞書、即ち

なてしこをよめる

撫子の花みるほと(アマ)の心にてみたれみ国をねかほましかは 323

が書写され、同表裏に以下329歌迄が歌序に従い書写されている。そして五十一丁表初行は四十九丁裏終行338詞書を受け同歌「塩みては野嶋か崎の云々」にはじまり排列は整序に戻るのである。本書のみにかざれば、上記のごとく、四十九丁と五十丁の単なる綴誤りとして処理し得る。しかし、本書と系類を異にする契沖書写本に同様な錯序が見出されるのであれば、必ずしも本書の誤綴として対処しがたく、本書の拠った先行本に既に存するあやまりと推測せざるを得ない。契沖書写本から本書への移行はありえぬと同時に、本書から契沖本への展開も又その相互本文異同から想定しえないからである。従って、この錯簡は両類の分派する以前に於ける孰れかの過程の現象として把握されるべ

きであろう。しかし、現在、それを推測すべき手懸りを見出されないのである。ただし、両類の交錯点としては最も留意される処でもあることは確かである。因みに二類本では本書―前記のごとく志香須賀A本には極めて類似する錯叙が看取されるが―にのみ所見される錯簡である。

上記本書の錯簡を除けば、本書に見出される歌序次第の異同―前例同様書陵部A本に対する―は以下の三例にとどまる。契沖書写本に於て既に掲出する部分でもあるが、披見の便宜を思い同例を重出する。又、併せて本書同類本系諸本との異同―他類は暫く措き―を付記する。

(一)夏部

殿下にてほととぎすの歌人くよませ給ひける

初より身のはしめより時鳥あかても世々を過しつる哉 (マ) 223

ほととぎす声待つけてきくほとや人に我みのうらやまる覽 225

なかくともなきつといはん時鳥人わらはれにならしと思は (マ) 224

時鳥なかぬなけきの杜にきていとと声をはしめつるかな (マ) 228

しとみ山風はおろせと時鳥声はこもらぬ物にそ有ける 229

子規まちしわたらは八橋の雲手の数にこゑをきかはや 226

ほのめかすうき田の杜の時鳥思しつみて明しつるかな 227

かきねにはもすのはやにゑをのけりしてのたをさに忍かねつゝ 230

神A・志A・忠・江・信・築本同

(二)同部

大式仲(ママ)さねしら川にてほととぎすをよめる

音せぬは待人からか時鳥誰をしへけんゆ(ママ)へならぬ身を 263

ならの哥合に人にかはりて

時鳥鳴うれしさをつゝめとも袖には声もとまらさりけり 265

左京大夫経忠の八条にてよめる

子規声まぢかねてゆふけとふ道のうらにもことよき物を 264

時鳥不_レ乏と云事を

今こそはふたむら山の時鳥声おりはへてあやに鳴也 266

神A・志A・忠・江・信・野・築本同

(三)釈教

智恵光仏

佗人千の心のうちそよそなからしるやさとの光なるらん 891

不断光仏

ちかひおきて導引人の隙なさに光もたえぬ物にそ有ける 890

神A・志A・忠・江・信・野本同、築本欠巻部

以上の三例であるが、二類本系は、(一)に於て排列に小異を見る―後述―がいずれも当然の事ながら共通するのであ

る。殊に本書の転写本―後述―と想定される志香須賀A本は本文異同、更に漢字・仮名に於ても全く一致する。

且つ、上掲三例は契沖書写本にも共に見出され、本文上の稍々独自異文註五に於ても共有する処が所見され、前記の錯簡と共に本書と契沖書写本との間には、猶逕庭を存しながらに、その交錯する事相を呈示している。

上掲(一)・(二)・(三)並びに右記排列が本書に所見する諸特徴の概要である。その概要一覽に従い本書と同系類をなす二類本系諸本との関係を各項類別に整理することにする。

まず、(一)の本文異同に於ては、伝本の中には、本文同筆の墨追細記註六―忠・江・信・築本―同筆朱補入―江・信本註七―等が散見されるが、これらは孰れも書写情況より判断して、依拠原本には本来当該本文を欠くものと推測され、追補以前の本文に従った。以下には、「細補」、「朱補」を略記付注した。又、葉山信果本には当該本文を書写しながらに、左傍に「原本ナシ」と同筆朱記する処がある。この朱註は稍々曖昧ながら祖本原型を指示するものと認め、朱註に拠ることとし、略称「原」を付記することにする。更に、この信果本は村上忠順の再度の対校―野口本・群書類従本―本文が随所に見出されるが、当然信果本文と別すべく除外するものである。

(イ)二類本中、七本―神A・志A・忠・江・信・野・築本―が共通する欠本文は上掲表中―1・2・3・8・26・27、の六例である。但し、1(信本「原」)、2・3(忠・江・信・築本「細補」)、26(江本「朱補」)、27(信本「朱補」)あり。

(ロ)同じく六本―神A・志A・忠・江・信・野本―が共通する欠本文は―5・10・11・14・16・19・23・24、の八例である。但し、5(江本「朱補」・信本「原」)、10(江本「朱補」)、11(信本「朱補」)、14(信本「朱補」)、16(江・信本「朱補」)、19(江・信本「朱補」)、23(信本「朱補」)、24(江・信本「朱補」)あり。

(ハ)同じく五本―神A・志A・忠・江・信本―が共有する欠本文は―15・21・22、の三例である。但し、15・21(江・信

本「朱補」、22（江本「朱補」）あり。

(二)同じく三本―神A・志A・野本―が共通する欠本文は―4・9・13・17、の四例である。

(ホ)同じく二本―神A・志A―が共通する欠本文は―6・7・12・18・20・25・28、の七例である。

以上(イ)〜(ホ)は上記七本間に於ける欠本文―書陵部A本に対する―に見る相互関係の図式的類縁を一応は具示するものであると想定される。

即ち、(イ)〜(ホ)二十八例共に同じくする二類本は神A・志Aの両本である。両本は後述するごとく二類本系中、神A本―志A本と転写関係が予測されるのであれば当然の結果である。

ついで、(イ)〜(二)二十一例を共通するのは、神A・志A・野本の二本であり、両三本の近似関係は前者に続いて想定されるのであるが、この野口本は巻一〜四、巻五〜十、附載頭昭註、と各書写年代・手跡を異にする取合本であり、系類上からは巻五〜十は第三類本系に属し、その間の共通異同たる13・17は寧ろ第三類本系と、第二類本系神A・志A本との偶然の一致とみるべきであろう。しかしながら、巻一〜四の間に於ては、他本に見ぬ4・9の共通点を示して神A・志A本に隣接する伝本である。

次には、(イ)・(ロ)・(ハ)十七例を共通する神A・志A・忠・江・信本の五本は前二者に次いで近似関係が推測されることとなるわけである。但し、築本に於ては巻四〜七の中冊を欠き、(ハ)項三例―15・21・22―の本文異同に関しては不明である。従って、結局十七例を同じくする点よりすれば、上記五本が二類本系中、又一つの系統をなすものであると右表からは予測されるのである。而して築本も不明部分を含みながらも、この系列に入る一本であることは予想される。勿論、此の五〜六本の間には相互に独自の性格を包摂し、神A・志A本のごとき転写関係は想定しえないが、

二類本系としては、前者と相接する伝存本として措定されるのである。

(二)の二類本系異文に就いても、(一)同様の結果が見出される。即ち、

神A・志A本の両本は全く一致し、1〜5項まで同一本文である。但し、5項に於ては上掲のごとく他の五本との間に小異が所見される。

又、忠・江・信・野・築本の五本は、上掲異文に関する限り共通本文に源を発するものと考えねばならないであろう。当然(一)の場合と同様に各本間相互には、その異同が存するのはいうまでもない。

(三)の書写形態も前者(一)・(二)と同じくする結果である。しかしながら、この本歌の書写様式に關し云々するまでもないことは言い条、本集に於ては、特に神A・志A本と契沖書写本の両三本に見る書写形態は一種独自であり、単に偶然の一致とはいいがたく、その源流に溯る手懸ともなる。他の忠・江・信・野・築本の五本は、いずれも本歌傍註の様式をとり、次の三類本系に於ても同例を散見するところであれば別して留意すべきことではないが、1〜3項を共有する点に於ては書入れとしても二類本の特徴を示し、系類の源を同じくすることを示唆するものであろう。

次に、(四)の歌序次第に於ては、神A・志A本に所見する排列の錯簡部、既述したごときを排除すれば、三例の異同を見出すにすぎず、(一)夏部に於ける野口本の一部相違―225・224に対する224・225の順―を所見するにとどまり、二類本系七本は同じくするのである。

以上、(一)〜(四)の異同事項より図式的ではあるが、冒頭一覽の系類表のごときを想定したのである。その細部については各当該本項にて述べることとする。

又、他類本との本文上に於ける類縁関係は、その概要を契沖本解題中に略記し、以下に又詳述するが、此処で特に

留意されるのは、本系類に最も隣接する前掲一類本、その契沖書写本との異同についてである。

まず、(一)の本文異同―書陵部本(A)に対する―と契沖書写本との関聯である。―前表(一)の数字を以って本文揭示に代える。

此二類本系と同じくする契沖書写本の当該箇処は、次のイ・ロ・ハのごとくである。

イ、1・2・3・11・24・26・27

の七例であり、二類本系七本全て欠本文―但し前に倣い細補等を除く―である。但し、築本は11・24例の部分は欠巻部につき不明である。

ロ、二類本系共通するも契沖書写本に於ては朱筆補入している当該箇処は、10・14・16・23の四例が二類本系中、神A・志A・忠・江・信・野本六本に所見される欠本文であり、―但し、築本14・16・23項は欠巻部にて不明―、15・21・22の三例は神A・志A・忠・江・信本の五本に同じく所見し―但し、築本同欠巻部にて不明、又野本は別本系箇処である―、9・17の二例は神A・志A・野本の三本に、又、6・7・12・18・20・25・28の七例が神A・志A両本に見出される欠本文である。

ハ、又前者同様に、契沖書写本に於て墨筆補入する当該箇処は、4の一例で、神A・志A・野本の両三本に所見される同欠本文である。

以上、イ七例、ロ・ハ十七例、計二十四例が、(一)表^{註九}二十八例中に於て契沖本と同じくする欠本文であるのは契沖書写本との類縁関係を想定する上であらためて注意を喚起されるのである。又、その中でも、わけても神A・志A―野本は巻一―四部分―は契沖書写本に近接し、又、忠・江・信本の三本―築本は欠冊部を見るので暫く措き―は自ら一系統を形成し、前者と隣接して二類本(二)系を形成しているのではなからうかと措定するのである。本集の選定経過は推測すべくもないが、この二類本系の根幹をなす八巻本諸本は仮りに第一類本系からの移行を想定する時、上記ロハにみるこ

ときの本文の増幅を、その過程の中に組入れると、それは極めて自然な経過が予測されるのである。

因みに、そのことは、第一類本系に於ける契沖書写本の転写三本に於ける契沖朱補入本文の本行化による一種の整定本文とこの第二類本系本文―就中神A・志A両本―との素朴な校勘作業の結果からも抽出されるのである。とみれば、未だその是非のほどはともかくも、契沖書写本の持つ、朱補書入れ本文の意味するものは重ねて再顧されるべき対象となることであろう。

いずれにせよ、第一類本、契沖書写本とその補訂転写三本と、当第二類本との類縁関係は否認しがたい諸要因が相互の間に多く見出されるのである。そして、その移行経過が自撰経過によるものか、転写途次に於ける偶発的な二系類の派生にすぎないものかは卒爾に判断しがたいが、契沖書写本―墨筆書写部分―に所見した独自の語法、例えば、よめりける、よみ侍りける、の夥多にわたる本集伝本唯一の用例等を考慮に入れるとき、両系類の派生を転写、相伝上の本文改訂としてのみ把握することは又同様に卒爾の難はまぬがれぬものと思われる。いま仮りに両系類にわかれ、その淵源は深いのではなからうかと臆測するにとどめたいのである。

両系類はしかしながら共に本文誤脱の多き伝存本であることは否まれない。そして、それらは相伝経過に於て奈辺にまで溯りうるものであるかは現在推測すべくもないが、本書にかぎってみても、上表(一)に所見するすべてを単一に伝存経過に於ける本書の誤脱としてのみ律することも出来がたく、私に云う第一類本たる契沖書写本の祖系を捜査すると共に、第二類本系の本書との縁因を猶今後の課題として残すものである。

註一 忠本以下第二類本系五本には、

万云引哥石見ノ海ウツタノ山ノ木ノマヨリ我フル袖ライモミツランカ

と行間一行に細書している。

註二 同様に忠本以下第二類本系五本には、

万云引哥アラタマノストカ竹カキアメニヨリイモシミヘスハワレコイメヤハ

と行間一行に細書する。

註三 同様に忠本以下第二類本系四本には、

万云タマタレノコスノ寸鶏舌ニノリカヨイキネタラチネノハ、カトテヤトカセトマウサン

と行間一行―忠本―又ハ二行―江・信・築本―に片仮名交り細書傍記する。野本は書入れを欠く。

註四 志香須賀A本解題に於て重ねて詳記するが、本書の場合、

322歌次葉一丁・330詞書次葉一丁・338詞書次葉一丁 323詞書次葉一丁・329歌次葉一丁・338歌次葉一丁・345歌次葉一丁 346と、と錯綴するに對し、志香須賀A本は、

321詞書・322歌・330詞書・338詞書次葉一丁 338歌・345歌・323詞書・325歌・326詞書・329歌・346詞書と、と錯簡して極めて類似する。323詞書・329歌の間の位置の相違にすぎないともいえよう。その根を同じくすると想定される。

註五 揭示本文中に於て、223初・二句「初より身のはしめより」、同第五句「過しつる哉」、228第五句「ほしめつるかな」、263詞

書「大式仲さね……」、891第二句「心のうちそ」―但し契本「そを(朱)」とあり―の如く、本文は共通する處が所見される。

註六 一例を挙げると、松平忠房旧蔵本は、2・3例に於ては、

立かへり春おもふたに有物を君をさへけふまぢくらしつる 春部187

返し

はしかきにさとをはかれすとかけり187左注
おくにあまのをふねともかけり188左注

暮て行春を思ふもこぬ人をまつにも増るゆかぬ心は 同188

と書写され、両左注は書写状況より見て追記本文―本書又は依拠本―と想定される。他、江・信・築本も同様の書写形態をとっている。

註七 同じく一例を掲示すると、内閣文庫蔵「江本」には、5例では、

もろともに今そなくなる時鳥『八声の鳥はおのか妻かは』 夏部236

と、『』圈内は本文同筆にて朱補されている。信本も又同様である。

註八 「かへし」^{原本ナシ(朱)}本アリ(朱)「春部112」と本行に書写され、信果筆の朱校が付記されている。原本―後述解題参照―の意は記

したがごとく信果の依拠原本と想定される。

註九 以上二十四例の契沖書写本との同一欠落本文のほかに、19―892歌欠(六本、但し築本欠巻部)が契本は同詞書・歌を共に欠く、又、13―741作者名欠(神A・志A・野本)が契本は詞書・作者名共に欠するなど、両系全く同一とはいいがたいが、以上二例に於ける類縁関係もまた其処に存するのはいなみがたく、本書に所見する(一)表の異同本文は殆んど其儘に契沖書写本中に見出されるのである。

志香須賀文庫蔵(A) 「江戸後期」写 存自卷一至卷八

袋綴、合一冊。濃紺色艶出表紙、竪二十三・五糎、横十七・一糎。料紙、楮紙。字面高サ約十八・一糎。每半葉十
一行に和歌一行書き、詞書三字下げに書写する。本文墨付、百三十八丁。

題簽、黄蘗色短冊を表紙左肩に貼付し、「散木和詞集 全」(本文同筆)と墨書する。

内題、「散木奇歌集第一(一八) 春部(恋部下)」と記す。後表紙見返しに、「右俊頼朝臣之家集也」と中央に大書す。奥書又印記等なし。

本書は第二類本系中、前掲神宮文庫A本の忠実な転写本である。次に誌す相互の多少の異同を除けば、漢字・仮名に至るまで殆んど同じくし寧ろ神宮文庫A本からの直接の転写本とも推定される。

以下に、両本相互間の異同を揭示することにする。

(1)まず両本の歌序次第における錯簡部分の相違である。その錯簡部分は両本共にその起因を同じくしながらに錯誤経過が想定される。本書の当該箇所は次のごとくである。即ち、三十五丁、六・七・八行に、

古は塵をたにこそいはひ(ママ)けれ雨にしほれぬ撫子の花 夏部 322

泉辺納涼と云ることをよめる 同 330

楸おふるかた山かけの石井筒ふみならしてもすゝむ比哉 同 330

と、322歌から330詞書・歌にと転じ、三十五丁裏より三十六丁裏四行までに、345番歌、即ち、世間をあくたにくゆるかやり火の思ひむせひて過る比かな

を書写し、次行に於て、

なてしこをよめる 同 323

撫子の花みるほと(ママ)の心にてみたれみ国をねかほましかは 同 323

と転じて、三十五丁表322歌を継いでいる。そして更に三十七丁表九行までに329番歌、即ち、

たつの市うるまの清水冷しさにけふはかひある心ちこそすれ

を書写しており、そして次行には、

左京大夫つねたゝの家にてかやり火をよめる 同 346

山賤のかせいとひけるすくも火に心をさへもそへてやるかな 同 346

と又して転じ、三十六丁裏四行目の345番歌を承けているのである。以下は本集一般の歌順を追い書写されている。

神宮文庫A本との異同を見るために、以下に簡略に歌番号を以て誌すと、本書は、

322○歌・330○詞書く345△歌・323△詞書く329△歌・346△詞書・歌く、

それに対し、神宮文庫A本は、

322○歌・330○詞書く338△詞書・323△詞書く329△歌・338△歌く、

となっている。つまるところ傍簽○符と△符との間の相違にすぎず、323詞書以下を承ける処を異にするにとどまり、その間の三葉を各々錯序するによって惹起されたものであり、その基根は同じくするのである。当然、本書の依拠本の誤綴が想起される。その点よりすれば、本書は、厳密には神宮文庫A本からの直接の転写本とはいえないが、しかし、もつとも単に右記の物理的理由のみにて説明しがたい書写形態は両本に所見するところではあるが。

(四)次に、両本に見出される本文の異同に於ては、神祇867番歌の詞書に、

田上に侍りけるころかみのさとく云ける所にゆわかつて人のむかへけ
れはまかりけるに鳥井のありけ(神A)

しるへのものゝおそろしけれは(下略)

とあり、傍記の本文を本書は誤脱している。「け」文字よりの目移りであろう。この一箇処をのぞけば、他は一・二字の誤写・誤脱を見出すにすぎない。参考までに掲出することにする。

55第二句色を(神A)は闇に、97第三句おいた(神A)いてく、252初句さしも千などかくなそ(神A)本、上記傍記ニ加へ、「いかにイ」ト校記ス、327

詞書前斎宮にて歌よませけるれ(神A)に、418詞書すすきの(神A)・風に、504詞書そるむれてるナシ(神A)たるを事を、537第五句空も知らんけ(神A)、

552第四句よをうみかきてに(神A)、851第三句行もあかては(神A)、962第四句みしゆ(神A)・めのまの、1001詞書遇愚(神A)不逢恋、1225詞書寄馬と(神A)・恋と

云る事を、

など瞥見するにすぎず、傍記する神宮文庫A本との相違の過半は本書の錯誤と認められるが、転写本としては寧ろ甚だすくなきというべきであらう。

その他には、纒か神宮文庫A本に見ぬ本書筆写者の傍註、「本ノ」又「:カ」のごときを数例註所見するにとどまり、本書は第二類本(一)系をなす伝本の忠実な転写本である。

註 292第五句ふか緑本ノなり、752詞書しほ湯あはにまかりて、844第五句声はきこゆ也、882第五句みは行すゑ、1214第四句いもまとはけ本マ、る、カ1219第三句すむ庵竜カも、等を散見する。いずれも神宮文庫A本の誤謬を訂すものである。

国立国会図書館蔵 「江戸前期」写 存自卷一至卷八

袋綴、二冊。縹色毘沙門格子牡丹唐草空押表紙、竪二十七・二纏、横二十纏。料紙、楮紙。字面高サ約二十一纏。每半葉十行に和歌一行書き、詞書一字下げに書写する。本文墨付、上冊八十三丁、下冊七十一丁。

題簽、斐紙白地短冊を左肩に貼付し、「散木弃歌集 上(下)」と墨書する。

内題、「散木弃詞集第一(一八) 春部(恋部下)」と記すが、冬部のみ「冬哥」と表記している。又、第五・七八の三巻は「詞」を「歌」に作る。

部立表記は第一類本系、又前掲神宮文庫A本と同じくし、上冊四卷、四季部、下冊四卷、第五「祝部・別離・旅宿」、第六「悲歎部・神祇・釈教」、第七・八「恋部〔上〕下」と誌す。但し恋部〔上〕は「上」字を脱している。本書にも奥書は見えぬが、八巻本として相伝した一本であらう。

印記は各冊の巻尾に、「尚舎源忠房」の重郭長方形藍印と「文庫」重郭方円朱印を列捺している。装訂も又島原松

平文庫旧蔵書と同じくするが、蔵書中では比較的早期の書写本と推測される。

本書と恐らく祖本―或は依拠本とみてもよいか―を同じくする伝存本に、次掲の国立公文書館内閣文庫蔵林羅山旧蔵本がある。

神宮文庫A本解題で述べたごとく、この第二類本系の中でも、本書忠房本・林羅山旧蔵本・葉山信果本の両三本は一系統を形成する。特に本書・羅山旧蔵本は同一伝本上からの転写本と想定されるので、その本文上の性格に就いては一括し後述することにする。又、信果本には朱筆校合補訂、あるいは村上忠順の手による類従本・野口本の校合等を全巻に施しているので、別項を設け解題することにする。

国立公文書館内閣文庫蔵〔江戸前期〕写 林羅山旧蔵本 存自卷一至卷八

袋綴、二冊。栗皮表紙、竪二十九・二纏、横二十・六纏。料紙、楮紙。字面高サ約二十二纏。每半葉十行に和歌一行書き、詞書略二字下げに書写する。本文墨付、上冊八十三丁、下冊七十三丁。因みに本書の本文丁数は前掲忠房旧蔵本と略一致し、特に上冊に於ては、丁数又各葉の書写行数も殆んど同じくする。下冊に於て書写状況は稍々崩れ、本書が二葉ほどを増加する結果となっているが、両書の書写形態からも依拠本を同じくするかとも推測されるのである。

外題、題簽は既に剥落したのであろう、表紙左肩に「散木弃歌集」と別筆朱書している。

内題、「散木弃詞集第一（〜八）春部（〜恋部下）」と記し、忠房旧蔵本と同じくし、冬部のみ「冬哥」と表記しているが、「詞」字を「歌」に作るのは、本書では第五・六・七の三卷である。

部立表記も前者と全く一致する。即ち、上冊四卷、四季部、下冊四卷、第五「祝部・別離・旅宿」、第六「悲歎部・神祇・釈教」、第七・八「恋部上(下)」と誌す。但し、「旅宿」小題左に、「羈旅部」と朱筆傍記している。この朱傍記は後述のごとく本書墨筆本文に施されたる別本校合であり、本書本来の本文ではない。本書には上冊冒頭部に一ヶ処錯綴する。即ち、一〜二丁に1〜12番歌、三丁表裏に28番詞書〜35番歌、四丁表裏に20番詞書後半部〜27番歌、五丁表裏に13番歌〜20番詞書前半部、となり第六丁以下は正しく綴っている。従って、現在の誤綴は、一・二・五・四・三丁の順に訂すべきである。

印記は、「江雲涓樹」重郭長方形朱印、「林氏／蔵書」方形朱印、「浅草文庫」重郭長方形朱印等が両冊巻首に捺されている。前記兩顆より林家旧蔵書であることが知られる。その「江雲涓樹」印は羅山蔵書印である。増補
改訂内閣文庫蔵書印譜」解説には、

この印は羅山が使用したことは勿論であるが、明暦三年正月羅山病没後まもなく、林鷺峯がその遺書を旧知・門弟らに領布・寄贈するとき、旧蔵のしるしとしてこの印を押したことや、また没後十二年目にあたる寛文八年夏、曝書の折に、鷺峯が先考羅山から伝えられた蔵書にこの印を押したことを、その日記「国史館日録」などにしている。どちらも今日では当文庫にあわせて保存されているが、押印の先後を弁ずることはできない。しかし、いづれにしても、この印のあるものが羅山手沢本であることは確実である。この事実は、蔵書印が本人の没後、後人によって用いられた明確な一例として最も早いものであろう。

と記されているところから羅山旧蔵書のひとつと想定されるのである。書写年紀は明示しがたいが、江戸前期頃と推測され、羅山晩年の手沢本でもあろうか。前掲忠房旧蔵本に比し稍々遡る時期が予想されるが、猶その前後は明確

にしがたく、略同年代の書写本とするのはかはない。

まず、以下に両本併びに前掲神宮文庫A本・志香須賀A本との共有する欠落本文―書陵部A本に対する―に就いて略示することにする。簡略を期し、神宮文庫A本の一覽表に於て使用した番号をゴチック体にて挙げ、() 圏内に念のため本集歌番号を記すことにする。神宮文庫本解題を参照されたい。脚注なき場合は上記四本が共通する欠落本文たることを意味するものである。林羅山旧蔵本にはまゝ朱補する処が散見する。当該朱補部分は元来底本には存せざるものと認められ、略同時期に於ける別本校合本文と推測されるので「朱補」と注記し後掲一覽する。

- (一)―1 (112詞書)、同2 (187左注)―忠・江本墨細補、同3 (188左注)―忠・江本墨細補、同5 (236歌下句)―江本朱補、同8 (463詞書)、同10 (538詞書)―江本朱補、同11 (658作者)、同14 (746作者)、同15 (769詞書)―江本朱補、同16 (810詞書)―江本朱補、同19 (892歌)―江本朱補、同21 (936歌)―江本朱補、同22 (958詞書・歌)―江本朱補、同23 (1008作者)、同24 (1039左注)―江本朱補、同26 (1136歌)―江本朱補、同27 (1160詞書)、

以上、四本間相互に於て共通する顯著なる欠落本文は略十七ヶ処を数え、神宮文庫A本系の欠落本文二十八ヶ処中の過半を占めるのである。第二類本系の類同近似を提示するものにほかならないのである。

林羅山旧蔵本は右記脚注したごとく朱補本文を散見するので以下に掲出して一応の弁別の拠りどころとしたい。

同5 もろとも以下朱補に今そなくなる時鳥「八声以下朱補の鳥はおのか妻かは」 236歌

同10 「秋以下朱補の山の月をみるといへる事をよめる」 538詞書

同15 ふちとと云所にとまらんとしけるに「おひ風以下朱補ふきなとす日もたかしとてよらてすきければよめる」 769詞書

同 16 れいならぬ人の舟にあるかくるしかると聞て「以下朱補そひ船にのせうつすを聞て」 810 詞書

同 19 「人はいさ光のすちをしるそともおなし仏やしらはしるらむ」 892 歌

同 21 「以下朱補そのほとゝ思ひかたきはよものうみにそこるもしらぬこゝろ成けり」 936 歌

同 22 「以下朱補諸の花くさくさにさきみたるといへる事をよめる

そこはくのはなのひもとく庭の面におしのけたるははちすなりけり」 958 詞書・歌

同 24 「以下朱補みつきといふはつくしのふのかとて也」 1039 左注

同 26 「あさましやこは何ことのさまそとよこひせよとてもむまれさりけん」 1136 歌

林羅山旧蔵本の以上朱補本文を別すれば、松平忠房旧蔵本と上記十七ヶ処は同じくし、同時に神宮文庫 A 本系とも共有する欠落本文であり、第二類本系のひとつの特徴ともなるのである。

次に、上記四本に所見する欠落本文に於ける神宮文庫 A 本系と松平忠房旧蔵本・林羅山旧蔵本との異同を誌すと、

(イ) 神宮文庫 A 本系に欠脱し忠房・羅山旧蔵本に存するもの、(ロ) 前者に存し後者に欠脱するものと区分される。

まず、(イ)に就き前述の方法により列記すると、

(一) ー 4 (194 詞書・歌部分) ー 忠・江本存、同 6 (312 詞書部分) ー 忠・江本存、同 7 (372 歌) ー 忠・江本存、同 9 (504 詞書部分) ー 忠・江本存、同 12 (667 歌) ー 忠・江本存、同 17 (844 歌部分) ー 忠・江本存、同 18 (871 歌・872 詞書) ー 忠・江本存、同 20

(918 歌・919 詞書) ー 忠・江本存、同 25 (1060 詞書) ー 忠・江本存、同 28 (1221 詞書・歌) ー 忠・江本存

の略十ヶ処が顕著な部分として散見されるのである。

又、一方(ロ)に就いては、忠房・羅山旧蔵両本の欠落本文は、例に倣い書陵部 A 本を以て揭示することにすると、

- 1 家はけに花のみふねと見えつるは君かちとせをつめる也けり 春部102歌 忠本ナシ、江・信本朱補、神A・志A存
- 2 返
人はいさわればよひよりあふさかの夕つけとりのねをのみそまつ 夏部259詞書・歌 忠・江本ナシ、神A・志A・
信本存
- 3 田上の南の山にて椎ひろひけるついでに もみちを折てきたりけるをみてよめる 秋部558詞書 忠本傍記本文(書
陵部A本、以下同)ナシ、江本朱補、神A・志A・信本存
- 4 かへし 加賀守
よろこひをくはへにいそく旅なれと心は君にとめてそゆく 別離 741詞書・作者・歌、 忠・江本ナシ、信本
存、神A・志A本詞書存・作者ナシ
- 5 涙をは硯の水にせきれつゝむねをやくともかくみのりかな 悲歎部783歌 忠本ナシ、江本朱補、神A・志A本・信本存
- 6 ゆりはな(書A本欠落部) 神祇861作者 忠本ナシ、江本朱補、神A・志A・信本存
- 7 思ふ事みつのをしへをとゝのへてはすのはつ花みるよしもかな
そのはちすには戒をたもちたる人なん生るといふ事を 釈教916歌917詞書 忠・江本ナシ、神A・志A・信本存
- 8 さりともとなほかことにもたのむ哉つもれるつみもた くひなければ(朱) 釈教930歌 忠本傍記本文ナシ、江本朱補、神
A・志A・信本存
- 9 あさからす思へはこそはほめかせほりかねの井のつゝましき身を
大式長実の八条家にて恋の心を 恋部下1202歌・1203詞書 忠本ナシ、江本朱補、神A・志A・信本存

10 くれなゐの袖にはつれしまみ(マ)より(ナ)もなかれつゝりのわゝけをそ思ふ

修理大夫顯季の六条にて恋不知程といへる事をよめる 恋部下 1227 歌・1228 詞書 忠・江ナシ、信本朱補、神A・志

A本存

11 山かはのいくひにかゝるしら波のゆく衛もしらぬ恋をするかな 恋部下 1238 歌 忠・江本ナシ、神A・志A・信本存
と、以上十一ヶ処に亘る同様な著しい異同を見出すのである。

第二類本系、神宮文庫A本・志香須賀A本の両本と松平忠房旧蔵本・林羅山旧蔵本とは、欠落本文中には、記述してきたごとく、確かに他系類とは別する類同共有する明著な相関々係を持しながらに、一方に於ては、上記(イ)・(ロ)に見るごとく較著なる異同が歴然と存し、同類中に於ても自ら両系統を構成していることは否まれない。しかしながら、第一類本系、又他類本系とは前述し又後述するごとく本文自体に於ける異質的側面より觀れば上記の異同のごときは系類上の問題としては黙許することも過当な見解ではないかと思われるのである。揭示した欠落本文の過半は主に伝写経過上に於ける誤脱と推測される本文でもあるからである。論述の紛乱を避け個々に亘る言及は暫く措くが、第二類本系上記四本―葉山信果本以下三本をも含むが―は恐らく元その祖本を同じくし、第一類本系に繼いで派生した系類として想定されるのである。

次に、第二類本系中、一系統を構成する松平忠房旧蔵本と林羅山旧蔵本とは上述してきたごとく同一本より派生、又は転写されたものと想定され、林羅山旧蔵本に所見する朱筆補校本文―朱補は本行中に書写されることなく行間傍記である―を除けば全く同じくするのである。但し、別註註するごとく一・二字の異同、漢字仮名の相違、相互の書写誤謬等は散見するが。因みに羅山本の朱補校箇処は顕著な上掲部分を除くも約二百ヶ処に及ぶのであるが、偶然の符

合以外には忠房本の本文に傍記又移写されてはいない。即ち、羅山本が同一系伝本に抛り書写の後、他の一本により朱補、補校したものであったと推測されるのである。

又、同本が同一伝本よりの派生であることは、次に記述する、異文・排列・墨書入れ等と共に細微な点で一致することからも云得るのである。その一・二を記すと、まず、集付に於ては全くといってよく同一に移写されているのは云うまでもないが、歌句本文中に於ける欠字の空格箇処をも同一表記するという書写態度を持しているのである。数例を次に掲出すると、

296第二句「なつ□□かりし」(忠本)―「なつかし敷かりし」(江本、以下同省略)、702第四句「いく世の□□」(忠)―「万(朱補)世の□□」、829第四句「□□せきあへぬ」(忠)―「□□せきあへぬ」たに(朱補)、881第二句「くまなきに□□□□」(忠)―「くまなきに□□□□」光に(朱補)、890第五句「物そ□□□□□□」―「物そ□□□□□□」に有ける(朱補)、930第五句「たゝく□□□□□□」(忠)―「たゝく□□□□□□」は(朱補)、1046第二句「滝と□□いかに」(忠)―「滝と□□いかに」(江)

のごとくであり、その依拠本の形態を共に模したものと推量されるのである。

次に、両本の異文明著なるを観ることにする。―前掲神宮文庫A本の一覧番号をゴチック体にて略記するので前表を併せ参照されたい。重複し掲示するが、掲出本文は忠房本、右傍校記は書陵部A本である。但し、漢字・仮名の異同等は誌さない。

- 1 玉葉(ナシ、書A)しつくのたもとには(書A)七夕のかへる朝の雫にはあまの川なみ立やそふらん (二)―2 (388歌)―神A・志A・忠・江本同、以下「四本同」ト略記
- 2 丹波前司重房季(書A)の家にて女郎花をよめる人く秋の花をよみけるに(書A) 同3 (403詞書) 四本同
- 3 九月十三夜法性寺関白殿下にてよめる以上五字ナシ(書A) (536詞書) 忠・江本同、因みに神A・志A本ハ「九月十三夜殿下にて法性寺関

4 皇后宮の弘徽殿におはしましける比細殿にて人に物申けるに女房のうへへのほるとて道見くるしたはしてと(書A)とてしはしたて
 ・と女官(房見消チ)の申ければたちて殿上のかたへまかりけるを後にまいりやするとまぢけるに見えさりければか
 ・れより送けるをくりて侍ける(書A) 同5(1230詞書) 忠・江本同、神A・志A本略同

の四例が両本の特徴的異文である。脚注した如く神宮文庫A本系二本の前掲例示五例中の三例を略同じくし、この点に於ても両本は神宮文庫A本系に隣接する伝写本であることが判明する。

次いで、両本の歌序排列を誌すと、第一類本系、又神宮文庫A本系に所見した夏部錯簡を除けば、書陵部A本排列と異なる三例は第一類本系、又神宮文庫A本系と全く同一である。即ち、

- (一)夏部 223・225・224・228・229・226・227・230、(二)同部 263・265・264・266、(三)积教 891・890

である。両本は繰返すまでもなく、上述の主要特徴の例示により、第二類本系中、一系統を構成するものであるといえよう。

両本の概要は、略如上の記述にて竭るのであるが、第一類本系と共に第二類本系中、神宮文庫A本系二本と此両本―或は葉山信果本を含むも可―とは、八巻本系に於て、その中核を占め、本集伝存本のなかにあつては、その欠脱甚しき伝存諸相をとどめながらに、相互に依倚し相補足しながらに観望すれば、それは単一な誤伝本文として処理しえな
 い伝本群として重視されるであろう。寧ろ現存諸本の包摂する混淆的要因を解く鍵軸ともなるべき基底をも示唆する
 伝存本文を一面に貽すものとして最も留意されるのである。敢て贅言すれば本集撰集の経過をも暗示するものではな
 かるうかと。その意味では両本に所見する所謂欠落本文に関する再度の精査と検証が要請されるべきであろう。

備考

聊、繁縷にわたる言及となるが、両本の書入れ、又校勘・補訂について誌すことにしたい。林羅山旧蔵本朱校・補本文に関しては既述したので墨跡部分につき略記する。

第一類本系又第二類本神宮文庫A本系に所見された万葉引歌三例にみる稍々特異な書写形態の類似性は既述した如くであるが、忠房・羅山両旧蔵本にはそれらは単に本歌書入註として行間に付記されるにすぎなくなっている。が、その源は前記諸本に発するものであつたらう。神宮文庫A本解題の註一―三に忠房本を掲示したので、此処では念のため羅山本本文を誌しておく。即ち、

1 万云引哥石見ノ海ウツタノ山ノ木ノマヨリ我フル袖ライモミツランカ 春部70・71歌行間

2 万云アラタマノストカ竹カキアメニヨリモイモイモシミヘスハワレコイメヤハ 夏部354詞書・歌行間

3 万云タマタレノコスノ寸鶏舌ニノリカヨヒキネタチ
チネノハ、カトテヤトカセトマウサン 恋部下1175詞書脚欄

と附註している。書写形態の推移はあれ第一・二類本系ともに共通するものである。

次に、墨筆校合は、「イ」本と註記を誌す校記と無註記の墨校が主であり、「イ」本校合箇処は両本多少の異同は散見するが、恐らく親本を同じくするところから移写の際に於て、相互の見落しにより惹起された相違であろうかと推測される。両本共に凡そ四・五十ヶ処に及ぶ。そのいくつかを例示すると―本文は忠本を掲出す、江本との異同は左傍に校記するも漢字・仮名の相違は省略する―

39 下句「消消ぬややかて春のはつ花イるそ春のしるしなりける」―忠・江本同、156第四・五句「つのけたイしか岡のけたイにあせみ花咲イさく也」―両本同、250

詞書「……連夜待イ子規」―両本同、314第五句「夜は更にけりイぬらし」―両本同、※374第三・四句「暮あるをあつさしめらひイもありあへれしめし」
郭公(江)

ひ」—忠本・「暮るをイもありあへれしめしひ」—江本、490第五句「すみたちイのほる哉」—両本同、539詞書「……柳の木にそ
 まむはイぎと云物を書かけイたるか……」—両本同、617詞書「野亭徑イ寒草」—両本同、同第五句「霜おきてけりイをきにけり」—両本同、623
 ※第五句「立のほるイなをる哉」—忠本（江本イ校ナシ）、※632第五句「ぬれみてこそゆかめイすはやまし」—忠（江本イ校ナシ）、647第四句「石間尋
 て」—両本同、656初句「雪ふる雪にイふれば」—両本同、同第四句「梢のイそ冬は」—両本同、667第三・四句「神しもとゆふかつらぎイなひのみ室の山に」
 —両本同、732第五句「人にイは別る」—忠本・「人にイは別る」—江本、※1131第五句「あさ衣かイとは」—忠本・「あさ衣かハイとは」
 —江本、1190第五句「あよイさをそする」—両本同、1217第五句「なくきん故イて暮しつ」—両本同、1223第五句「たとイまらさりけ
 り」—両本同

等々である。偶目するままに揭示したのであるが※印のごとく両本相異する処もあるが概ねは同じくする。しかし
 ながら、この依拠する「イ」本は現存本中には確認しがたく、又各集に載録する本文に拠るかとも推測されるところ
 もあり、伝写経過の途次に於ける複合的結果でもあらうかと想像されるのである。

その他、墨校・訂・補等の傍記は忠房本に約三十余ヶ処、羅山本に約六十ヶ処ほどが散見される。両本のこれら墨
 校・補訂は共通する処極めて纒かにして、その相互関係は、過半が羅山本の墨校補が忠房本に於ける本行となってい
 るのであるが、上記数値からは忠房本から羅山本文への関聯も考えられ、又ある一本から羅山本文への関聯
 も想定されて、特定一本から他本への本行化、即ち羅山本校・補・訂から忠房本文文化という単純な転写関係に図式
 化することは困難である。寧ろ、この補訂傍記の殆んどは両本筆写者に於ける書写後の本文校訂作業の跡とみるのが
 妥当であらう。従って前記「イ」本のそれとは別して対処すべき性質のものであらうかと推測される。

註 以下、参考までに、両本に見出される本文異同の概ねを揭示しておく。但し、羅山本にみる朱補訂は除外し、両本に所見する墨補訂は各訂正本文に従うこととする。上部は忠房本文・下部は羅山本文である。

24第二句雪ふれは(忠本、以下略)―雪ふれと(江本、以下略)、38詞書……といふを聞てなとかよまさらん……―といふを聞てなとかまさらん……、55第二句色をはやみに―色をはやみに、120初句おのれかつ―をのれかす、149第五句すくひ成けり―すくひ成けり、151第五句花のよそめを―花のよそめを、152詞書百首哥の中に……―百首哥中に……、155詞書百首哥の中に……―百首哥中に……、162第五句たねもかしける―たねもかしける、172詞書……きこしめしてたちければ……―きこしめしたりければ……、181第二句くる事たらし―くることたえし、192第五句春も暮ぬる―春も暮ぬる、197第二句みる空となき―みる空そなき、210初句世にふれは―世にふれは、256第四句しのひねすると―しのひねすると、300詞書おなし心を……―同心を……、320初句あつさるの―あつさるの、322初句往古は―いにしへは、328第二句あたりもしみに―あたりもしみや、345詞書百首哥中に……―百首哥の中に……、350第五句はかられぬらん―はかられぬらん、352第五句折もこそあれ―軒もこそあれ、365第二句はすのたち葉に―すのたち葉に、381……七夕の心を……―七夕の心をよめる、389初句七夕の―七夕は、394初句朝夕に―朝夕に、同第四句しかひて君か―しかひて君か、396第三・四・五句たひにして結び袂やしほれしぬらん―玉にして結ふ袂やしほれしぬらん、398第二句かたちのおの―かたちののをの、403第二句荻たちかへす―荻たちかくせ、408第四・五句さまにはをいぬすり衣きつ―さまにはをいぬすり衣きて、413詞書……大原の房にさかりて荻女郎花……―大原の房にさかりて荻女郎花……、421第二句まかきにさほす―籬にさほす、425第五句露しめりけり―露しけりけり、436百首哥の中に……―百首哥中に……、447詞書田上にて……―田上へにて……、457……原上鹿といへるといへる事を……―原上鹿といへる事を……、467第四句長閑に過る―長閑に過る、468第二句駒の毛つきを―こまの毛つきを、495初句いとかしく―いとくしく、499第五句曇もなき哉―くまもなき哉、513初句曇もなき―くまもなき、524第五句照増らん―照まさる也、537詞書同心を……―同心を……、541初句ちりこにて―ちりこにて、548第二句色をも霜の―霜をは霜の、580第五句明くらす哉―有くらす哉、610第二句みかりもゆかし―みかりもゆかし、同第五句雪散を

ひて―雪散をひて、623第四・五句うらやましくも立のほろイなをる哉―うらやま(朱)しくもたちなをる哉、626第五句人をもてはやす哉―人をも
てはやす哉、627詞書……臨時祭陪従したり……―臨時祭の陪従したり……、632第五句ぬれみてこそゆかめイすはやまし―ぬれすはやまし、641第二
句くちあけたれは―くちあけつ(朱)はてたれは、643第三句回鳥あさりする―あさりする、644第二句かつく岩間根イの―かつく岩まの、647詞書真野池水
―真野池水といへる心を、649第三句さみえ敷く―さえく―て、674初句雪をおもみ―雪をもみお(朱)、690詞書……水不契久と……―
石(朱)水不契久と……、704詞書又同心を―又同心を、733第五句今日や越らん―けふやみゆらん、759第五句かけちをそゆく―かき
ち(朱)りをそゆく、773詞書……なかもあかしければ……―なかもあるしければ……、777初句ことよめるイもとめつる―もとめつる、780詞書……有か
たかりぬへきさまに……―ありかたかりぬへきやうに、同詞書……覚えける事……―おほえける事を……、800詞書……みなと
まりければ……―みなとまりにければ……、811第五句こちもふかなん―こちもふりかなん、824第五句みえん物かは―みえん物と
は、832詞書ひきかへのうしを……―ひきかへのう敷こしを……、860詞書……申を聞てとらせんと……―申を聞てとらせんとら(朱)……、
873第三句我なれは―命法か(朱)なれは、897第三句かよへるは―かほよへイれるは、909詞書おほかたふさねて……―おほかたふさねて、911第五
句思ひますらん―思ひしるらん、918詞書……といへる事を……―といへる事をよめる、925第五句瀬に流る覧―せに成ぬらん、
953詞書……おもむきあしき事なし―おもむきにあしき事なし、965第五句かへてますかな―かへてますかな、980詞書此身はいか
なるかたへかほはさりて……―此身はいかなるかたへかをはれ(朱)さりて……、993第五句たのもしみ思ふ―このもしみ思、恋部□―
恋部上、1002初句むやゐする―むやゐする、1037詞書とをにみちを……―とをきみちを……、1041第二句あなはつらはし―あなわつ
らはし、1047第四句とろきをらん―とろきおちむ、1048詞書……むかしよりいひそめたれは……―むかしより御い(朱)ひそめたれは
……、1051……殿上人……―殿上の人……、1053詞書十月はかりに人にかり……―十月斗に人かり……、1065第四句恨てそふる―
うらみてもふるそ敷、1077詞書智たりける人の……―しりたりける人の……、1080第三句やまひこを―やまひこもをか、1131第五句あさ衣
とは―あかさ衣とは、1135詞書……人々十首哥……―人々十首の哥……、1142詞書思夫―思夫思朱、1156第五句水こふること―水こふかこ
と、1166第二・三句なこそその関はわかこふる―名こそその関はもわか(朱)かるこふる、1196詞書同し殿にて……―同殿にて……、1218第五句うれ

しかりけり―ゆかしかりけり、1225第二句をくろにたてる―をくろわたてる、
以上、両本の本文上異同の大概である。その相違は極めて纒かなる一・二語にわたるものであり、書写上に屢々惹起される誤
写・誤脱等の錯認による相互の結果ともいえるものである。イ本移写をまゝ羅山本に於て誤脱するのも同様な事情によるの
であらう。しかし厳密に判断するとすれば、上掲の異同と共に漢字・仮名の差異、仮名遣いの相違等々、その依拠本は同一本
よりの転写とはいいがたい。が又一方、両本は親本の、その間に猶一本の経過が存するとしても、きわめて近き同一伝本とし
て相互の錯誤を相補足するものである。

刈谷市立図書館蔵 天保十二年葉山信果写

―村上忠順標註草稿自筆書入本 存自卷一至卷十

袋綴、四冊。淡茶色刷毛引表紙、竪二十六・七糎、横十八・七糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十一・一糎。和歌一
行書き、詞書二字下げ、標註眉欄字面高サ約三・八糎。每半葉は、第一〜八卷は十行、第九・十卷は十二行に書写し
ている。後述するごとく依拠本を二種とする取合本である。本文墨付一柱三丁付、忠順追記一、第一冊「一（〜四十三
了）」、第二冊「一（〜三十八了）」、第三冊「一（〜六十六了）」、第四冊「一（〜四十五了）」。

外題、「散木棄歌集一（〜四）」と表紙左肩に打付書きしている。忠順筆敷。

内題、「散木^{奇蹟(忠順校)}弃詞集第一（〜十） 春部（〜雑之部）」を基本とするが、第九・十卷は「散木和歌集」とし、第二卷は「散

木奇詞集」と記す。部立も又卷四を前掲二本―松平忠房旧蔵本・林羅山旧蔵本―と同じく「冬哥」、卷九・十両卷を「雑之
部」と誌すなど稍々混乱が所見する。特に「雑之部」は本書独自の表記である。各冊編次と併せて一括別註するので

参照されたい。^{註一}

各冊の識語は次の如くである。

第一冊

以古鈔本稱一本者是也及塙氏群書類従本稱塙本者是也校勘了

天保二年 仲秋 况齋岡本保孝

同十二年 晩春 篤齋葉山信果「43才（以上朱筆）」

第二冊

天保十二年 晩春校合了 信果「38ウ（同朱筆稍々小字）」

第三冊

以古本塙本校

此本欠卷九以下今以古本補之附于後

此原本及古本並掖齋狩谷先生所蔵

天保二年仲秋 岡本保孝

天保十二年晩春 葉山信果「66ウ（同朱筆）」

第四冊

以塙本校了

塙本卷末云右散木奇詞集以織部正乘尹本校合了「45ウ（同朱筆）」

右散木弃歌集全部十卷四冊俊頼朝臣家集也或称散木寄歌／或云散木歌奇並非也此古鈔本題散木弃歌甚佳也弃歌与散木相／照且中世有須天宇多之辭亦可以証矣僧契冲嘗云宜作弃歌／達人之慧眼可服也此古鈔本掖齋狩谷先生帳中之物今影照／新写以藏于家惜乎此本欠卷九以下雜部故以一古鈔本繕写／補入此藍本亦係先生之藏嗚呼先生德崇学富儲書亦称焉保／孝生平浴於先生之德沢有年於茲子孫其勿忘諸天保二年八／月廿四日夜况齋岡本保孝識於歲計草堂
天保十二年晚春写之 篤齋葉山信果 46才（同朱筆）

如上、各冊朱筆識語は、本書の書写者、篤齋葉山信果の手跡である。

右識語のほか、第四冊四十五丁裏塙本奥書に次いで、村上忠順が、

嘉永四年辛亥四月十二日尾張国琵琶島野口道直本校合了道直通称青物問屋市兵衛此書入以監

と、謹細墨書している。本書購得の後、本集標註の第一次稿たるべく諸註書込みに併せて、藍色を以って校合を全卷に施している。忠順の校合は道直本以外にも葉山信果本に看過された塙本本文も再度校記され、更に諸集に載録する俊頼歌をも重ねて校勘墨記しているのであるが、そのことは、標註稿本の成立の処にて触れることにする。

偕、信果書写本に立返って、上掲識語を見るに、まず本書「散木弃詞集」十卷四冊の本文は、篤齋葉山信果が、况齋岡本保孝書写本に拠り、天保十二年晚春に転写せるものである。而して、この保孝本は、天保二年八月、狩谷掖齋本―所持本歟、帳中之物と記す―を影照書写し、該本の闕卷部、卷九・十の両卷を同じく掖齋所蔵古鈔一本を以って繕写補綴したものであるというのである。一種の取合せ本である。且つ、第一・三・四各冊末の識語によれば、「以古鈔本称一本者是也及塙氏群書類称塙本者是也従本校勘了」、「以古本塙本校」、「以塙本校了／塙本卷末云以下略」のごとく、古鈔一本―掖齋所蔵本歟―と群書類従本を以って本文校合を施している。本書の中には全卷に亘り、「塙一本」、「一本」、「塙」と略

記し、その校異を朱書しているのである。従つて右掲識語の文脈よりすれば、就中、第三冊の「此本欠卷九以下今以古本補之云々」の識語との関係より捉れば、古鈔本即一本（第一冊識語）であるところから第一・二・三冊、即ち自卷一至卷八の他卷全般に亘る校勘も一見岡本保孝の手校にかかるものとして把握されるのである。即ち、第四冊末に天保二年岡本保孝の誌す奥書により、上述の如く、卷一〜八を椽齋所持一本（原本―第三冊識語）と卷九・十両巻を同所持古鈔本にて合せ完本とすべく影照繕写し、その後、同古鈔本と塙本をもつて朱校勘記を附した、と。その故に、影照繕写本の識語の前に校合本と略省を併せ追記したのではなからうかと。但し、稍々疑問となるのは、第二冊末の「天保十二年 晩春校合了 信果」とある細字の朱書奥書である。この「校合」は果して何を意味するのであろうか。当該箇処には以外何も付記するところがないので猶明瞭にしがたいが、この「校合」の意が、「一本」又は「塙」本を示唆するものとすれば、前述の推論は一転する。朱書校勘部分はすべて葉山信果のそれである。夙に築瀬一雄氏は『散木弃歌集標註』の成立」につき論及せられ、その中に於て、

信果は保孝が第九卷以下の補入に使用した椽齋所蔵の別本及び群書類従本を以て、全巻を校合した。以上は天保十二年のことである。

と論断せられた。確かに御推断のごときが中正にして妥当な見解であろう、と当初すべて諒承したのであったが、其後、篤齋葉山信果の伝記不審なるままに、信果の書写年紀天保十二年―椽齋歿年天保六年―の期に、椽齋所持本―右記の別本―を借覧し得ることが可能であり得たか否か。又此処まで言及することを避けたが、朱校勘記の中には、「一本」、「塙」本のほかに、「原本云々」の朱校が散見する。この「原本」は椽齋所蔵の卷一〜八の一本を指すものと推定される―もつとも、後述のごとく卷九・十両巻に校記する「原本」とは異なる―。然れば、信果は、椽齋所持一本を借覧し

校合したことになるのである。更に信果と保孝との子弟関係も不明なるままに、掖斎との結びつきにいたっては想定すべくもないのであれば、掖斎所蔵古鈔二本は如何なる經由により繙閱の機を得たのであろうか。本書に見る両三本の校勘は細心詳密の態勢を持っていることから、それなりの有識者とみるのほかはないことなど併せ暗推するとすれば、多少の齟齬は存するとしても、本書の朱書校勘を施せしは岡本保孝その人と想定し、信果―保孝―掖斎の、就中信果―掖斎の人的関係に留意しながら、右掲識語の謂う本意を辿るべく、後考の機を俟つことにしたい。

いずれにせよ、この信果手写本は、掖斎所持の二本に依拠したところの取合せ本であり、その朱補部分を排除すれば、所謂両古鈔本の原態を遡及し得ることとなるのである。従って、此処にその顕著なる朱補入本文の概略を掲出することにする。以下掲出本文中、『』圈内が上記朱補入箇処である。猶その本文中には本書手沢後の村上忠順の校合を追記している。後述する同標註本本文解題に係るところでもあれば併せ揭示する。その揭示本文に傍記する(墨)・(藍)筆の校勘記は忠順の追訂である。墨筆のそれは俊頼歌所載諸集を主とするものであるが、藍筆は「ノ口」・「ノ口本」と略記され、前述の野口道直本に拠る校合である。私に補註追記したのは、前掲諸本との係りを示すと同時に、原文の改訂後に於ける同標註本文への移行の一端を点示するがためにほかならない。又、時に必要に応じ、私註を加えた処もある。

先ず、本文の補入状況を概観すると、

1 故源中納言おまへにひてそのきしなからつかうまつれとせめられければつかうまつれり

夫木夫木雜十五けにかさは(墨) をよそひても夫木(墨) 『いへはけに花のみふねとみえつるは君か千とせをつめるなりけり』ノ口本アリ(藍) 春部102 忠本欠、江本朱補。『』圈朱筆細補

す。三冊本(標註第二次稿本)・板本「標註」共に「一本无」と歌頭付記す。

2 三月晦日時房かもとに……………(中略)……………送りて侍ける

立かへる春おもふたに有物を君をさへけふ待くらしつる 同部 187

返し

『ハシカキにさとをはかれすとかけり
おくにあまのをふねともかけり』(朱補細記)

暮て行春を思ふもこぬ人をまつにもまさるゆかぬ心は 同188 右記の如く187・188歌の左注を並記し且つ188左注を、点にて指示し「一本ノ塙」と校記す。神A・志A本欠、忠・江本細補。三冊本・板本共に無註記なるも当該部に両左注補記す。

3 百首の哥中に卯花をよめる

卯花も神のひもろきときてけりとふさもたはにゆふかけてみゆ 夏部 198 右歌詞書に朱筆合点を付し「〇一本ノ塙」と朱書しているので、詞書本文は墨書本行としているが、或は「一本」ノ塙本による補入を意味するとも予測される。但し猶未詳。上記四本・三冊本・板本共に存。

4 暁郭公

もろともに今そなくなる時鳥 『八声の鳥はおのかつまかは』 同部 236 神A・志A・忠本欠、江本朱補。『』圈第四・五句墨書本行とするも朱圈符を付し、原本以下を傍記す。一本又は塙本に拠る校訂追補であろう。三冊本・板本共に、「下句一本无」、「下句一本脱」と付註す。

5 かへし

『家道朝臣塙一本』

春としもわかれぬ物をみやこには心をとめてこしちとをしれ 冬部 658 神A・志A・忠・江本欠。『』圈作者補入は朱本行なるも前者同様に一本又は塙本に拠る校訂であろう。三冊本・板本は無註記なるも本行本文とする。

6 かへし

『経兼塙一本』

わかるとも思わするな千はやふるかしまのおひの中はたゆへせし(墨)とも 別離746 神A・志A・忠・江本欠。『』圈作者補入は朱本行、同じく一本・塙本に拠る校訂であろう。三冊本・板本は「経兼」とする。

7 ふちとナシ一本/塙(朱)と云所にとまらんとしけるに『おい風ふきなとす日もたかしててよらてすきければよめる一本』
む(藍) イナシ

さためなき空のけしきをひ風をまつにふちとをかけてさりぬる 旅宿769 神A・志A・忠本欠、江本朱補。『』圈朱細補、一本・塙本に拠る校合であろう。三冊本・板本共に本行とし、『』圈内を「ナシイ」と付註する。

8 れいならぬ人の舟にあるかくるしかると聞て『そひ舟のせうつすをきよ一本て』

いとをしや又うきことをそひ舟にうつし心もなく成にけり 悲歎部810 神A・志A・忠本欠、江本朱補。『』圈朱細補、同様に一本又塙本に拠る補訂であろう。三冊本・板本共に『』圈内を「ナシイ」と付註する。

9 難思光仏

『人はいさ光のすちをしるそともおなし仏やしらはしるらむ一本』 釈教892 神A・志A・忠本欠、江本朱補。
ノ口本无(藍)

『』圈朱細補、一本・塙本に拠る校合であろう。三冊本に、「一本无/釈教題林闕」、板本「一本无釈教題林亦缺」と付註する。

10 思ひかたきひかりと云へる事をよめる

『そのほととおもひかたきはよもの海にそこひもしらぬ心也けり一本』 同部936 神A・志A・忠本欠、江本朱補。

『』圈朱細補は前者同様である。歌脚に又「釈教ナシ」と忠順の追記あり。三冊本に「釈教題林无/一本無」、板本に又「一本缺釈教題林亦闕」と付註する。

11 返し 『をんな一本』

なをさりにきたる人をやさよ衣かへすはかりの恋によそへん 恋部上1008 神A・志A・忠・江本欠。『』朱補本行、
は(墨)

一本又は塙本に拠る校訂であろう。三冊本・板本は共に註記なく本行本文とする。

12 本隔一本／稿(朱)
撰月恋

かきたえてみつぎになりぬこれやさは心つくしのかとてなるらん

『みつぎといふはつくしのふのかとてなり^{一本}』同部 1039 神A・志A・忠本欠、江本朱補。『』圈朱細補同前、三冊

本・板本共に註記なく本行に補入する。

13 ノ本元(藍)
『海路恋』

恋くさをさしに^{のノ(藍)}つ^{つ(墨)}める舟なれはかしもみとろし^{ち(墨)}心せよなみ^{く夫(墨)} 同部下 1160 神A・志A・忠・江本欠。『』圈朱細補、

校勘本の註記を欠くが、いづれ一本又は塙本であろう。三冊本・板本は共に註記なく本行に補入する。

14 左京大夫経忠^{の一本／稿(朱)}八条の家にて恋不依人といへることをよめる 同部下 1227

せぎもあへぬ涙にてこそわか恋のつもれるほとをしるへかりけれ 同部下 1228

△印部につき眉欄余白に

『此処哥一首と後の哥の詞書とを脱せり古本及塙本には左のことし』

と誌し、

『紅の袖にはつれしまみよりもなかれ^{夫木雜十八(墨)}つ^{か夫(墨)}りのわ^つけをそおもふ』 同部下 1227

『修理大夫顕輔^(マヌ)の六条の家にて恋不知程といへることをよめる』 同部下 1228

と朱筆細書している。忠・江本欠。三冊本・板本は共に右掲¹²²⁷歌にのみ「一本无」と付註している。

以上、卷八に至る朱補入本文の主要欠落箇処である。既述の如く、以下は掖斎所蔵の別一本に拠る補綴であるの

で、当然の事ながら別して対処すべきものとして、当該本については一括後述することとし、当面上記の八巻本に課題を絞り言及することにする。

猶、上記朱補本文のほかに、巻一―巻八の本文には、細部に亘る詳密なる、「一本」又「塙本」との対校を傍記している。当然のことながら上例朱補本文と共に信果本原形から排除されるべきものである。繁縷を避け一括した。^{註一}その際、併せて脚欄に林羅山旧蔵本―江本―本文とを対比することとした。

その結果を簡略に付言すれば、本書と羅山旧蔵本とは相互に猶異同を示しながらも、その過半に於て特徴的に共通し、異同の多くは本書の誤写によるものと想定され、本文上の末端に於ても、その類縁関係の近似性は否定しがたく、朱校の「一本」、「塙本」との間に見る逕庭を自ら垣間見るものである。

次に、巻一―八の間に所見する「原本云々」の朱筆校記であるが、これも前者同様に別註一覽した。^{註三}この謂う所の「原本」であるが、本書第三冊末識語―卷八恋部下―に、「此本欠卷九以下今以古本補之附于後／此原本及古本並掖斎狩谷先生所蔵」と誌すなかの、「原本」を指すものであろう。しかるに、例えば、次のごとく、本行に墨書しながらに、

もろともに今そなくなる時鳥原本ナシ一本塙本アリノ本ナシ(藍)「八声の鳥はおのかつまかは」
夏部 236

と下句を「原本ナシ」と朱註するのである。一見、墨書本行の下句は元来掖斎所蔵の「原本」たるべきと判断されるにもかかわらず、重ねて「原本ナシ」の付註は訝しく、二種の「原本」の存在をも想像されねばならぬがごとき錯覚にさえ落入りかねないのである。しかしこれは、寧ろ当時代一般の校訂方法と見るべく、その欠落本文に対する補訂本行化に伴う補助手段としての付註と理解すべきものであろう。そして、本書に屢々所見する「原本云々」の校記は

全て一巻九・十を除く一岡本保孝書写椽齋所蔵八巻本を表示するものと想定されるのである。その校訂者は、恐らく保孝その人であつたらうと思われるのである。

かく右の所見に従い別註一覽を概要すると、その本文は第二類本文、就中、林羅山旧蔵本に極めて近似し、その隣接する一本たることを立証するのである。そのことは、又逆に右記の推定を確認することともなり、信果本文の原形措定に於て留意されるのである。従つて、この朱註付記は前者の校合傍記とは別すべきことを付言しておきたい。以上が本書巻一〜八に見る朱校本文の大抵である。

偕、右述の本文取捨を考慮の上に、第二類本の中で最も相接する松平忠房旧蔵本・林羅山旧蔵本と本書との異同につき前例に倣い概括してゆくことにする。

まず、既述の羅山旧蔵本解題に於けると同様に、神宮文庫A本の一覽表番号に拠り、本書本文の欠落箇処を示し、その許に羅山旧蔵本本文の存否を対比し、参考までに既述第二類本―神A・志A・忠本―のそれを併せ付記することにする。但し、本書以下すべて共通する場合には書名を省略することとする。又羅山旧蔵本の朱補本文も既述のごとく別本補入であるので、信果本同様に欠落本文として対処した。

- (一)―1 (112 詞書「原本ナシ」)―神A・志A・忠・江本欠、同2 (187 左注「細補」)―神A・志A本欠、忠・江本細補、同3 (188 左注「細補」)―神A・志A本欠、忠・江本細補、同5 (236 下句「原本ナシ」)―神A・志A・忠本欠、江本朱補、同8 (463 詞書)、同10 (538 詞書)、同11 (658 作者)、同14 (746 作者)、同15 (769 詞書)、同16 (810 詞書)、同19 (892 歌)、同21 (936 歌)、同22 (958 詞書・歌)、同23 (1008 作者)、同24 (1034 左注)、同26 (1136 歌)、同27 (1160 詞書)、

以上、本書に於ても、第二類本神宮文庫A本系に所見する欠落本文二十八ヶ処に対し、羅山旧蔵本系十七ヶ処と共通し、その近似縁縁関係を提示しているのである。

且つ、忠房旧蔵本・羅山旧蔵本共に欠落する102歌―但し江本別本朱補す―と1227歌・1228詞書は本書は前述するごとく「古本・塙本」等にて欄外朱補するものであり、単に偶発的な同一欠落本文とは認めがたいものをも示唆している。しかしながら、羅山旧蔵本系と本書には猶次の如き顕著な異同が所見されるのである。

その異同本文の主なるは、羅山旧蔵本系に欠き本書に存するものである。従って以下の例示は、羅山旧蔵本解題に於て掲示した(口)表番号―九五頁以下参照―に拠り誌すことにする。

- 1 (102歌)―忠本欠、江・信本朱補、2 (259詞書・歌)―忠・江本欠、信本存、3 (558詞書)―忠本欠、江本朱補、信本存、
- 4 (741詞書・作者・歌)―忠・江本欠、信本存、5 (783歌)―忠本欠、江本朱補、信本存、6 (861作者)―忠本欠、江本朱補、信本存、7 (916歌・917詞書)―忠・江本欠、信本存、8 (930歌)―忠本欠、江本朱補、信本存、9 (1202歌・1203詞書)―忠本欠、江本朱補、信本存、10 (1227歌・1228詞書)―忠・江本欠、信本朱補、11 (1233歌)―忠・江本欠、信本存

と、神宮文庫A本に対する羅山旧蔵本系の欠落本文、如上十一例は其儘に本書の羅山旧蔵本に対する比較対象項目となる。上記略表に於ては羅山旧蔵本の朱補をも併註したが、該本元来の本文は朱補本文を欠如するものであれば、本書と同じくする欠落本文は纔かに二例―1・10―にすぎず、他九例は羅山旧蔵本に欠き本書に所載する本文となるのである。両書に於ては最も顕著なる異同といわねばならない。現時点に推すれば、本書は羅山旧蔵本系の脱漏本文を補う一伝存本として措定されるのではあるが、前述の両本共通要因を考慮に入れると、右の推測はそのままに首肯しがたう躊躇されるのである。しかし、一方又それを検証すべくもないが、本書、信果本の伝写過程には羅山旧蔵本系の脱

漏を補足するがごときの経過も其処には一部存したのではなからうかと。例えば、上例中、3・5・6・8・9、に於て羅山旧蔵本に所見する別本に拠る朱補本文のごときが本行化し、本書のごとき本文を形成してゆく経過である。当然の事ながら、その逆方向の推測も想定されるが、いま暫くその臆測を贅言して、ともかくも、両書にはかかる顕著な異同は存しながらも、第二類本系に於ては、松平忠房旧蔵本・林羅山旧蔵本の両本に隣接する伝本と、まず如上欠落本文上から設定しうると思われるのである。

又、両本が相近似する伝本たることは、次述する、異文・排列などに於ても類似又共通することからも検証されるのである。

まず、羅山旧蔵本の後を追い、本書歌句本文中に於ける欠字・空格箇処に見る書写状況を掲出すると―羅山旧蔵本の用例箇処に準ずる―、

296 第二句 「なつ〇かりし」^{かし一本ノ壙} (本書、以下同省略)―「なつかりし」^{かし歌} (羅山本、以下同)、702 第四句 「いく代の―」^{万一本ノ壙} 本) 万^(朱補) 世の□、※829 第四句 「をきたにあへぬ」^{せ一本ノ壙} □□せきあへぬ、※881 第二句 「くまなき光に」^{ナシ一本ノ壙} 「くまなきに」^{光に(朱補)} □□、※890 第五句 「物にそ有ける」^{有ける(朱補)} 「物そ□□□□」^{本(墨)たくひなけれは(朱補)} 1046 第二句 「滝といかに」^{は(忠順補)} 「滝といかに」^{は(朱補)}、

と、わずかな例であるが、その半ばを特徴的に同じくするが、さすがに本書には※符のごとき訂正された本文を示し、両書の間を相違を見せている。あるいは前者の「朱補」のごときの本行化も想像されなくもない。

ともかくも、次に本集伝本に所見する顕著なる異文を観ることにする。右傍に羅山旧蔵本を校記するが同本に見る朱補等は省略する。―これも羅山旧蔵本解題にて挙げた用例に準ずる、同処を参照されたい―。

1 七夕のかへるあしたのしづくにはあまの川なみ立やそふらん 秋部 388 歌

2 丹波前司季房の家にて女郎花をよめる 同 403 詞書

3 九月十三夜法性寺関白殿下にてよめる 同 536 詞書

4 皇后宮の弘徽殿におはしましける比細殿にて人に物申けるに女房のうへへのほるとてみち見くるしとてしはした

てと女官の申ければたちて殿上のかたへまかりけるをのちにまいりやするとまちけるに見えさりければかれより

をくり侍ける恋部下 1230

以上、四例にはすぎぬが、2「季房」と4「侍ける」の二字に異同を見出すのみである。しかも2「季」は原本

「重」とあり、異文に見る両本は殆んど同一本文である。

更に、両本の歌序・排列については、

(一)夏部 223・225・224・228・229・226・227・230、

(二)同部 263・265・264・266、(三)釈教 891・890

と、羅山旧蔵本系と全く一致する。前者と共に、両本はその基底に於ては同系類本上より派生した系統本を措定して差支えなきものと考えられるのである。

本書卷一より卷八に至る―葉山信果書写本文―と羅山旧蔵本との異同は大略如上の鹿述を以って尽るのであるが、相互の関聯に於て、羅山旧蔵本系本文に所見する誤脱本文に対し、本書の、その訂正文本を以て直に第二類本系を具現する伝存本と俄かに結論づけるには猶未だに踏られるのである。其処に、書写者の一種の本文校訂のごときが―例えば「原本云々」として本行本文化するがごとき―懸念されるからである。が、現在の処、それを立証する手懸りを

見出していない。

猶、本書には、別註註四のごとき朱墨両筆のイ本傍記が散見され、羅山旧蔵本との関聯を示唆するかとも思われる。又、些細なことながら本書に散見する勅撰集の集付―朱補のそれを除く―は、その殆んどが羅山旧蔵本系と同じくし、その点にも祖系同類を暗示するかと思われるのである。

偕、次に本書卷九・十の両本につき、その概要を誌すことにする。

既に奥書の処にて記述したごとく、第三冊尾―卷八末―に、「此本欠卷九以下今以古本補之附于後／此原本及古本並掖斎狩谷先生所蔵」と見え、第四冊尾―卷十末―には「此本欠卷九以下雜部故以一古鈔本繕写／補入此藍本亦係先生之蔵」と、天保二年岡本保孝の識語するところであり、掖斎儲書一本にて補綴した両巻である。

此両巻は以下に記すごとく第四類本系に属し本類項とは別して対処すべきであるので、わずか、その概略を述べるにとどめることとする。

まず、本書の欠落本文―書陵部A本に対する―の顯著なる処を掲げると、

- 1 阿闍梨 雜之部上 1304 作者 類・永・宗本等欠
- 2 わきかへりなみちゑさそうたきつせにたえてもたてるいはまくらかな 同1321 歌 但シ忠順ニヨリ野口本ニテ補 類
・宗本等欠、永本細補
- 3 修理大夫 三宮御製云々 同1383 作者 同忠順同本補 類・宗本等欠、永本細補
- 4 ……わか身のうへになりはてぬ…… 雜之部下 1518 詞書 同ジク忠順同本等ニテ補 類・宗本等欠、永本細補

5 まことにやのりのはしよりをちにける 同1590唱句 同ジク忠順同本補 類・宗本等欠、永本細補

6 つく

くゝつまはしはまくりきてをり 同1608和句 但シ唱句頭ニ△朱符ヲ付シ朱補ス 類・永・宗本等存

7 殿義入寺 同1609唱句作者 同ジク忠順野口本ニテ補 類・宗本等欠、永本細補

等が瞥見される。本書の欠落本文6を除けば第四類本の中でも群書類従本・間宮永好校合本・萩原宗固本に近似し、細部の本文自体も兩三本文の複合態とも云うべき様相を示している。その詳細は第四類本各本解題中にて言及することにするが、惣じて本書巻九・十兩卷本文には稍々誤文が目につくところの伝本である。

此の兩卷も卷一〜卷八と同じく、葉山信果書写の朱校合―原本・塙本、一部堀川百首・永久百首等―と村上忠順の追校―野口本・塙本・勅撰集・私撰集等―が傍記されている。後者は忠順の追校なるをもって別するが、前者に謂う「原本」なるは何本を指すかの問題が残る。勿論、掖斎所蔵の八冊本でないとするれば、既述八冊本本文中にも所見されたごとく、一種の部分的本文改訂の後、依拠本の原姿をとどめるべく、同じく巻九・十兩卷に於ても掖斎所持古鈔一本―巻九・十兩卷依拠本―を「此藍本」、即「原本」と記して原態を表示したものであると、と解しておくこととする。別註註五したごとく「原本云々」の校合箇処はわずか十数箇処にすぎないが、そのすべてが、「塙」本本文である。とすると信果依拠本―岡本保孝書写本―の校訂者は「塙」本に惹かれての改訂であったかと推測される。既述巻一〜八の間に於ても、その大略は同様であったのが符合するのである―註三参照―。そして、その校訂者に保孝その人を想定するものも同様である。

又、別註は「塙」本校記も併掲したが、これも五十余箇処の僅少なる異同が主である。―猶、「原本」、「塙本」等の註

記を欠く信果筆朱傍記が散見されるが、それらは主に墨書本文の誤写を訂したものと認められる。その点に於ても、本書―掖齋所持古鈔一本―は、第四類本系統の中でも、先に記したごとくに、群書類従本・間宮永好校合本・萩原宗固本と類縁をなす本文であるといいうるのである。

しかし、この掖齋所蔵古鈔一本の巻一―八の間については、その所在不明な現在、その実態は確認しがたく、本書当該部に施された「一本」朱校に依存するのほかはない。註五に一覧したかぎりに於ては、その過半が「塙」と共通するところから当然又近似的本文を予測されるのであるが、二・三猶疑問を提示する処が所見される。

先ず、さきに揭示した本書の顕著なる欠落本文箇処であるが、その大概は「一本」又「塙本」を以って朱補している。且つ又その朱補部分は略共通する。しかし、次の両首にはこの朱補を欠いている。即ち

諸の花くさ／＼にさきみたるといへる事をよめる

そこはくの花のひもとく庭のおもにをしのけたるははちす也けり 釈教958(書A)

あさましやこはなにことのさまそとよこひせよとてもむまれさりけり 恋部上1136(同)

の二首である。当然の推定として両首は「一本」又「塙本」に不載の本文と措定されなければならない。もっとも、村上忠順が信果本手沢後、「塙本」も以って追補しているのであるが、「一本」に於ける存否については厳密には単なる看過として処理しえないであろう。

又、次の、

いへはけに花のみふねとみえつるは君か千とせをつめるなりけり 春部102

と朱補しているが、その対校本は「一本」なるか「塙本」なるか全く無註記のままである。「塙本」のそれは確認

し得ても「一本」の有無は又不明というほかはない。

更に、詞書に移ると、

- イ 丹波前司重稿一本/原本季房人、秋の花をよみけるに(類本存、本書欠文)の家にて○女郎花をよめる 秋部403
一本ノ稿本マ、
- ロ 同所にてとふ人もなきたひの○いふせかりけるに………同部463
すみかに霧降ふたかりて(類本存、本書欠文)
- ハ 九月十三夜(以下五字本書アリ、類本ナシ)法性寺関白殿下にてよめる 同部536
- ニ 秋の山の月をみる………といへる事をよめる(類本存) 同部538

の四例は、傍記するごとく信果本に欠落、又は異文「ハ」となるにもかかわらず、「一本」又「稿本」にて校記するところがない。イ・ロ・ニの三例は後に忠順が「稿本」にて追校している。「私に傍記したのは類従本本文である」。しかし、これも又「一本」に於ける本文の如何は推すべくもない。念のために、「稿本」顯著な欠落歌(1)442詞書・歌、(2)734詞書・作者・歌の当該部は(1)はその上欄に「一本及稿本此二行ナシ」を同詞書・歌二行に朱註するが、(2)については無註記である。これも先例同様に忠順の「稿本ナシ」の追校が付記されているにとどまり、「一本」の存否は知るべくもない。

以上、「一本」本文の原形は既に確認しがたき諸点を見るが、「一本」本文はこれら不明諸点をのぞけば類従本系に極めて相近似する伝存一本と推論されるのである。寧ろ如上不明諸点は校勘記にまます見する偶発的な看過によること、その過半は判断すべきであろう。

次に、参考までに、「一本」の歌序排列に言及しておくことにする。

信果本にみる排列は、既述(一)・(二)・(三)——一六頁参照——の三例である。当該箇処の朱校書入れは、(一)に於ては225歌・

224歌の各歌頭に、「^{一本}後ニアリ」、「^{一本}前ニアリ」と、それぞれ朱書し、「一本」、「塙本」の排列が、223・224・225の順序たるを指示している。しかし、信果本224の次は225・228・229・226・227・230に対し、「塙本」は225・229・226・227・228・230と配している異同を何等付註していない。「一本」も又不明というほかはない。又、信果本509・510に対し「塙本」510・509の異同も付註せず、同様に「一本」の排列も不明である。

次に、信果本(二)の当該部は、265歌頭に「此歌ト上ノ哥トノ間空行ナシ^{一本塙本並同}」と朱書し、更に265詞書を266詞書の前半と合すべき朱線指示を付し、「一本／塙」と朱書している。要するに類従本の排列を^{註六}表示し、「一本」も又同じくすることを印したものである。

信果本(三)の当該部には、890の上欄に、「一本此二行在／智恵光仏上」と朱書し、「一本」が890・891の順序たるを誌している。因みに「塙本」は891・890と配され、本書と同じくしている。

以上、信果本一巻一八が「一本」歌序排列につき校合朱書するところである。記したごとく猶確認未詳の点は残すが、その排列に於ても第四類本中の群書類従本・間宮永好校合本・萩原宗固本と略同じくする伝本と推測されるのである。付言するに、第四類本に於ても、上記排列には各本間相互に異同が見出され、それも又上記付註を以つて、その原態の推定を困難なものとしているのである。

聊か縷述におよんだが、本書―信果書写本―の依拠した岡本保孝本が既に掖斎所持の両系統本を合綴し一本として成った経過をもち、その間、「一本」、「原本」、「塙本」又「原本」のごとき稍々統一性を欠く校勘過程を経た複合態―更に言えば墨筆本行本文にも補訂のごときも予想される―の書写本であるが故に紛雜なる言及も避けられないことでもあった。ともかくも、かかる書写本が村上忠順の「散木棄詞集標註」本文の基底におかれ、其後、野口道直本・塙本

(追校)・諸集載録歌等の校合が施されて「標註」本文の基本が形成されてゆくのである。が、それは同時に忠順校訂「散木棄歌集」として、信果書写本の経過に加え複合改訂化されたものにと移行しているのである。野口本以下、忠順の校合に就いては敢て省略したが、葉山信果書写本の実態を辿るべく煩雑を避けた故にすぎない。「標註」稿本の成立経過として後に一括することにする。

又、本書は「標註」第一次稿本として上欄余白を主に行間をもふくめた標註資料を搜蒐し、同標註の基礎的草稿たらしめている。

「標註」第二次稿本の本文に就き僅かに付言すれば、右記の校合経過の許に同本文は村上忠順校訂本として編成され、第四類本、就中類従本に程近き形態にと改訂され、嘉永三年序刊本本文として転用されてゆくのである。

前者と併せ―第四類本系の後に―別叙することにする。

註一 以下、傍記校異部分(朱筆信果、墨・藍筆忠順)を含めて掲示することにする。

第一冊 散木弃詞集^{奇稿(墨)}第一 春部、散木奇詞集第二 夏部、第二冊 散木弃歌集第三 秋部、散木弃歌集第四 冬部―以下、右傍校異ニ「部」―一本ノ稿(朱)・ノ(藍)―、第三冊 散木弃歌集第五 祝部・別離之部―右傍校異ニ「之部」―原本ナシ(朱)・ノ(藍)、左傍校異ニ「部」―一本アリ(朱)、^朱旅宿部―「部」一本(朱)、^朱右傍校異ニ「部」―^朱驕旅稿(朱)―、散木弃歌集第六 悲歎部・神祇・积教部―「部」一本(朱)、^朱右傍校異ニ「部」―^朱ナシ原本(朱)、^朱散木弃歌集第七 恋部上、散木弃歌集第八 恋部下、第四冊 散木和歌集第九 雑之部上、^朱散木和歌集第十 雑之部下・^朱長歌・^朱旋頭哥・^朱混本哥・^朱沓冠折句哥・^朱隱題・^朱連哥、と書写、校異されている。

註二 本書の主要な朱筆補入箇所のほか、細部にわたり、原本・一本・塙本の朱校を付記している。繁縷におよぶがその全てを
 揭示し葉山信果書写本の原形を溯及することにした。―但し、信果本には忠順手沢後の野口本、又塙本の追校、書入れ等が
 詳記されるが、除外事項であると共に紛雜を避け却除した。―且つ類本たる林羅山旧蔵本、略称江本本文を対照し脚記する。
 但し江本も又別本朱校を施すものであるが当然の事ながらこれを排除し比校したものである。又、両書本文の対校は言うまで
 もないが、両書の原形たる墨筆本文のみを対比したものである。猶両書の漢字と仮名、仮名遣い、活用語尾等の異同は省略す
 ることにする。その上にて両書同一本文の場合は「同上」として省略し、異同部分は揭示の上にて於て当該箇所の不分明の場合
 は左傍に・符を付すこととした。猶信果本にままだ散見する無註記朱墨訂も併せ収載することとした。末尾に、両書本文以外に
 所見する本文上の書入れを加え付記した。

春部

1 詞書(以下「詞」ト略) ……心をつかふまつりける―本文同上(以下単ニ「同上」ト略)、4 詞 朔日朝に…―同上、6 詞
 ……かゝみの折敷の…―…かゝみの折敷の…、8 初句 さほ山の―同上、12 詞 ……心をよめる。(朱本行) 塙一本―…心を、
 17 第二句 あしみを駒に―同上、18 詞 ……よもの山へ霞(朱本行) 塙一本) わたり…―…よ□の山へ○わたり…、同18 第五句 立
 とまりけむ―同上、19 詞 ……人のかたりける返事にいひける―同上、20 詞 ……いふなる物わするを…―同上、26 第二・三
 句 うきつにはゆる○このうなを―同上、27 第五句 あらふねせりか―同上、29 詞 ……君菜を○くりて…―同上、34 詞 ……う
 ちにうつえなど…―同上、35 詞 はつ卯の日よめる―はつ卯日よめる、43 第四句 杜のたまえに―同上、44 第四句 花のあり
 かを―同上、45 第五句 香ににほふらん―同上、48 詞 山家鶯と…―同上、52 第四句 まやのあまりに―同上、56 詞 皇后宮
 亮頭国朝臣…―同上、同第五句 せにかはるらん―同上、60 詞 ……風にかほれるを…―…風にかほれたるを…、63 詞 ……
 ……ひて侍けるに人―…―同上、67 詞 ……よませ侍けるによめる―同上、68 初句 あたし野は―同上、70 第二句 かせし桜の
 ……

は二本ノ塙 72第二句 嶺とす風の(こ朱)一本ノ塙 74初句 ちりつみし一本ノ塙 同上、同第五句 見ゆる身なれば一本ノ塙 77第三句 引かけて一本ノ塙 同上
 詞 78詞… 顯季のもとへ… 顯季もとへ… 同初句 ぬひもなく一本ノ塙 同上、80初句 雨ふらん一本ノ塙 雨ふらは、82詞… 事をよめる一本ノ塙 同上、83第三句 木かくれね一本ノ塙 同上、同第四句 風そよめきて一本ノ塙 同上、86詞… やうく暮ける一本ノ塙 同上、87詞… つかうまつりける、88詞… 心も詞も及ずめてたさに… 同上、同第四句 思ひしらすも一本ノ塙 同上、90第五句 山さくらかな
 一本ノ塙 同上、92第二句 なにまふらん一本ノ塙 同上、94第二句 花ふくへしと一本ノ塙 同上、95詞… 仰ありたるに一本ノ塙 同上、97詞… といふことをよめる一本ノ塙 同上、同初句 こもち山一本ノ塙 同上、98詞… 云ことをよめる一本ノ塙 同上、101第四・五句 梢にかねて千代
 せみえける一本ノ塙 同上、103第四句 花のさかりに一本ノ塙 同上、105詞 風のおこりて… 同上、106詞 大式長実の亭にて… 大式長実卿亭
 そこもれる一本ノ塙 同上、109詞… 人く〇十首哥よませ〇給けるに… 同上、同第五句 みそまかへぬる一本ノ塙 同上、112詞 かへし塙 アリーナ
 にて…、109詞… 人く〇十首哥よませ〇給けるに… 同上、同第五句 みそまかへぬる一本ノ塙 同上、112詞 かへし塙 アリーナ
 シ、同初句 春のうちは一本ノ塙 同上、同第三句 花さきて一本ノ塙 花さきぬ、113第二句 あかす見ざらん一本ノ塙 同上、114詞 暁天尋花一本ノ塙 同上、
 116詞… 花下旅所と… 同上、同初句 かさしきな一本ノ塙 同上、118第四句 いそしのみねを一本ノ塙 いそしの峰に、123第二句 たをれと
 原本 ちらぬ一本ノ塙 たをれはちらぬ、同第四句 梢に人に一本ノ塙 同上、128詞… 水上落花一本ノ塙 同上、130詞 かはたうの桜… 人々又参て…
 本マ、 同上、同第四・五句 枝をはし一本ノ塙 のふ人しなれば一本ノ塙 同上、138第四句 空行花と一本ノ塙 空行雲と、140詞… 方をわかつて花を折てつか
 はして… 同上、141第四句 ひとりや苔の一本ノ塙 ひとりや苔の、142詞… まかりてよめる一本ノ塙 同上、同第五句 風そなりける一本ノ塙
 上、143第五句 思ひはてぬる一本ノ塙 同上、144第五句 風にきせなん一本ノ塙 同上、146初句 吉野山の一本ノ塙 同上、150第三句 花なれば一本ノ塙 同上、156第
 四句 つつしか岡に一本ノ塙 つつしか岡に、165第三句 くちさへて一本ノ塙 くちはへて、167詞… はまくりをこすとて… 書付侍ける一本ノ塙

師時……同上、252詞……よみけるに……同上、255詞 故大殿の北政所……同上、256詞……中宮御方にて……同上、同第四句 しの
ね一本ノ塙 ひ〇すると……しのひすると、258第五句 なきぬへきかな……同上、263をとせぬは云々歌ト 265時鳥云々歌トノ間ニ「此哥ト上ノ哥
ね(朱) トノ間空行ナシ一本塙本ト朱書ナシ、267第四句 きなをのさとの……同上、268第五句 いく夜なりとも……同上、272詞 暁〇郭公
並同 同上、273詞……をとすれすと〇五月雨の比……同上、278詞 中宮〇御堂にて……同上、同第四句 ひしのうち葉に……同
 上、283詞……あるきたかへて……ありければとはきにれいならぬ事……同上、同第四句 ふける蓬の……同上、286詞 仁恵法師
一本ノ塙 の……くす玉を〇くるとてよめる……同上、同第二・三句 〇かよとののねならずと……君かよとのゝねならずと、289第五句 ねもは
お一本ノ塙 るか一本ノ塙 かる也……ねもはるかなり、296第二句 なつ〇かりし……なつかりし、299第四句 滝のしら糸……同上、300初句 五月雨の……同上、303
 詞……潤五月〇郭公と……同上、同第五句 をちかへりけれ……をちかへりけれ、304詞……白河まで……白河にて……
の一本 ……、305詞 おなをし心をよめる……同上、311初句 あふことを……同上、同第四・五句 めも見せつるは……にやあるらん……同上、313詞
ふたむら山を一本ノ塙 夏日越関……夏日越関、314第五句 夜は更ぬらし……同上、315詞 月前自〇涼一本無此題……同上、316第四句 光のまにそ……同上、320初句
ち一本ノ塙 あつさのの……同上、同第五句 なる身ともかな……おる身ともかな、322詞……そのひかきのうちに……そのひゝきのうち
か一本 に……、324詞 雲居寺〇……同上、325初句 今朝も又……同上、326第三句 うら風に……同上、330第二句 山かた山陰の……同上、331第
一本ノ塙 三句 あせかけは……同上、332第四句 水をとをのみ〇……同上、336第四句 いくつへ冬の……同上、337第三句 さえゆくは……同上、341
ゆ一本ノ塙 第三句 見ゆる哉……同上、同第五句 跡をと……めし……同上、343初句 此さゝも……此さとも、349初句 柴の庵〇……柴の庵を、351詞……
すくす一本ノ塙 ……暁の水鶏と……同上、354第五句 すかひ……に……同上、355詞……いたしつかはしたりける哥……同上、356詞……二日〇あり
ナシ一本ノ塙

て……―同上、358第四句 たも〇となく―たも〇となく、同第五句 こひえらし(上欄ニ)一本結句、こひたくむらむト朱
 書)―同上、359第四句 さしもはいかに―同上、369第三句 はらひして―同上、370詞……はらへをよめる……はらへをよめ
 る、296五月雨は云々歌・297おほつかな云々歌ノ各歌頭ニ、296「後稿」、297「前稿」ト朱書一ナシ、

秋部

372第二句 しのひ〇あへそ―同上、374第四句 あへれしめしひ―同上、378詞 逐夜風涼―逐夜風涼、379第三句 いそくとて―同上、

381第二句 あまのたまゆる―あまのたまゆか、382第二句 いそあひにけり―同上、388第二句 かへるあしたの―同上、但イ校ナシ、

390初句 あひ見は―あひみんは、392第四句 秋は野鳥と―秋は野守と、395詞 大殿絵哥の中に……―同上、396第三句 おひにし

て―玉にして、399第三句 かくれてたれに―同上、401第五句 人に見えぬる―同上、403詞 丹波前司季房の……―丹波前司重房の

……、同第五句 めもそきになき―めもそきたなき、405第二句 露もしからみ―同上、同第四・五句 幾入にはをそめかくすらん

―同上、409詞……草花露……草花露深……、411詞 同殿下にて……―同殿にて……、同第五句 汀をそみる―同上、

412詞 萩花靡風―萩露靡風、414詞……人々秋花を……―人に秋花を……、415初・二句 さしこして薄かほかに―同上、416

第三句 むつるれと―むつつかれと、417第二句 まろをの糸を―まそをの糸を、418詞 殿下にて……―同上、420第二句 いとにか

れる―同上、422第二句 をのかかやねに―同上、425詞 松虫を―松虫、430第五句 あさつみせよ―あまつみせよ、432第二・三句

いそきたちあるいはの中に―いそきたちぬるいはの中に、434詞……咲たりけるに……―同上、435第二句 さきすさひたる―同上、

438初句 露にさへ―露にたに、441詞……めをさまして……―同上、445詞……きよてよめる(三字朱補)……―聞て、同第五句

てふす一本
 しぎしのふらん—同上、448詞 夜深聞鹿—夜深聞鹿、454詞 鹿のこゑ山風に……—鹿のこゑ山風に、458第五句 鳴あかすらん—同上、
 ナン一本ノ稿
 459詞……所にて在五中将の……—同上、464詞……あふきのあはせに……—「あふきあはせに……」、468第二句 こまの毛つきを—
 ナン一本ノ稿
 同上、469第五句 むろの八島は—むろの八島に、479第五句 雲と成ける—同上、480詞 四条宮〇扇合に—四条宮扇合、482第五句
 ナン一本ノ稿
 数やみゆると—同上、483詞 大式長実〇八条家……—同上、485第五句 光ことなる—同上、490第五句 すみのほる哉—すみのほ
 ナン一本ノ稿
 る哉、492詞……萩の原に……—同上、494第二句 あれまを分て—あしまを分て、497第四句 ひとりもあゆむ—同上、498第五句
 露一本ノ稿
 月のすむらん—同上、499詞 月あれたる家を……—同上、504序（以下長文ナルニヨリ当該部分ノミ揭示スル）、かとあるさまに
 ナン一本ノ稿
 みゆる—同上、草むらもはしはみて—同上、い〇なふことも見えす—同上、いまは風になみよりて—同上、けふなりたゝに〇やは
 ナン一本ノ稿
 同上、心をは川しまの—同上、ひとりあはれ—同上、政のには—同上、はちのを〇つめのひゞき—同上、そのむしろにめ〇
 ナン一本ノ稿
 一本ノ稿
 て—同上、しかさる御時に—同上、雲の上人とかそへられて—同上、万には、かりの関—同上、まくまの〇おそろしけれと—ま
 ナン一本ノ稿
 くまの〇おそろしければ、かへり見らんかも（余白）—同上、505第五句 きのふ斗か—きなふはかりそ、507詞 未遂—同上、同第
 ナン一本ノ稿
 五句 月を見る哉—同上、508詞……五首の哥……—同上、509第五句 谷風の水—同上、511第二句 のへる空の—のこ
 ナン一本ノ稿
 へる空の、512第二・三句 ゆくゑしられし月にては—ゆくへしらせし月にては、513第四句 おほそを鳥も—おほそを鳥も、519詞
 ナン一本ノ稿
 ……月をよめる—…月をよめる、525詞……人にかはりてよめる—人にかはりて、530詞……成ければよめる—同上、539第五
 ナン一本ノ稿
 句 月にたてれば—月に立てれば、543詞 田上に侍ける比……菊もとめてすき〇つゐて……—同上、546詞 百首哥〇中に……—
 ナン一本ノ稿
 同上、547詞 菊花暗霜—同上、548詞……残菊重花……—同上、552第二句 此身もおしむ—同上、556第二句 染はてつらん—同
 ナン一本ノ稿
 上、560詞 障子〇絵に……—同上、561初句 もみち葉に—同上、563初句 たれかいな—誰かはな、565第二句 はなふく秋に—はな
 ナン一本ノ稿
 一本ノ稿

ふく秋よ、566詞 九月尽の心を―同上、567詞 …… 九月尽を―九月尽
部一本ノ塙 原本ナシ
冬哥―同上 一本ノ塙アリ

冬哥―同上

569第五句 時雨ふらすな―同上、572詞 …… 旅宿時雨 …… 旅所時雨 …… 574第五句 名こそ有けれ―同上、576第五句 かたみ

な一本ノ塙 如何はかり―同上、585詞 …… 紅葉を―… 紅葉、588詞 …… 旅宿紅葉を―… 旅所紅葉を、

591第三句 手になきに―手になきに、593詞 □山落葉―深山落葉、595第三句 成ぬらん―同上、同第五句 なり行見れば―同上、599詞

…十月比に…―同上、603第二句 さきかたしとや―すきかたしとや、604詞 百首哥〇に…―同上、同第四句 ひをへてよら

一本ノ塙 610第五句 雪ちりおひて―同上、612第四句 はふれにたかの―同上、620第五句 ひるかへるらん―同上、621第二句 け

ふりにまよふ―同上、622第四句 岩こす浪に―同上、624詞 …… 栖と〇いひなから…―同上、629詞 山家嵐をよめる―山家風をよ

める、632第五句 ぬれすはやまし―同上、633詞 大殿の哥絵に…―同上、634第五句 まつと見る哉―同上、640詞 …… 朝に泊のもと

にあはちのすみたつね〇したりければ…―朝に伯のもとにあはちのすみたつねしたりければ…、同第五句 はかなか

りけれ―同上、645詞 水閉水鳥―水閉水鳥、同第五句 せきとなくらん―せきと成らん、646第二句 さのゝ中川―同上、647初句

まのゝ池の―同上、同第四・五句 石またつねて鳴つたひしつ―石間たつねて鳴つたひしつ、649第二句 さのゝかや原―まのゝ

かや原、同第四句 池のみきはに―同上、650第五句 成まさる哉―同上、651詞 氷満池〇といへるを―氷満池といへる、同初句

今日よりは―今朝よりは、同第五句 ひまもとむらし―同上、656第四句 梢そ冬は―梢そ冬は、670第二・三句 音羽の山もみかく

れて―同上、同第五句 けさはかふらん―けさはこふらん、672詞 …… をくられて侍る―同上、674第五句 しくれおつなり―しく

れをつなり、676第四句 うれもとつはに―同上、682詞 晦日をよめる―同上

祝部

685詞……けふの心よそと……けふの心よめと……、687詞 高陽院殿の哥合に……高陽院の哥合に……、696詞……松陰

本ノ稿本並同 浮水といへる……同上、697詞……遠行にかはりて……同上、699第三句 祝つる祝つゝ、701詞……まいらすへきと仰あり

ければ……同上、同第三句 みたらの「みたかくの、702第四句 いく代の□□同上、705詞……きしのはねかくを……同

上、同第三句 たつきしの「同上、707第四句 あそふも君か「あかふも君か、710詞……あそはれけるに……同上、711詞 中納

言○家にて……同上、714第五句 花はさきけり「同上、718詞……いしなとりの所あはせと……同上、同第五句 万代まで

も「万代までに、719第五句 かそへてそやる「同上、724第五句 おちしと思ふ「同上、725初句 笛竹の「同上、

付 726君か代に神もかたよる石なれば云々、727君かためゆたのをわけてひろいつる云々、両歌上欄ニ「二本此二首ナシ」ト朱

注記、本書—江本欠

別離之部(之部朱引) — 別離

730詞……後中納言つくしにて……修理権大夫の上……彼中納言つくしにて……修理大夫の上……、732詞……人の送り

して……人の送して……、同第五句 人はわかる「同上、736詞 五節の比○……同上、743第五句 猶たつさはん「猶

たつさはん、746作者 経兼稿(以上朱) — 欠、748第五句 思をこせん「同上、749詞……思たちける人の……思たちける人に

旅宿部(部朱) — 旅宿

754第四句 露も心を「同上、761第二句 鷹とみかれは「鷹とみたれば、同第四・五句 波まをわかるいさこ成けり「波まをわかる

みさこ成けり、762詞 撰津国なる所に……同上、763第五句 めをさましつゝ「めをさましつる、764第五句 つみはさきこえす

―同上、771詞 哥の島と云所まで……明意阿闍梨か舟に……―同上、778第三句 夕ぐれは一本／されは稿
悲歎部

780詞 ……物をそろしきもこひ人の……ほけすつる程に……―物をそろしきもそひ人の……ほけすつる程に……。781詞 こ

とかきりありとて……同上、782詞 ……すはたのゆの……立よりてあらんとはなけれど……すいたのゆの……立よりて

あみんとはなけれど……、783詞 なにことをか〇すへきとて……同上、785第三・四句 まとへともむまよりみちは―同上、786第

四句 こととふさへそ―同上、787第五句 声をくるなり―同上、788詞 あらつをいて……―同上、789詞 ……むかし思出らるゝ

……―むかし思はるゝ……、同第二句 ほこのしづくに―同上、790詞 ……見ゆるを〇よめる―同上、791第四句 泪の雨も―同

上、792第四・五句 あしやのねてもしらねをそする―あしやのねてもしくねをそする、793詞 もしの関すかるに……―もしの関

すくるに……、799詞 しらいしのすを過〇とて……同上、801詞 ……こちはよかりし物を〇と思へて……―こちはよかりし物

をと思て……、805詞 ……風夕はりして……―同上、807詞 ……しけること〇見えて……―しけること〇みえて……、同第二

句 又有けりと―同上、808詞 ……人のけかりけるに……―同上、同詞 ……をのつから〇うつりたりけるを……―同上、809詞 ……

…郭公の声〇……―同上、811第四句 別し道に―同上、813第五句 時そともなに―時そともなき、814詞 ……おはし〇たり……

―同上、同詞 ……守為隆けりや……―守為隆かゝりや……、同第五句 袖のけしきを―同上、815第五句 鳴千鳥なり―同上、

816第二句 しらしをわたの―同上、同第五句 かたはそふとも―かたはとふとも、817詞 ……風吹なんとす……―同上、818第二句 お

もふあかしの―同上、820第三句 つきつらん―同上、821詞 ……むすめのをと〇はをくして……―むすめのをと〇いをくして

……、同詞 ……申ければ……―申けれと……、同第四句 あしかけにても―あしかけにても、822詞 みましまへと云所……

―同上、826詞……のほらせ給ひしときの……のほらせたまひしとき……、同第三句今す一本ノ塙今すこし―同上、827詞……ふみ

／塙のほこなる……笛のほこなる……、同第五句とは一本ノ塙みえまし物を―同上、828詞……所をすく〇とて……―同上、829第四句

をきたにあへぬ―せきあへぬ、830第三句あやめ一本ノ塙まこも草―まこも草、同第五句あさむ一本ノ塙玉とつらぬく―同上、832詞ひきかへのこしを……

ひきかへのこしを……、同第四句う一本ノ塙こしと思ふ事―うしとおもふ事、833詞の一本ノ塙雨〇ふりければ……―同上、同初句さしかくす―同

上、834第五句こと塙かとて成けり―同上、835第三句や一本ノ塙ちらしてき―ちらしてき、836第二句ヤイ(朱)ひまもとめけり―同上、838詞ナシ原本昔のあまう

へに……昔あまうへに……、840第五句秋一本ノ塙よその夕暮―同上、841第四句朽一本ノ塙捨にし袖に―同上、同第五句か一本ノ塙かくるけふ哉―同上、842

第五句に一本ノ塙袖のひつらん―同上、844詞……四巻をあたりたりけるに……―同上、同詞……なきたるかたを……―同上、同詞……

……経妙文の塙〇より……―同上、845第五句捨原本朽はてぬらん―同上、846詞……極楽のしまの……―同上、同初句みらくの一本ノ塙極楽の―同上、同第

二句わ一本ノ塙ねかひのもの―我イ(朱)ねかひのもの、847詞としこゑ〇ければよめる―同上、同初句に一本ノ塙あらぬよ―あらぬよに

神祇

852詞離別一本ノ塙悔別離と……―同上、853第三句や一本ノ塙おもへはくるし―同上、854初句と一本ノ塙身をはつき―同上、855初句たか一本ノ塙おりのほる―同上、同第四句

跡一本ノ塙ことをたるみの―同上、856第三句わひぬ一本ノ塙見はずとも―同上、同第四句た一本ノ塙君かしもとの―同上、857第四句つ一本ノ塙よみけむなへの―同上、

858詞……陰原本隠家と……一本ノ塙本ノ陰家と……、859第五句みれとも一本ノ塙吹とおもへと―吹とおもへは、860詞……杜社の下に……杜原本神の社にたる

……杜社の下に……ら一本ノ塙神の社に似たる……、同詞……いふれば……宮一本ノ塙いらふれば……、864第三句来てみれ一本ノ塙見わたせば―同

上、867詞……わ一本ノ塙ゆいかして……宮一本ノ塙ゆはかして……、同詞……は一本ノ塙もちいの神と……―同上、同詞……は一本ノ塙たいふれて……

はふれて……、868第三句る一本ノ塙まはらまし―まいらまし

釈教部 釈教

ナシ原本
一本ノ稿アリ

869第二句 弥陀のみきりに 同上、870詞 論義講しける所に …… 同上、871詞 …… 心をよめる 同上、同第三句 みつかきに

同上、同第四句 わか身〇さへも 我身をさへも、872詞 …… 心をよめる …… 心を、873詞 経の文を …… 同上、同第三句 命

なれば 命なれば、874第一句 みなとならねは 一みことならねは、875第四句 つむむにさへも 同上、877第五句 をし〇さりせ

は 一をしへさりせは、878詞 …… 心をよめる …… 心を、879第三句 花なれば 同上、880詞 四卷経功德〇品中に …… 同上、

同詞 …… 功德夜光と云文を …… 功德夜光といふ文、同第五句 花をし見はや 同上、881第二句 くまなき光に 一くまなきに、

同第三句 もれぬれば 同上、883第二句 かすかきりなき 同上、第四句 きふはれぬへき 一きらはれぬへき、885詞 無昇光仏 一

無昇光仏、同第四句 心そいまの 一心こそいまの、887第四句 闇にまよはん 同上、891第二句 心のうちそ 同上、893第四句

いふかたりなき 一いふかたもなき、894第二句 待つへつけつれば 一待つつけつれば、895詞 …… と云事を 同上、896詞 …… と云事を

よめる 同上、897詞 …… 大空〇は衆の音なんする 同上、同第三句 かほれるは 一かほれるは、899初二句 諸人は誰ともなき

に 同上、900詞 …… 鳥のあつまりて法をとなふと …… 同上、同第五句 法をとふらん 同上、902詞 …… たのみをかくれば

〇極楽に …… 同上、903第二句 ふきまかふらむ 同上、904第五句 かさなり成らん 同上、906第四句 金のま砂を 同上、908詞 ……

…… みな法をはなふと …… みな法をとなふと …… 910詞 つくれる仏のありさま …… 同上、911詞 阿弥〇仏の …… 阿弥

陀仏の …… 同第二句 天津御空に 同上、912第二句 かりそめことを 同上、同第五句 人におらるな 同上、913詞 …… と云

事を 同上、同初句 人すくふ 同上、914詞 …… 見たてまつらんと思 同上、同第二句 蓮のするど 同上、916詞 …… 生ぬれ

は …… 同上、917詞 …… 人なむ生すると云へる …… 本文欠、918詞 …… きよくさかりて …… 同上、919詞 …… 昔の事をし

一本ノ稿
 りさとりを……一同上、920詞……云事を一同上、924詞 かのくに○かゝみの……一同上、926詞……道を退せ○といへる……一同上、927第二句 かけてしほとを一かかてもほとを、928詞 仏の御光……一同上、同初・二句 つれごめし神のいうかき一妻こめし
 神の八重かき、935第二句 我とこやはに一我とこやみに、939詞 一切の経の……一同上、同第四句 きよきかせぎと一同上、940詞
 ナン一本ノ稿萬一本ノ稿
 其国にては前たいらかにてたかく○ほなる所なし一同上、941詞……なかるゝ水のみ有て……一同上、943詞……みなかく○な
 んときくに……一同上、同第三句 けぬもせず一同上、944詞 竜樹の十二礼文一同上、同詞……おはしけん……一同上、945
 第四句 いつる日影に一同上、946第二句 むかひをのへ○一むかひをのへの、948第四句 心ひろさに一心ひろさに、949詞……み
 ちひかせ給ちからによりて……一同上、950詞……阿弥随仏の御かたに……一同上、952第三句 あらはして一同上、953詞 かの
 くに○は……一かのくには……、954第二句 ことのみしけき一同上、同第四句 名にたにいはぬ一同上、957初句 そのくに……一
 本ノ稿
 同上、同第五句 まなひやかに一末なひやかに、959第五句 してはやすらん一してけやすらん、962第五句 心ち成けり一同上、
 963第四句 こゑにはつらん一同上、964詞……仏の法をとくくにを……一同上、965詞……光をます一同上、同第五句 かへてさ
 る一本
 すかな一同上、969詞……十楽をよめる○一同上、972初句 しか○あれと一同上、973第三句 海に出て一同上、974第二句 むすひと
 ○めし一むすひとめし、976第五句 きくもいとほし一同上、977初句 ときもとく一同上、978初・二句 はうくものほらんことそ
 一本
 一同上、同第四句 仏のくにや一同上、979第四句 たてぬすかたに一同上、980詞 此身いかなるかたへかをばさりて……一同上、
 同第二・三句 まちけるしかのおはさして一同上、同第四・五句 おりはぬかたへゆはんとすらん一おもはぬ方へゆかんとすら
 ん、981詞……身のありさまにまかふ一同上、982初句 身のほとを一同上、983詞……のこりたるをよす一同上、984詞……念仏
 は一本ノ稿
 ○すれとも……同上、同第五句 となみしもする一となへしもする、985第三句 となふれば一となふれと、986詞……かくるに

本ノ塙
 よす一同上、987詞 思事のしたかふみなれば……一同上、988詞 極楽のかたはしにたちたにまいり……一同上、同詞……おほゆるなるを……一同上、同初句 いかにく○一同上、989詞 後世の事とも……一同上、同第四句 なきもたゆれと一同上、991第二句 せちりもすたも一同上、992詞 ……舟などに乗て○ゆらさるゝ……一同上、同第二句 あられかさきに一あられかさきに、993詞 ……女など○後の世のことなれと……一同上、同詞 ……ときくも思入○て……一同上、同第五句 このもしみ思ふ一同上、994詞 かみには真言の文字を○き○よめれば……一同上

恋部上

995詞 百首の歌中に……一同上、997詞 初逢恋一同上、1000第四句 今朝もしもしめる一同上、1001詞 過不逢恋一同上、1004第二句 ……のむとなみは一同上、1005第三句 かなしきは一同上、1007詞 ……□ひつかはしける(□稍々不明書体)一同上、1008作者をんな一本(本行ナルモ対校本ニヨル朱補入)一ナシ、1010第五句 袖もぬるらめ一同上、1011第三句 はむ駒も一同上、1012第二句 まをの秋はき一同上、同第三句 なくたくり一同上、同第五句 をくる君哉一同上、1013第二句 しつのためとに一同上、1015詞 夏□の心塙ナシ原本をよめる一夏恋の心を、1016詞 ……くせくし○なんたくひなきと……一同上、1017詞 ……はらたつと云る事をよめる一同上、同第二句 とかはにうえの一同上、1019初句 みなくゝる一同上、1021第四句 こやうらやみの一同上、1022第二・四句 うちさらしあくふるしほを一うちさゝしあらふる塩を、1025第二句 ふちのまるねは一同上、1026初句 文見ぬと一同上、第三句 うたれめの一こたれめの、1028第二句 さやたにたをる一同上、1029詞 恋催遠意を……一同上、1030第三句 あたへしを一同上、1031詞 ……とて○○○本ノ塙、1033第三句 あたりする一あさりする、第五句 人めもるらん一同上、1034初句 わひしとも一同上、同第四句 筆のをよはん一同上、1035詞 人のまつと……一同上、第三句 人まつと一同上、1036詞 ……御かへりもなきは……人の返しにつかはしける

一本ノ塙
 はんと云へる事を一同上、1105 第三句 ふききして一同上、同第五句 心ちこそせね一同上、1110 詞 ……こひ思ひありたまへとい
 へる……一同上、同第五句 思ひ出るに一同上、1116 詞 ……人にかはりてよめる一同上、1118 第四句 いもせをなへて一同上、1120 第
 二句 しけみにすくしけみにすたく
一本ノ塙

恋部下

1125 第二句 風なかれする一同上、1128 詞 思ち言一思不言、131 第五句 あさ衣とはあさ衣とは、132 初二句 しろしあれ竹のまろ
かさ一本ノ塙

ねは一同上、133 第五句 やつれてそをる一同上、134 第二句 涙にくつる一同上、同第四句 つかのまたにや一同上、135 詞 ……八条の
一本ノ塙

泉家にて……八条の泉家にて……、137 第二句 名をぬれきぬと一同上、140 第三句 みさ〇あるみさ〇ある、143 第二句
泉一本ノ塙

を〇ろにあたして一同上、144 第五句 いはれさりけり一同上、145 第二句 鶺鴒のすむ石に一同上、146 第四句 それにおもれる一同
一本ノ塙

上、150 初句 あさをきの一同上、同第三句 〇なふれととなふれと、152 初句 おろされて一同上、153 第五句 妻もさためし書
一本ノ塙

も定めし、154 第二句 かりほともなく一同上、157 詞 ……人のこのころ〇いかなる事にか…一同上、162 詞 ……そのかた〇に
一本ノ塙

女のきひといふ物ををきたり……とおほしくてかりこのつとひたる所を…一同上、同初句 君さつと(但シ万ノ誤写ノ
一本ノ塙

如シ)君まつと、同第二句 玉もの床の一同上、163 第二句 入江のあしの一同上、164 初二句 佗つゝもたのみたにせよ一同上、
一本ノ塙

同第四句 後世までと一同上、166 第二・三句 名こそそのせきはかるこふる一同上、173 第四句 あくともけさは一同上、175 初句 と
一本ノ塙

しふとも一同上、176 第四・五句 やはかけたるは日比へよとや一同上、177 第三・四句 もらしかへこまにかはねは一同上、179 第五
一本ノ塙

句 見まで悲しきみるそ悲き、181 第四句 たまききても一同上、182 第四句 にしきの袖は一同上、185 第五句 身をかはしつ
一本ノ塙

る一本ノ塙、1186詞 いやしきをい。ふ。いやしきをいとふ、1187第五句 おちさらめや。おちさらめやは、1188詞……六条の家にて
塙一本

……六条の家にて……、1189初句 はなくと。同上、同第四句 たへなきせなそ。たつなきせなそ、1191詞 障本夫恋。同

上、1192詞……つかうまつりける。同上、同初句 うちやまし。うらやまし、1196詞……人をうらむると……同上、1201第三句

しらとりも。同上、1202詞……くして恋の心を。同上、1208詞……経忠。八条の家……同上、1209詞……公有障恋と……同

上、同第四句 人のてまをも。人のてまをも、1211第三句 あし。音を。同上、1213第四句 きも身をとをる。同上、1215第三句 いへ

しかな。同上、1217第五句 なく。くらしつ。同上、1219第五句 見ゆなる物を。みゆなるものを、1221初句 こひすと。同上、1225詞

寄鳥毛恋……同上、同第二句 をくろわたてる。同上、1227詞……経忠。八条の……同上、1230詞……みちみくるしとしてし

はしたてと……をくり。侍ける。みちみくるしとしてしはしたてと……をくりける、同第五句 かたをしられは

かたをしらねは、1231第五句 宿もさためす。同上、1232詞……ある所をたつねけれと……同上、1238第二句 千種にかゝる。当

該歌欠、1242第四句 つるにえとけて。同上

以下、卷九・十の両巻は記した如くに、本書は別系統本に拠る補綴たるにつき省略する。但し、本書―葉山信果書写部分に
所見する本集本文以外の書入れにつき揭示し、江本との関聯の参考に供すると、

- 1 万云引哥 石見ノ海ウツタノ山ノ木ノマヨリ我フル袖ライモミツランカ 一本塙本 春部71 江本同、第一・二類本略同
 - 2 万云 アラタマノ末戸カ竹カキアメニユリモイモシニエナハ我コイメヤモ 一本塙本 夏部354 江本略同、第二類本略同
 - 3 万十一 天飛ヤ軽ノ社ノ齋槻イクヨアルヘキアタシマツリモ 一本及塙本 積教91 江本ナシ、第一類本及第二類本中、神A
- 志A 兩本ハ第三句以下ニ「齋槻云々」ノ句ヲ本行トス、他本ハ江本ト同シクシ書入レナシ、神A・志A本ヲ除キ、本文ハ、

あまとふやかりのやしるに身をなしていはひしつきのさかへてそみる

ト訂セラレ、以下第三・四類本本文トシテ定着スル

4万云 タマタレノコスノ寸鶏舌ニイリカヨヒキネタラチネノハ、カトハサハヤトカセトマウサン 一本堀本 恋部 1175 江本略

同、第一・二類本略同

の四項である。その3を除けば第二類本に共有する書入れであり、1・4は第一類本とも同じくし、本書が本文上に於て右に掲示した如く極めて特徴的に江本と相隣接すると同じく、これら書入れも又単なる移写によるものでないことが検証されるのである。右記の3は付註したごとく、第一類本・第二類本(イ)と同(ロ)系以下をわかたつ本文上の異同―恐らく他本に拠る改訂に於て惹起した残滓でもあろうか―の問題として対処すべき事柄と想定される。

註三 註二と同じく本書巻一〜八に所見する「原本云、」の校記箇処を掲示し、脚下に林羅山旧蔵本の本文を対比した。註三の場合、本書に付す、一本・堀本・野口本の付校も併掲し、所謂「原本」との異同比較の一端を表示することとした。又、羅山旧蔵本に於ても参考までに同書朱校を併記した。所掲本文中の△符は本書「原本」との異同部分である。

春部

108詞書(以下「詞ト略記ス」) 尋花^{超原本}越山―尋花^堀超山、110詞 ……さくらをみてよめる―…さくらをみて、112詞^{原本・ノナシ}かへし―欠、同

第四句 花さきて―花さきぬ、118第四句 いそしのみねを―いそしの峰に、123第二句 たをれとちらぬ―たをれはちらぬ、141第四句^{も原本}ひとりや苔の―ひとりや苔の、167作者 家綱(朱補) 一本・堀本マ、^{は原本}一本・堀本マ、^{一本・堀本マ、}

句 ひとりや苔の―ひとりや苔の、167作者 家綱(朱補) 一本・堀本マ、^{一本・堀本マ、}堀河院の御時…、184詞^{も原本}ナシ原本

加賀守頭輔のもとにて…―加賀守頭輔もとにて、189詞 ……旅中春暮と…―旅中春望と、192詞 ……心をよめる―心を、同^{も原本}一本・堀本マ、^{一本・堀本マ、}

第五句 春は暮ぬる―春も暮ぬる、^{も原本}一本・堀本マ、^{一本・堀本マ、}

夏部

196 初句 さくららたに—さくらら谷、250 詞 …… 連夜待郭公—…… 連夜○郭公、313 詞 夏日越関—夏日超関、370 詞 …… みな月はらへをよめる—…… みな月はらへをよめる

秋部

390 初句 あひ見ては—あひ見んは、396 第三句 おひにして—たひにして、403 詞 丹波前司重房……、411 詞 同

殿下にて…… 同殿にて……、412 詞 萩花靡風—萩露靡風、414 詞 …… 殿上人に秋花を……、416 第三句 む

つるれと—むつかれと、425 詞 松虫を—松虫、438 初句 露にさへ—露にたに、445 詞 …… きよてよめる—聞て、448 詞 夜深聞鹿—

夜深聞鹿、454 詞 鹿のこゑ嵐に…… 鹿のこゑ山嵐に……、480 詞 四条宮扇合に—四条宮扇合、494 第二句 あれまを分て—あしま

を分て、504 詞 …… 詠閑見日副隔一夜恋和歌……、詠閑見月制隔一夜恋和歌……、同序 …… 初雁のかきつらぬへき方には

かりの関の…… 初馬のかきつらぬへき方には、かり関の……、505 第五句 きのふ斗か—きなふはかりそ、508 詞 殿下にて五首

の哥…… 殿下にて五首哥……、512 第二句 ゆくゑしられし—ゆくへしらせし、525 詞 …… かはりてよめる—かはりて、565 第二

句 はなふく秋に—はなふく秋よ、567 詞 …… 九月尽を—九月尽

冬哥

572 詞 旅宿時雨…… 旅所時雨……、585 詞 …… 紅葉を—紅葉、588 詞 …… 旅宿落葉を…… 旅所落葉を、629 詞 山家嵐をよめる

—山家嵐をよめる、645 詞 水門水鳥—水門水鳥、651 詞 水満池といへるを—水満池といへる、同初句 今日よりは—今朝よりは

祝部

699 第三句 祝つる—祝つゝ、701 第三句 みたらの—みたかくの、707 第四句 あそふも君か—あかふも君か

か一本・増本ノ、

か一本・増本ノ、

か一本・増本ノ、

か一本・増本ノ、

か一本・増本ノ、

か一本・増本ノ、

か一本・増本ノ、

別離原本ナシ之部(之部朱補)―別離
一本アリ

749 詞 …… 思たちける人の…… 思たちける人に……
に原本
一本・増本ノ

悲歎部

785 第三句 まとへとも―まとへとも、789 詞 …… むかし思出らるゝ事ありて…… むかし思はるゝ事有て……、792 第五句 しらね
よ原本
一本・増本ノ △
をそする―しくねをそする、838 詞 昔のあまうへにをくれ…… 昔あまうへにをくれ……、845 第五句 朽はてぬらん―朽はて
ナシ原本
一本・増本ノ
ぬらん △
捨原本
一本・増本ノ

神祇

858 詞 …… 陰家と云ことをよめる―… 陰家と云ことをよめる、860 詞 …… この社は神の社に…… この社は神の社
陰原本 藍
一本・増本ノ

積教部(部朱補)―積教
ナシ原本
一本・増本アリ

872 詞 …… 心をよめる―… 心を、878 詞 …… 心をよめる―… 心を
ナシ原本
一本・増本アリ

恋部上

1015 詞 …… 心をよめる―… 心を、1066 第三句 葛なれや―葛なれや、1071 詞 …… 心をよめる―… 心を
ナシ原本
一本・増本ナシ 菊原本ノ
一本・増本ノ △ ナシ原本
一本・増本アリ

恋部下

1153 第五 妻もさためし―書もさためし
書原本
一本・増本ノ

以上が「原本」と付記する処のほとすべてである。付言するまでもないが、「原本」本文は、上掲本文に見るかぎり羅山旧藏本本文と略一致し、「二本」、「増本」とは別類をなす系類たることを又提示していることが判る。

註四 本書―信果本本文―に散見するイ本校合は次の如くである。すでに依拠本文中に存したのであろう。掲示本文の許に、内閣文庫林羅山旧蔵本（江本）を対照した。―兩本に於ける漢字・仮名、仮名遣の小異は省略する―

春部

39 第四・五句 消ぬやゝかて春のはつ花イ きゆるそ春のしるしなりける―同上、41 第四句 新後撰をとほのイをとほの集 をはつせ山の―をばつせ山の

夏部

245 初句 たい(朱) これきかん―同上、252 初句 千なとてかく、千なとてかくイ、いかてイ さしもなそ―さしもなそ、303 第五句 たい(朱) をちかへりけれ―た敷 をちかへりけれ、314 第五句 夜は更ぬらし―同上、349 初句 柴の庵―をイ(朱) 柴の庵を、

秋部

409 第二句 そイ 萩の末こす―萩の末こす、419 初句 イ本み まくまのに―まくまのに

冬部

579 第五句 もみちイ 木の葉成けり―木の葉成けり

神祇

861 作者ゆりはなイ―ゆりはなイ（朱）

恋部下

1217 第五句 きんこイ(朱) なくてくらしつ―同上、1223 第五句 とイ(朱) たまらさりけり―同上

等を瞥見するにとどまる。上掲のごとくイ本校記は兩本相互に異同を見出すのであるが、39・41・245・252・314・861・1217・1223に所見する主要校記に於ては同じくし、同一系本上の移写として辿りうるものではなからうか。

註五 卷九・十兩卷にも、「原本云々」、「塙」本の校合を傍記している。卷一〜八に併せ掲出することにする。

雑之部上

1244 詞 おもふ事ありけるころよめる、^{ナシ原本} 1245 第二句 かはりぬ袖を、^{か塙} 1253 第二句 みなさはかまく、^{はさ塙} 1267 第二句 しはしまぎれよ、^{た原本} 1279 第
 四句 あそのみをきに、^{池塙} 1284 第五句 くゝのはしる也、^{ち塙} 1290 詞 おひぬることをなげきて、^{く原本} 1321 歌 本書欠、上欄ニ「塙本ニモ空行アリ」朱
 書、^{五塙} 1325 詞 四位して……、^{塙アリ} 1330 第二句 君かをしまに、^{さ塙} 1347 第二句 あふそま川の、^{く塙} 1348 詞 まへのすひつにすることもなくて……、^{か原本} 1353 第
 三句 ころかへて、^{ち(朱訂)} 1355 第二句 ますけのかゝみ、^{み塙} 1361 詞 ……つるとなんいふと申を聞て……、^{申塙} 1369 詞 ……梅花貝といふものや……
 1376 詞 ……つみなとして……、^{ナシ塙} 1383 第四句 ○於期も首を、^{塙本空欠} 1384 第四句 くるしき跡を、^{海塙} 1398 詞 ……まいらんすらんとまたれけるに……
 ……、^{又原本} 1409 第二句 こえさらましは、^{か塙} 1414 第三句 松竹は、^{の塙} 1415 詞 ものへまかりける道に……、^{又原本} 1416 詞 ……鏡をか布施に……、^{ナシ塙} 1439 初句 しみ
 つ山、^{原本} 1445 第三句 たくへて塙、^{た塙} 1459 第二句 忍ひかたきに、^{さ原本} 1485 初句 のかれはへし、^{て塙} 1492 第二句 今もこんよの、^{又原本} 1494 第五句 ねはなか
 れける、^{れ塙}

雑之部下

1518 長歌 心こそはぬ、^{も塙} 1519 長歌 きたゝみを、^{く塙} 同しをれ思ひに、^{け塙} 同跡そねかへる、^{り原本} 1521 第五句 みやはきよむる、^{え塙} 1539 第四句 なこりな
 るらん、^{る原本} 1546 第二句 たおりめしてよ、^{を塙} 1549 第五句 恋しき○なぞ、^{や塙} 1550 第四句 きくのはなにの、^{わ原} 1554 詞 ……はまくりにしをと……、^{せ塙}
 1567 初句 あかしには、^{る原} 1571 和句詞 ……むかひあられて……、^{ナシ塙} 1574 唱句詞 ……人くへしときとけれと……、^{こえ塙} 1575 和句 しかへしそき
 に、^{み塙} 1582 唱句 すみのひならめ、^{え塙} 1583 唱句 詞 ……別当法印元清か……(光一本ハ塙イ本歟)、^{光一} 同和句詞 元清しきりに……、^{光原} 1584 唱句 詞
 ……みそかに申けるを……、^{ナシ塙} 1586 和句 はななるへき、^{へ塙一本} 1590 唱句 欠、上欄ニ「塙本亦一行空欠」と朱書、^塙 1594 唱句 詞 ……といふも
 のゝおほるゝを……、^{ナシ塙} 1596 和句 詞 きなる□りを……(□字不明瞭)、^{う塙} 1598 唱句 詞 ……ほとなくをと○せすと……、^{も塙} 同唱句 こととし
 1608 唱句 詞 ……くゝつしきむかまゝして……、^{う塙} 1608 和句 欠、上欄ニ「つくくゝつまはしはまはりきてをり」ト朱書、^{原本} 1609 唱句
 塙

詞……ひへかへのうしの……、同詞……程にかたはしさまに、ら原本 1619 唱句 あそひなる

註六 群書類従本の当該箇処は、

大式長実卿白川の家にて郭公をよめる

続古

をとせぬは待人からかほととぎす誰おしへけん数ならぬ身を 263

ほととぎす鳴うれしさをつゝめとも袖には声もとまらざりけり 265

左京大夫経忠の八条の家にてよめる

ほととぎす声待かねてゆふけとふ道のうらにもことよきものを 264

ならの歌合に人にかはりて郭公不之といふ事を

今こそはふたむら山のほととぎす声をはへてあやになくなれ 266

となつてゐる。因みに、265歌は「天治元年春」権僧正永縁花林院歌合 郭公 一番右 中納言君（教縁）歌として提出さ

れている。もつとも甲本廿卷本には、下句を「空には声もとまらざりけり」と相違するが、乙本書陵部本とは全く一致する――

平安朝歌合大成六一。孫教縁に代つての俊頼の代詠であろう。同書「副文献資料」中の補6に右記266詞書・歌を挙げているが

群書類従本本文であり、類従本系――間宮永好校合本・萩原宗固本等――の誤りであろう。

村上家蔵野口道直旧蔵本 春部～冬部〔江戸中期〕写・祝部～雑部下〔江戸後期〕写・

顕昭註〔江戸後期（末）〕写 存十卷付註

本書は夙に築瀬一雄氏による詳密なる御紹介がある。註一重ねて此処に縷述するまでもないが、前掲解題の論旨に沿い併せ言及することにする。

袋綴、取合せ本五冊。茶褐色刷毛引改装表紙、竪二十六・五糎、横十九糎。料紙は上記書写年代別に稍々紙様を異にするが、共に楮紙である。字面高サ約二十一・八糎（歌本文）―但し、取合せ各本毎に多少の相違あり―。和歌一行書き、詞書、卷一〜四 二字下げ、卷五〜十 三字下げ、同註 二字下げ、每半葉、卷一〜十各十二行、同註十行。

本書は、上記したごとく三種の手跡よりなる取合せ本であり、第一冊 春部・夏部、第二冊 秋部・冬部（以上同筆、第一手跡）・祝部・別離・羈旅部、第三冊 悲歎部・神祇部・釈教部・恋部上、第四冊 恋部下・雑部上、第五冊 雑部下（以上第二冊祝部以下同筆、第二手跡）・顯昭注（第三手跡）、となっている。別本三種を合綴に際し現在のごとくに装訂されたのであろう。

各本の書写年代は前掲葉山信果本に村上忠順が本書を以て藍色筆校合を施しているが、その雑之部下巻尾に、

嘉永四年辛亥四月十二日尾張国琵琶島野口道直本校合了道直通称青物問屋市兵衛此書入野口本四季部帛モ書モ一

様ニノ百年前ノモノトミユ祝部以下ハ帛新シク書モ劣レリ顯昭注一卷ハ帛四季部ニ似タレト今少シ後ナルヘシ書

モ別人ニノイタク劣レリ終ニ文禄三年四月廿七日写之顯昭親筆之本也○寛文十歳庚戌卯月十日書写我足軒トア

リ／文禄三年ヨリ今茲嘉永四年マテ二百五十七年○寛文庚戌ヨリ嘉永庚戌マテ百八十一年也

と、忠順特有な謹細な書風にて追記している。これに対し、築瀬氏は上掲の忠順の記を踏えながらに、「私見によれば、第一筆（巻四まで）が古く、近世初期慶安・承応のころ、第二筆（註の部）は奥書通り寛文十年（一六七〇）、第五卷乃至第十卷はずっと下つて、文化か文政になつてからのもの」と推定され、「既存四卷分と註に対して、第五卷乃至第十卷を補写せしめたのは、古書肆であつたかと思ふ」と本書の取合せに至る詳細な経過を辿られておられる。しかし、敢て殊更に異を立てるといふのではないが、本書繙閲の折の印象としては、忠順追記の見解に近く、第一手

跡四巻が本書の中では最も古く江戸中期頃、第二手跡六巻は稍々下り江戸後期に入り、第三手跡同註は更に降る頃、文化・文政頃かとの感が残り、顕昭註奥書の後に誌す「寛文十歳庚戌卯月十日書写 我足軒」の記は本奥書かと思われるのである。再び披閲の機を得て検討することにした。

旧蔵者野口道直については寡聞にして殆んど知るところではないが、国書総目録によれば文政（註一）嘉永年間に、新続群書類従目録・汲古堂蔵書目六国史・六国史撮記等の編者と誌す其人であろう。

外題、表紙左肩に「散木集 一（〜五附録顕昭注）」と後補打付書する。第一冊遊紙裏右隅に「俊頼朝臣家集也」と第一手跡にて墨書している。

内題、「散木奇歌集第一（〜十）」、但し「顕昭注」は内題を欠く。各部立は前記のごとくである。

奥書は本集には見えず、「顕昭註」の巻尾に

本云 寿永二年十月七日奉

梁園國イ教命注進之

重下給差声 顕昭

文祿三年四月廿七日写之顕昭親筆之本也（同三十三丁オ）

寛文十歳庚戌卯月十日書写 我足軒（同ウ）

と、同註奥書に加え、同裏の書脳近くに我足軒の奥書を誌している。

各冊丁数は、第一冊 三十七丁―内巻一―二十一丁、巻二 十六丁―、第二冊 四十四丁―巻三 二十一丁、巻四 十一丁、巻五 十二丁―、第三冊 四十一丁―巻六 二十八丁、巻七 十三丁―、第四冊 三十七丁―巻八 十二丁、

卷九 二十五丁―、第五冊 五十五丁―卷十二丁、同註三十三丁―。

印記 各冊第一葉に、「村上文庫」(重郭方形朱印)、「幡」(重郭円朱印、野口道直印)を捺している。

以上、本書、取合せ本の書誌概要であるが、その本文処理に当っては、築瀬氏が既に対処されたごとくに、当然の事ながら、巻一―四本文と巻五―十のそれとは各々別して措置することにする。「顕昭註」については別稿を考慮しているので省略することにする。

偕、本書春部―冬部の本文に於ける顕著な異同・排列・異文等を見るに、本集第二類本中、就中神宮文庫A本系に極めて近似する。従って同本解題に掲示した異同表(一)・(二)(七四頁以下参照)により対照することにした。以下、同表番号に拠り、本書本文の欠落箇処を示し、その許に神宮文庫A本系本文の存否を対比し、併せて、第二類本の松平忠房旧蔵本・林羅山旧蔵本に於ける有無も付記することにする。

(一)―1 (112詞書)―神A・志A本欠、忠・江本欠、同―2 (187左注)―神A・志A本欠、忠・江本細補、同―3 (188左注)―神A・志A本欠、忠・江本細補、同―4 (194詞書尾・同歌下句)―神A・志A本欠、忠・江本存、同―5 (236歌下句)―神A・志A本欠、忠本欠・江本朱補、同―8 (463詞書一部)―神A・志A本欠、忠・江本欠、同―9 (504詞書一部)―神A・志A本欠、忠・江本存、同―10 (538詞書)―神A・志A本欠、忠本欠、江本朱補、同―11 (658作者)―神A・志A本欠、忠・江本欠

以上、巻四迄の(一)の十二例中九例は神宮文庫A本系とその異同は特異的な一致を見出し、両本の親近関係は否定しがたいといえる。次いで羅山旧蔵本系が隣接しているのである。神宮文庫A本系との相違箇処は、

皇后宮権大夫師時の八条家にて水風晩涼といへることをよめる 夏部312詞書 傍点部分神A・志A本欠、忠・江本存
秋きては忍ひあへそとおもへはや風おとつれて暮かゝるらん 秋部372歌 神A・志A本欠、忠・江本存

衣手金の寒行まゝに神しもとゆふかつらぎなひのみむろの山に雪はふりつゝ 冬部667歌 神A・志A本欠、忠・江本存

の三例である。本書と共に羅山旧蔵本系に所見される本文である。同本系との関聯も又暗示される。

次に、本書に所見する異文を同じく神宮文庫A本系表(二)と対照すると、

(二)―2 (秋部388歌第二・三句)―神A・志A本同、忠・江本同、同―3 (同403詞)―神A・志A本同、忠・江本同

と、三例中二例を同じくし、第二類本諸本の特徴をなしている。異なる一例は、神宮文庫A本に見る、(二)―1の
ならの哥合に人にかはりてほとゝきすをよめる

墻たかねたか郭たか公たか 夏部216詞書―傍点部分本書・忠・江本ナシ

とある紛錯本文である。この点では羅山旧蔵本系と同一である。

又、築瀬氏の揭示された異同表中、各句本文中、(二)245初句「これたいきかん」―イ校忠・江本存・神A本ナシ、(三)320初句「あちかつさるの」―忠・江本同、神A「あちかさるの」、と二例を相違するにすぎず、第二類本系の本文を共有している。

更に、右記本文とは別に、第一類本契沖書写本以下に見出された万葉引歌の書入れであるが、神宮文庫A本系は本行ひら仮名交りに書写されているのに対し(七七頁参照)、本書は片仮名交り付注のかたちをとっている。即ち、

万ニ引哥 石見ノウミウツタノ山ノコノマヨリワカフルソテライモミツランカ 春部71

万云 アラタマノストノカ竹(江本)・サカキア(同上)・メニヨリソノイモシモ(同上)・エスハワカコヒメヤモミヘ(同上)・夏部354レ(同上)・ハハ(同上)

と書入れられ、羅山旧蔵本系と略同じくしている。本書卷一―四の特異本文を比較された築瀬氏は、「比較的近いものは昌平坂本(私云林羅山旧蔵本)である」と述べられているのも如上の異同からみて首肯されるのである。しかし、

又一方、羅山本解題に於て神宮文庫A本系との比較を参照すれば、やはり本書卷一―四の本文は同本系に隣接し、次

いで羅山旧蔵本系と近似関聯する残巻本といえるのではなからうかと思われるのである。

次に、その当該部歌序・排列は、

(一)夏部 223・224・225・228・229・226・227・230、(二)同部 263・265・264・266

の二例である。第二類本は神宮文庫A本系の錯簡を除けば上掲諸本は共に同じくするが、既述した如く本書と異るのは、(一)前半 223・224・225の歌順である―(二)は勿論共通している―。本書も同類系と想定されるところから如何なる經由にて、かかる排列が生じたのか判明しがたい。たゞし、この前半部分の排列は第四類系統本―宗固本・類従本・永好本等―に見出されるのが参考されるが、しかし後半をそれと異にしている。所掲二類本では本書のみに所見されるのであるが、当該箇処に―223く230―於ける排列は、第三・四類本に於ても、その揺れは目立ち各伝存本の中に変様し、なか／＼に定着しがたい理由も存したのである。本書の場合も、その変位の一端をとどめているのであろう。

本書後半、第二手跡に当る巻五く十の本文につき観てゆくことにする。

まず初めに、当該巻に所見する錯綴と重複本文につき誌す。

乱丁は巻七恋部上六丁裏終行は、¹⁰⁶²詞書「人恋我」にて終り、次葉七丁表初行は、¹⁰⁷⁰歌「とかりするさつをのゆつる云々」から書写され同裏終行に、¹⁰⁷⁹詞書「人の許に文つかはしたりける返事をせさりければつかはしける」を書き、次の八丁表に、六丁裏終行の¹⁰⁶²詞書を受け、同歌の「朽ぬらん袖そゆかしきわかこまの云々」を書繼いでいる。

八丁裏終行は七丁表初行の¹⁰⁷⁰歌の詞書「恋の心をよめる」をもって終る。即ち、現七・八丁の綴誤りである。

又、重複本文は、別離739歌を、

返し

女郎花うれしきなみたおちそひて露けかるへき旅のみち哉

返し

女郎花うれしきなみたおちそひて露けかるへき旅のみち哉

又、恋部下 1167 歌を

人のかりつかはしける

いまそしる人恋る身のかなしきは涙の袖のくつるなりけり

人のかりつかはしける

いまそしる人恋る身のかなしきはなみたに袖のくつるなりけり

又、同部 1214 詞書

寄山恋

寄山恋

と三箇処にわたり重ねて書写している。

偕、例に倣い本書の顕著な異同本文と他本との関聯を築瀬氏の論証事例を斟酌しながらに概観してゆくことにしたい。その欠落本文については書陵部 A 本本文を以って揭示することにする。

1 加賀守 別離 741 作者 神 A・志 A 本欠、神 B 本欠、岸・初・蘆本細補（他本校合本文、以下同）

2 経盛兼 同 746 作者 神 A・志 A・忠・江本欠、神 B 本欠、岸・初・蘆本細補

3 むろすみやかまとを過る舟なれば物をおもふに
こかれてそゆく（書 A 本）
悲歎部 798 歌 他本存

- 4 例ならぬ人の舟にあるかくるしかると聞てそひ船にのせうつすをきゝて(書A本) 同部810詞書 神A・志A・忠本傍記本
 文欠、江本朱補、神B本欠、岸・初・蘆本細補
- 5 難思光仏
 人はいさひかりのすちをしかそともおなしほとけやしらはしるらん 釈教部892 神B本欠、岸・初・蘆本細補、神
 A・志A・忠本ハ歌ノミ欠、江本歌朱補
- 6 九品往生経文十二光仏
 なにゝかはかけてもほとをしるすへきあふはかりなきひかりと思へは 同部927詞書・歌 他本存
- 7 仏の御身の色こかねの山のことしといへることをよめる 同部945詞書・歌 他本存
 しくれつゝ色つく山のこのまよりいつるひかけによそへてそみる
- 8 おんな 恋部上1008作者 神A・志A・忠・江本欠、神B・蘆本欠、岸・初本細補
- 9 みつきといふはつくしのふのかとてなり 同部1039左注 神A・志A・忠本欠、江本朱補、神B・初・蘆本欠、岸本朱補
 10 かへし
- 11 いはくゝる滝のうはへはこほるともとゝろきおらん程はたえせし 同部1047詞書・歌 他本存
 あさましやこはなにことのさまそとよこひせよとてもむまれさりけり 恋部下1136歌 神A・志A・忠本欠、江本
 朱補、神B・初本欠、岸・蘆本細補
- 12 海路恋 同部1160詞書 神A・志A・忠・江本欠、神B・初・蘆本欠、岸本細補
- 13 あさゆふにつたふいたゝのはしなればけたさへたえてたちろきにけり

懐旧 雑部上 1254 歌・1255 詞書 他本存、但し岸本 1255 詞書・歌細補

14 阿闍梨 同部 1304 者 信・岸・初・蘆本欠

15 ちきりしことゝもをわすれにけるにやことさまに思ふなり
にけるときこゆる人のかりつかはしける(書A本)
雑部上 1379

詞書 蘆本傍記本文欠

16 ふししはにやとれるほとやをのれのみときは
かきは(書A本)に物をこそ思へ
同 1446 歌 蘆本傍記本文欠

17 刑部卿政長の八条にて人／＼あつまりて長哥の会せられけるに初冬述懐といへる事をよめる

^{新勅}山さとは冬こそことになしけれみねふきまよふこからしの 以下省略

返哥

いくかへりをきふしゝてか冬のよの鳥のはつねをきゝそめつらん

旋頭歌

中納言通俊のかつらの山里にて人／＼旋頭哥に恋の心をよせてよまれけるによめる

^{新勅}つれなきを思ひあかしのうらみつゝあまのいさりにたくもの煙おもかけにたつ

百首哥中に無常の心をよめる

あすからはうきゝにつもるあはゆきのなみたちくれはたのもしけなき世にもあるかな 雑部下 1522 詞書・歌

歌 1525 (同部四丁表八行ト九行ノ間、約一丁分) 他本存

18 しもつけ

うらみてもなにゝかはせん花みるとけさしもつけぬ心せはさは 同部 1541 詞書・歌 初・蘆本欠

19 ……(前略)……うといふとりとさきといふとりとゐたりけるをくしたりける(書A本)六波羅別当といふ僧の申たりけ

る 同部 1576 詞書 初・蘆庵傍記本文欠

以上、略十九例が所見される、きわだたしい本書欠落本文―書陵部A本に対する―である。就中、3・6・7・10・13・17、の六例は本集伝存本に見ぬ欠如―寧ろ脱漏―本文であり、伝本系類上、その類別を拒む特異な様相をとどめてゐる。

又、脚註した第二類本系主要四本―八卷本―と第三類系四本―但し蘆庵本六本相互異同あり、今一本による―との有無を観るに、本書と両類本系との相互関係は、両類との間に多少の異同を残しながらも、その過半は共通し、両類本系との関聯の深き跡を示すものであるのは否定しがたい。卷九・十の両巻は上掲第二類本欠卷たるにより、当然第三類本系に共通するが、なかでも蘆庵本・初雁本と同じくし、その親近関係が窺われるのである。

しかし、此処で注意されるのは、本書と第二類本系との―卷五―八の間―類同性は上掲例にかぎる点であり、既述の第二類本系諸本に屢々例示した異同・欠落本文例を参照いただければ、その差異は明著であり、本書後半部は第二類本系本文とは上記の相互関係を示しながらに同類本系一本と看做しがたいのである。その点より観れば寧ろ第三類本系―就中、蘆庵本・初雁本―に近似するといえるのではなからうか。

本書当該部の語句上の検討は既に築瀬氏の御論考註四の中になされておられるが、私なりの諸本校合の結果からも第三類本系の初雁本・蘆庵本とは可成り特徴的に共有し、基本的にはこの系類上の一異伝本と目してよいのではないかと思われるのである。―もつとも第三類本との相違も尠ならず、その著しき例を別註註五したので参照されたい。―いづれ同類解題にて縷述することとなるので煩を避け省筆するが、類似する蘆庵本も第九・十両巻は他本に拠る合綴本で

あり、一系類上の完本として対処しがたい。敢て臆説すれば、この三類本系は、上掲第二類本の異系統八巻本を基底として更に巻九・十を別本補綴したものであり、その間に第一・二類本系の本文の混入―補・訂等―のごとき経由が想像されるのである。従って、本書のごときは明瞭なる脱漏本文・錯誤排列（後述）等をのぞけば、第三類本同様な複雑な経過を辿ったと想像されるところの、同類に所属する異伝一本と重ねて想定されるのである。

又、些事ながら当該部に施す各集集付も蘆庵本のそれと概ね共有し、その源を同じくするのであろう。築瀬氏は同論考に於て、多角的な検討の結果、

道直本と完全に一致する伝本が存しないことが明らかとなつた。そこで、小異を捨てて大同を取る立場に立てば、小沢蘆庵本・岸本由豆流旧蔵本・村井古巖献納異本（私云神宮文庫B本）の一群に近いものと云ひ得るやうである。と推論されている。然るべき妥当なる見解と思われる。私に云う、初雁文庫本を含む第三類本である。

以上、本書当該部の歌序・排列の異同を記すにさきだち結語することとなつたので、終尾にそれを掲示し併せ参照に供する。

(一) 釈教部

智恵光仏

千釈教
わひ人のこゝろのうちそよそなからしるやさとの光なるらん 891

不断光仏

ちかひ置てみちひく人のひまなさに光もたえぬ物にそありける 890

(二) 雑部上

あさましやあはれうき世を忍ひつゝなにとまかよふ我みなるらん 1450

世中を思ひはなてははなちとりとひたちぬへき心ちこそすれ 1447

の二例を所見するにとどまる。(一)の排列は第一・二・三類本系諸本すべて同じくし、第四類本系との異同歌順であるのに対し、(二)は管見する本集伝存本すべてに同排列をみず、本書独自の歌序である。該部は「恨躬恥運雜哥百首」のなかにおかれ、その歌序の変位は積極的反証もないが、同排列の皆無なることから、その起因するところを明らかにしたい。

猶、本書には、前半部(巻一〜四)、後半部(巻五〜十)共に、ままた朱筆の一・二字の補訂校合が散見される。

註一・三・四 築瀬一雄氏「散木奇歌集野口道直本について」 国語と国文学 昭和四十三年十一月

註二 そのほかに、尾張高名家居所案内・小治田之真清水(嘉永六)・尾張名所図会(弘化元年)等の編著が誌されている。

註五 第三類本掲出四本も又相互に異同を見出すのであるが、なかでも本書に近い蘆庵本本文に拠って対照することにする。更に蘆庵本も転写数本を教え、且つ相互に異同が見出され、その原本は猶確認しがたいが、国学院大学附属図書館蔵本、奥書に云う蘆庵令写校合本を以て掲示本文とする。

1 堀川院の御時中宮はしめて堀川の内裏にまいらせ給ひけるにて松契遯年といへることをよませ給(蘆本青校合)よめる 祝部693詞書 本書傍記本文本行存、傍記「青」ハ同

奥書云「青私所書加也」トアル校異本文ニシテ原本文トハ認メズ、以下同。

2 藤戸といふ所にてとル(ル、類従本校合) 追風吹なんとすまた日も高しとてよらて過ければよめる(蘆本、朱校合)よめる 懸旅部769詞書 本書朱書入本文

本行存、傍記「朱」ハ同奥書云「朱如元本」トアル「元本」ノ校合付記トシテ、所謂原本本文トハ認メズ、以下同。

3 うちへてたのむみやまの青つゝらくるしみなきは我ひとりかは(蘆本、余白ニ朱書入)

授記品のこゝろを

積教部876歌・877詞書 本書朱書入本文本行存、余白ハ875・877両歌行間。

4. そのほとゝおもひかたきはよもの海にそこひもしらぬ心なりけり(蘆本、細字朱書入) 同部936歌 本書朱書入本文本行存、蘆本ハ936詞書ノ次一

行空白ニシテ、空白行ニ細字朱書シテイル。

5. もろくの花くさくさに咲みたるといへる事をよめる(蘆本、余白朱書入) イ此詞哥ともイニナン(同、青校合)

そこはくの花のひもとく庭の面におしのけたるは蓮なりけり(蘆本、細字朱書入) 同部958詞書・歌 本書朱書入本文本行存、青校合ナシ、蘆本

957詞書ノ次一行空白、細字朱書。

等がその主なる処である。掲出本文の脚下に付注したごとく蘆庵本に見る朱・青筆の傍記又は余白書入本文は、孰れも原本本文には存せず、蘆庵校合本文(青)か、奥書に云う「元本」校合本文(朱)であり、所謂原本なるものには其等を欠いていたと判断される。細部にわたれば夥多に及ぶ。又、留意されるのは、第一類本系に於て所見する契沖自筆本朱校合とその転写本に於ける本行本文文化である。蘆庵依拠「元本」あるいは更に遡る時期に上掲のごとき校合本文が本行本文文化すれば本書本文のごときに変様する可能性も存し、検証は困難にしても又一方的に否認しがたいのである。

築瀬一雄氏蔵 明治四十五年長岡興家写 存卷一ノ三・卷八ノ十

袋綴、合二冊。斐紙仮綴表紙、 縦三十・三糎、横二十一・三糎。料紙・楮紙。字面高サ約二十一・四糎(歌本文)。

和歌一行書き、詞書略三字下げに書写する。本文墨付、上冊六十六丁―春部 二十二丁(扉一丁ヲ含ム)、夏部 十九丁(同上)、秋部 二十五丁(同上)―、下冊七十二丁―恋部下 十四丁(同上)、雑部上 二十九丁(同上)、雑部下 二十八丁(同上)。―但し、上冊春部14歌より21詞書まで(二丁裏三丁表ニ当ル)筆写者による書落しがある―

本書は元来十卷十冊仕立であったのであろう、外題は「散木集 俊頼家集一」、「散木集 二(三)」、「散木集 八(十

終」と現扉左肩に本文と同筆打書きしている。現存中冊巻四から巻七部分を逸している。

内題、「散木弃歌集第一（〜三） 春部（〜秋部）」（上冊）、「散木弃歌集第八（〜十） 恋部下（〜雑部下）」（下冊）と記している。但し、巻二「歌」を「詞」に作る。

奥書は、下冊巻末（雑部下）に

明治四十五年五月写之 長岡興家

八十一翁

と書写年次を記している。筆写者長岡某については寡聞にして審らかにしない。

本書は次述するように、その本文の異同状況よりみて第二類本系類の中に措置するのは困難のようである。しかし、又、他類によって本書を規定することも出来がたい。いわば稍々中間的とでも云うべき位相を示す伝本である。しかも巻四〜七の中冊部分に当る四巻を逸しているので更に検証しがたきものとしている。敢て本文校勘の結果から概略すれば、上冊巻一〜三・下冊巻八の四巻は八卷本系類の補訂本文上に、その経緯は辿られるかと推測され、下冊巻九・十の両巻は第一類契沖補綴本の転写補訂本系の本文が予想されるのである。もつとも、第三類本系に於ける両巻も第一類契沖補綴本と相交錯し、本文上の決定的な異同を示すことは尠く一例えば、蘆庵本のごときも契沖本を以って朱校する該両巻に於ては、その差異は他巻に比し僅少である一、寧ろ当該両巻にかぎり同一系類と見做すことも可能である。いづれ第三類本系諸本解題にて詳記することとなるが、第三類本は第二類八卷本系上の稍々異系本文と、第一・二類系に見る補綴両巻―巻九・十―の混態として把握し得るのではないかと推測されるのである。それはさて置き、ともかくも、本書両巻の場合も、本文相互の類同性よりすれば、第一類本系大野広城校合本に近似し、次いで第三類本系初

雁文庫本・蘆庵本の両本が相接する位地におかれるかと思われるのである。

従って、以下本書本文の検討も、卷一〜三・八、卷九・十の両部にわけてすすめることにする。

例に倣い、本書前半の欠落本文―書陵部A本に対する―を揭示することにする。

1 返 春部112作者 神A・志A・忠・江本欠、蘆本存

2 同部187・188左注、両首間余白に細書する。

はしかきにさとをはかれすとかけり 187

おくにあまのをふねともかけり 188 神A・志A本欠、忠・江本細書同、蘆本当該部細補（他本校合本文、以下同）

3 同所にてとふ人もなきたひの すみかに霧ふりふたかりて（書A本） いふせかりけるに都の人うらめしかりければ 秋部463

詞書 神A・志A・忠・江本傍記欠、蘆本同細補

4 あさましやこはなにことのさまそとよこひせよとてもむまれさりけり 恋部下1136歌 神A・志A・忠本欠、江本朱

補、蘆本同細補

5 海路恋 同部1160詞書 神A・志A・忠・江本欠、蘆本欠

と顕著な異同例は僅か五例を所見するにとどまる。参考までに第三類本系蘆庵本の有無を付記したが、纔かに1の詞書の存否にすぎず、上掲例にては孰れの系類に属すべきとも定めがたい。

ひとまず、第二類本に目を転じ、林羅山本を以って本書との異同著しきを比較すると、

イ いへはけにはなのみふねとみえつるは君か千とせをつめるなりけり 春部102歌 江本朱補本文、本書存、蘆本存

ロ もろとも今そなくなる時鳥『八声の鳥はおのか妻かは』 夏部236下句 『圈内江本朱補本文、本書存、蘆本

墨本行、斯蘆・京蘆本朱補、穂蘆本細字朱補シ「無本」ト記ス

ハ 返し

人はいさ我はよひより相坂のゆうつけ鳥の音をのみそ鳴 同部259詞書・歌 本書本文、江本欠、蘆本存

ニ 秋の山の月をみるといへる事をよめる 秋部538詞書 江本朱補本文、本書存、蘆本細補(他本校合本文)

ホ 田上の南の山にて椎ひろひけるついでに『紅葉を折てきたりけるをみてよめる』(もて脱敷) 秋部558詞書 『圈内江本

朱補本文、本書存、蘆本存

へ 浅からず思へはこそはほのめかせほりかねの井のつゝましき身を

大式長実の八条の家にて恋の心を 恋部下 1202 歌・1203 詞書 江本朱補本文、本書存、蘆本存

ト 紅のそてにはつれしまみよりもなれかつりのわづけをそ思ふ

修理大夫顕季の六条にて恋不知ほとゝいへる事をよめる 同部 1227 歌・1228 詞 本書本文、江本欠、蘆本存

チ 山川の千種井杭にかゝるしら露波のゆく衛もしらぬ恋もする哉 同部 1238 歌 本書本文 江本欠、蘆本存

と、その異同は八例にわたり、しかも極めて顕著である。上掲例にかぎれば、蘆庵本は一乃至二例―ロ・ニ例―を除き本書と略一致し、寧ろ第三類本系類本上の一伝本として想定されるのである。

其処で、繁縷にわたるが本書と蘆庵本「国学院蘆庵令写本」と対照することにする。

a 伊勢に侍りける比いつきの宮にて白馬あをるひくをみてよめる 春部37詞書 傍点部分本書・江本ナシ

b 東北院の花さかりなりと聞て人／＼あまたくしてまかりたりけるに梅の花もさかりにておもしろかりけるに鶯人過人にければよめる(朱) けるに立とまりて侍りけるに人、はすきにければよめる(青) をとつれて過かたかりければよめる 同部51詞書 傍記(朱)・(青)ハ蘆本奥書云「朱如元本、青私所書加也」トア

ル校合本文デアル、以下同。本書・江本ハ

東北院の花さかりなりと聞て人／＼あまたくしてまかりたりけるに梅花もさかりにておもしろかりけるにうく
ひすをとつれて過かたかりければ立とまりて侍けるに人／＼はすきにければよめる

トアリ、蘆本青筆傍記ヲ本書・江本ハ本行本文トシ相違ス

c 大弑 同部112作者 本書・江本存、蘆本欠

d 帰鳥のこゝろをよめる 同部152詞書 本書・江本ハ、

百首歌中にかへる鳥の心をよめる

e 家隆綱(朱) 同部167作者 本書・江本「家綱」

f 夜深聞郭鳥 夏部232 本書・江本存、蘆本欠・朱細補「夜深聞時鳥」

g 五月雨の心を 同部301 本書・江本存、蘆本欠・朱細補「さみたれを」

h 浮身新古今には山田のおしね をしこめて世をひたすらにうらみつる哉(朱) 秋部475歌 本書・江本朱傍記本行本文

i 続き続古今あき萩の下葉に月のやとりすは明てや露のかすを しらまし(朱) 同部492歌 本書・江本朱傍記本行本文

j ……前略……みな御心になんまかせ給へり神ちからをあはせ給ふあまりに糸竹のこゑたえす……下略…… 同

部504小序 本書・江本朱傍記略同本行本文

k 秋の山の月をみるといへる事を 同部538詞 本書存、江・蘆本朱細補

l 手枕をくイ下同てく(青)かけてしおそろしみいれはやいひましね(朱)おろ人いひましみはひましねはひましねひみつまのかしとねより 恋部下歌 1191

本書・江本ハ、

手枕をくけてしくれは(五)おそろしみい(五)やはひましねみつのかとより

と、稍々細部にわたるが十余例のきわだたしい異同を瞥見し、本書と蘆庵本―後述する第三類本系は大略同じくする―とは、やはり同一本系類として対処し得なくなるのである。それに対して羅山旧蔵本はk例を除き上掲諸項は殆んど其本文が同一であることは系類上見逃しがたい重点でもある。又、別註註するごとく両書は微細な語句上の異同も尠く、前掲のイウチの羅山旧蔵本の欠落本文を除けば同一系統上の伝本として措置し得るのである。が、本書はその点に於て現存伝本の系類の上からは疎縁な伝本といわざるをえない。

しかしながら、猶臆測すれば、そのひとつは、羅山旧蔵本の欠落本文すべて―書陵部A本に対する―が、第二類本系たる該本の脱漏本文とすれば、本書はその欠陥を補う本文を具備した伝写本ともいえよう。しかし、その仮説を確認するには、すくなくとも江戸前期に遡る類本の伝存を要するであろう。既に本集に於ても第一類契沖自筆書写校合本とその転写数本との間に所見した校訂本文の形成経過を顧りみないわけにはいかないからである。

そのふたつは右記のごとき校訂経過を想定し、第二類本系一本に、例えば羅山旧蔵本にみる朱補校合が、転写の途次に於て本行本文化の整定が施されたとすれば、本書に極似する伝本として変様しうるのである。因みに、前掲の羅山旧蔵本の欠落本文八例中、その五例には朱補校合が書入れられているのである。その本行本文化のことを思うのである。蘆庵本を含め第三類本にも同様な想定は可能ではあるが細部な語句上にまでわたる本書本文との差異においては前者と異なるのである。

結局、本書は現時点に於ては類別は困難であり、想定される可能性として二つの仮説を設け、その孰れであれ、第

二類本系の伝本のひとつとして措定してみたのである。

本書の系類を探るべく結論を急いでしまつたが、次に当該巻の異文・排列・書入れ等につき概要することにする。

まず、当該巻に所見する異文―これも第四類書陵部A本に対するものにすぎない―は、次の一例を除き、第二・三類本系は共有している。

まず、その一例であるが、卷二夏部巻尾に、

異本云
元永元年六月十六日^{丁卯}修理太夫亭にて／柿本人丸供の時杵頭俊頼朝臣

夕日さす野守のかゝみかひもなしふれける風の影しそはねは

真名序等有会者各詠哥あり哥二行七字

と、「異本云」として、「柿本影供記」に録す俊頼歌を付記している。本集伝本中には該当する「異本」を見ぬ。

「影供記」異本に拠る書入れを転入移写したのか。村上忠順の「標註」付載、「散木弃詞集脱漏歌」中には「古今著聞集」のそれを抄録している。猶卷九雑部上にも類歌書入れを本行本文とするところがある―後述―。

右記以外は既に繰返し揭示する処であるが、念のため参考までに揭示しておく。即ち、

1 ^{玉葉}七夕のかへるあしたのしづくにはあまの川なみ立やそふらん たもとイ 秋部388歌

2 丹波前司重房の家にて女郎花をよめる 同部403詞書

3 九月十三夜法性寺関白殿下にてよめる 同部536詞書

4 皇后宮の弘徽殿におはしましける比細殿にて人に物申けるに女房のうへへのほるとてみち見くるしとてしはし
たてと女官の申ければたちて殿上のかたへまかりけるをのちにまいらすと侍けるにまいりやするとまぢけるに見えさりければかれよ

りをくり侍りける 恋部下 1230 詞書

である。書陵部 A 本とは林羅山旧蔵本の処に对照した。上掲第二類本諸本共に類同しながらも、本書は校合傍記をのぞけば微細な点で羅山本とよく合致している。

次に 本書当該巻の排列の異同は

(一) 夏部 223・225・224・228・229・226・227・230、(二) 同部 263・265・264・266

の二例であるが、羅山本以下、第二・三類本諸本に共通している。

又、その書入れには、

イ 万云引哥 石見の海うつたの山の木間より我ふる袖を妹みつらんか 春部 71

ロ 拾ヒサカキ 俗ひしやゝきと云ヒサカキ 卑榭の略なるへし 春部 179 第四句注

ハ 万云 アラタコノスコカ竹カキアメニヨリソノイモシミエスハ我コヒメヤハ 夏部 354

など所見される。イ・ロは第一類契沖本以下転写本に見出される書入れであるが、ただ二例のみにすぎない。ハはイと共に第二類本諸本、又第三類本系では蘆庵本・初雁文庫本等にも存する前掲の例歌であるが、揭示したごとく、イロは平仮名交り、ハは片仮名交りと表記の統一を欠いている。聊か気になるところでもある。

又、その本文中には、間々「イ」本校合、諸集との校合を傍記する処が散見される。がそのなかの一部は第一・二類系本のそれを継承したとしか思われぬ箇処がある。二・三を拾うと、

39 第四・五句 消ぬややかて春の初花イ きゆるそ春のしるし也けり―忠・江・信・蘆・初本イ校同傍記、契本系ハ同文朱校「新拾」トス

41 第三句 新後拾をとはのイ をはつせ山の―信本イ校同、忠・江本「をとはの集」ト墨校合、蘆・契本系「音羽の新後拾」朱校合

156 第五句 花さくイ あせみさく也―忠・江・信・野・蘆・初本イ校同傍記

252 初句 千なとてかくイノいかてイ さしもなそ―神A・忠・江・野本イ校同傍記、蘆本「いかにイさしもなそ」朱校合、初・契本「千夏さしもなと」、志A本「千なとさし

てかくもなそ」

など、「イ」校の相互に符合する処が見出され、僅か四例を掲示するにすぎないが、そのすべてが忠房・羅山両旧蔵本の江戸前期にまで遡り得ることは留意されるのである。同時に付記したごとく羅山本系と四例を共に同じくすることも本書当該巻が羅山本系の類縁上にあることを示唆するのではなからうか。又、些事ながら、その集付に於ても過半を共有―他は後補のものと推定される―するのも単なる偶然の暗合とは思われぬのである。

偕、本書巻九・十雑部上下両巻についてであるが、本集伝存本に於ける此両巻本文の異同は極めて尠く、その系類のパターンも然したる変化もなく略二種類の系統上の伝本より派生した異同にかざられるかと推測される。それは伝存本四類が、八巻本と十巻本とに基本的に岐れ、八巻本との補綴の形態が第三類系までの主たる伝本の様相であるからでもある。本書両巻も前述したごとく同様な構図の許に成ったものかと思われる。

例に倣い、両巻の異同を観ることにする。まず欠落本文―繰返すが書陵部A本に対する―の著しきは、

1 阿闍梨 雑部上 1304 作者 第一類本・信・野本(第二類)・岸・蘆・初本(第三類)・類・永・宗本等(第四類) 同欠

2 永縁 同部 1324 岸・初本欠、蘆本補カ、類・宗本同欠

3 ちぎりしことゝもをわすれにけるにやことさまにおもふ也 にけりとぎこゆる人のかりつかはしける(書A) 同部 1379 詞書

第一類本(大本ハ類本ニテ細補)・野・蘆本同欠

4 つく 雑部下1601和句詞書

の四例を所見するにとどまり、系統類別上の要因とするには余りも不備である。強いてその差異を探れば第一類本系と第二類蘆庵本とが類同する程度であり、本書の両巻は4のごときを単なる誤脱とみれば蘆庵本に次いで近似するとても云えようか。もつとも蘆庵本には雑部下1541「しもつけ うらみてもなにゝかはせん云々」歌を欠落するが又大同小異である。

又、本書に所見される異文も殊更に顯著なるをみず、第一〜三類本系のそれに準ずる。

例えば、雑部下1621詞書の、

伏見の山さにてあそひともをあるしひしのをかれイこしたりけるをたてこもりてねたりけるを

あそへなとかうてはなといひけるついでに―書A本左傍点部分ヲ欠ク

などその代表的なものであるが、第一類契沖本以下第三類本は略同一であり、第四類本系に於て書陵部A本等に看るがごときである―但し右例文中の右傍記校異は第一類本に所見し注意される―。これも又、本書巻九・十両巻の系類上の拠点とすることとはなりがたい。

次いで、その排列の異同をみるに、雑部上1467番歌は、

世中をうらみて過す高せ舟声打そへてからるをす也 同1470

すかしまをわたるあきさのをとなれやさ空めかれてもよをすわたるくす哉 同1467

と配されている。本集伝本には類例なき歌序である。歌群は「恨躬恥運雑歌百首」の中にあり、排列の移動については、その積極的理由を見出しがたい。ともかくも、本書独自の異例な歌序である。又1467歌中の傍記校異も第一類契

沖本系と同じくする。

又、同歌群の中に、

心には思ひすてゝしよなれとも身はなけれぬ物にそ有ける 同 1477

年千ことに泪の川にうかへとも身はなけれぬ物にそ有ける 大江公資

と、その類歌がその儘に本行本文として書写されている。その源は、契沖本以下第一類本―但し李花亭文庫本欠―中に見出す朱書入れである。如何なる経過による混入かは測りがたいが、契沖本との交渉の跡が看取されるのである。更にもう一例を挙げると、雑部下「折句哥」の許に、

新拾遺 さつき闇といふことを 俊頼朝臣

さゝのはの露はしはしも消残るややはかなき身をいかにせん

と双行細記している。これも又、契沖本以下第一類本―但し李花亭文庫本欠―に所見する朱注書入れである。かく書入れの移写という点に於ては契沖本系のわずかその一部であれ顕著な一致を見出すのである。この類同性は又、校合傍記にあつても同様な類似点が散見されるのである。瞥見するにしたがい、いさゝかを掲示することになると、

雑部上 1244 詞書……………いかやうにかさもさふらひぬへきイ無さまにやしイさイふらうへきと申ければ……………つかまつりける

―契本同、同第五句君のみそ見ん―契本同、同左注こイそのたひなりけるとそ―契本同、1321 第二句なみさへさはクイそふ―契本

同、1325 詞書……………家道君……………契本同、1326 作者家道朝臣―契本同、1327 第五句舟つくるイくたす也―契本同、1383 第五句蘇かしあよけ

ん―契本同、1432 第五句たもきるなるかな―契本同(但シ「イ」)、1435 第四句けこのはれしても―契本同(但シ「イ」)、1484 第二

句さかゆく身道イかは―契本同、雑部下 1531 第四句かるもことにしつゝ―契本同、1602 和句たうそとくりまいきてまひよるほへは―

契本ソたうとくりきてまひよろほへは、1612 唱句作者ホイ承源法印—契本同、1614 和句作者君甲斐公—契本同、1615 唱句作者権源中納

言国信—契本同、1617 唱句詞書堀河院御時内侍所のイへ供御……—契本同、1618 唱句作者或イ有僧—契本同

等散見され且つ符合する。のみならず、契沖本に屢々付注されるところの堀川院次郎百首・夫木集の朱校異も可成りにわたり移写され、又、集付注記も多くが転写されているごとき同本系とのかゝわりは否定しがたい。それらは、しかし孰れの時か、如何様なる経過かは審らかにしがたいが、本書両巻の祖形として契沖本系を想定することは可能ではなからうか。八巻本と両巻の補綴は既に契沖本にも又葉山信果本にも第三類蘆庵本にも屢々看取されるところであれば、本書の成立ちにおいても同様な過程は予測されるのである。しかし、明治末年の書写本である本書の直接の依拠本は既にかかる形態として成るところの—既述した如き—一伝本であつたらうと推測されるのである。本書を第二類本系として指定するには種々の異議が猶存するが現時点的結果として、ひとまず対処したのである。

註 両書に所見する語句上の異同を、目に付くままに拾綴してゆくことにする。

春部 26 第三句あこのこれイこのこなを（本書）—このうなを（江、以下同）、34 第五句つくにや有けん—つくにや有らん、38 第二句もち月に—もち月にもる、54 詞書……これ哥によめなして……—これ哥によみなして……、60 詞書……かほれるをよめる—……かほれたるをよめる、86 詞書……たうへけるつゐてに……—たへけるつゐてに……、95 詞書……仰ありけるに……—……仰ありたるに……、同……速にいけと速にいけと……—……速にいけと……、103 第三たのむ哉—涼む哉、113 詞書……永縁に……—……教縁に……、116 初・二句やさしやな谷のしとねに—かさしきな苔のしとねに、119 第四句かほるは風の—かほるそ風の、122 詞書……白川の花見に……—……白河の花みにとて……、130 詞書……人々又まかりて……—……人々又まひりて……、146 詞書……永縁に……—……教縁に……、149 第五句すくす成けり—すくひ成けり、156 第四句つゝしかけたに—つゝしかけたに、162 第五句たねをかしつる—たねもかしける、167 第三句はまくりも—はまくりを、177 初句雨ふれと—雨ふれは、181 第

三句松か枝に―梅かえに、182詞書……藤のさかりなりと……藤の花さかりなりと……、187詞書……いひつかはしたり
 けれと……いひにつかはしたりけれと……、192詞書……心をよめる……心を、同第五句春そ暮ぬる―春も暮ぬる
 夏部 196第五句春はこひしき―春はさひしき、202第五句へたてさりける―へたてさりけり、205第二句懸しまの―かへしまの、
 210初句今日くれば―世にふれば、217第四句よをうの花の―よのうの花の、240第二句ぬるよもあらは―ぬるともあらは、248第
 二句啼音の影し―なくね。かけし、256第四句しのひねすると―しのひすと、263詞書……白川の家にて……白河にて
 ……、264第二句ゆふけとふ―ゆふけとり、274第二句なけきの杜に―気色の杜に、281第四句おりたちける―をり立にけり、290
 第二句軒のしのふし―軒のしのひし、同第四句ふけるあやめも―ふけぬあやめも、296第二句なつかしかりし―なつかりし、
 320初句あちさるの―あつさるの、327第五句人はかる也―人はかりなり、352第五句折もこそあれ―軒もこそあれ、358第四
 五句袂いとなく鮎子くむらし―たもいとなくこひえらし、365第二句はすのたち葉に―すのたち葉に
 秋部 374第三句暮もあるを―暮もあり、381詞書……心を……心をよめる、394第四・五句しかへて君かつま草にしつ―しかひ
 て君かつま草にせん、396第三句帯にして―たひにして、405第二句露のしからみ―露もしからみ、425第五句露しめりつ―露し
 けりけり、439第二句はこものかこひ―けこものかこひ、447詞書田上にて……田うへにて……、457第四句萩のはすゑに―萩の
 はすゑに、463第四句こしけきたひの―こしけき谷の、469第五句むろの八島は―むろのやしまに、476第二句いな葉はこへる―
 いてはこのへる、480詞書……扇合に……扇合、492詞書……萩の露に……萩の原に……、499第三句もる月―照月
 は、504小序くさむらもよしはみて―草むらもよしはみて、同おさくしさも―おさくさも、同松のほつとを―に―松の
 ほつとをくに、同まかせたまへり―まかせ給へりし、同あまのみそらには―あまのみくには、同あくかれぬるにや―あくか
 れうせぬる。同かたくなはしき身の―かたくなはしきことの、同しほめるけしき―しほあるけしき、同おそろしけなれと
 ―おそろしければ、505第四句とおもへはいなや―思へはいなや、521第四句いかていくの―いかていくよの、525第四句めも
 あやにこそ―めまあやにそ、527詞書……前中宮にまうて……前中宮によみて……、530詞書……あはれにきこえければ

よめる―……哀なりければよめる、541初句ちりこめて―ちりこにて、547第三句白菊は―白菊の、565第二句花さく秋に―はな
ふく秋よ

恋部下1126詞書憑不遇―頼不遇、1131第五句あさ衣かは―あさ衣とは、1133第四・五句あみけるぬまにやつれてそふる―あみける

ぬたにやつれてそをる、1149第五句なかへきぬらん―なりつきぬらん、1151第二・三句となりの壁はくつるとも―となかの

へはくつせとも、1163第四句いつかはしもの―いつかはしみの、1165第三句秋のえの―萩のえも、1166第三句我こふる―かるこふ

る、1172第四句我をはとはて―我をは (三字欠) 1174第四・五句みきとてしひてしはしもらまし―みきとていひししはしもらさ

し、1178第四句あくけもなく―あかけもなく、1179第二句あさかのうらの―あくこの浦の、1187初句はるけくは―はるけ

くも、1200第二句かきやらんとそ―かきやらしとそ、1202詞書……雨中恋と……―……雨中鶯と……、1208第四句こんとたのめし

―こひとたのめし、1212詞書……女のおほしくて……―女のおほしくて……、1223第五句とまらさりけり―たまらさりけり、1225

詞書寄馬毛恋と……―寄鳥毛恋と……、同第二句をくろにたてる―をくろわたてる、1242第四つゝにはとけて―つゝるにえとけて

以上、両本に瞥見する語句上の異同の大凡である。その異同は多く書写の上に伴いがちな相互細部な誤脱・写の類も尠くない。仔細に検すれば、その明白な異文は更に僅少な結果となろう。羅山本に看る朱校と本書本文、又イ本傍記との暗合も無視しがたいものかもしれない。両書は細部本文にかぎって看れば相互の密接なかわりは否認しがたいものがあるかと思われる。